

秋 田 市

上新城中学校遺跡

—学校改築に伴う緊急発掘調査報告書—

1992.3 秋田市教育委員会

序

上新城中学校遺跡は学校改築に伴い、昭和63年度から継続して調査を進めてまいりましたが、この度終了いたしました。

この地区は秋田市でも遺跡分布密度の高い地域の一つであり、特に上新城中学校を中心とした範囲は縄文時代から古代までの遺跡があり、早くから注目されている場所であります。

4年間にわたる調査の結果、遺跡の全容が明らかになり、縄文時代晩期の居住地を囲む溝跡、住居跡、土壙墓、土壙、さらに土器、石器など多くの遺構、遺物が発見されました。特に居住地を囲む溝跡の発見はこの時代では全国的にも発見例が少なく、縄文時代から弥生時代にかけての集落を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、その結果を収録したものです。本書が研究資料として広く活用され、また文化財愛護の一助となれば幸甚に存じます。

この調査の実施にあたり上新城中学校、地元関係各位に対し深く感謝の意を表します。

平成4年3月

秋田市教育委員会

教 育 長

長 門 伸 一

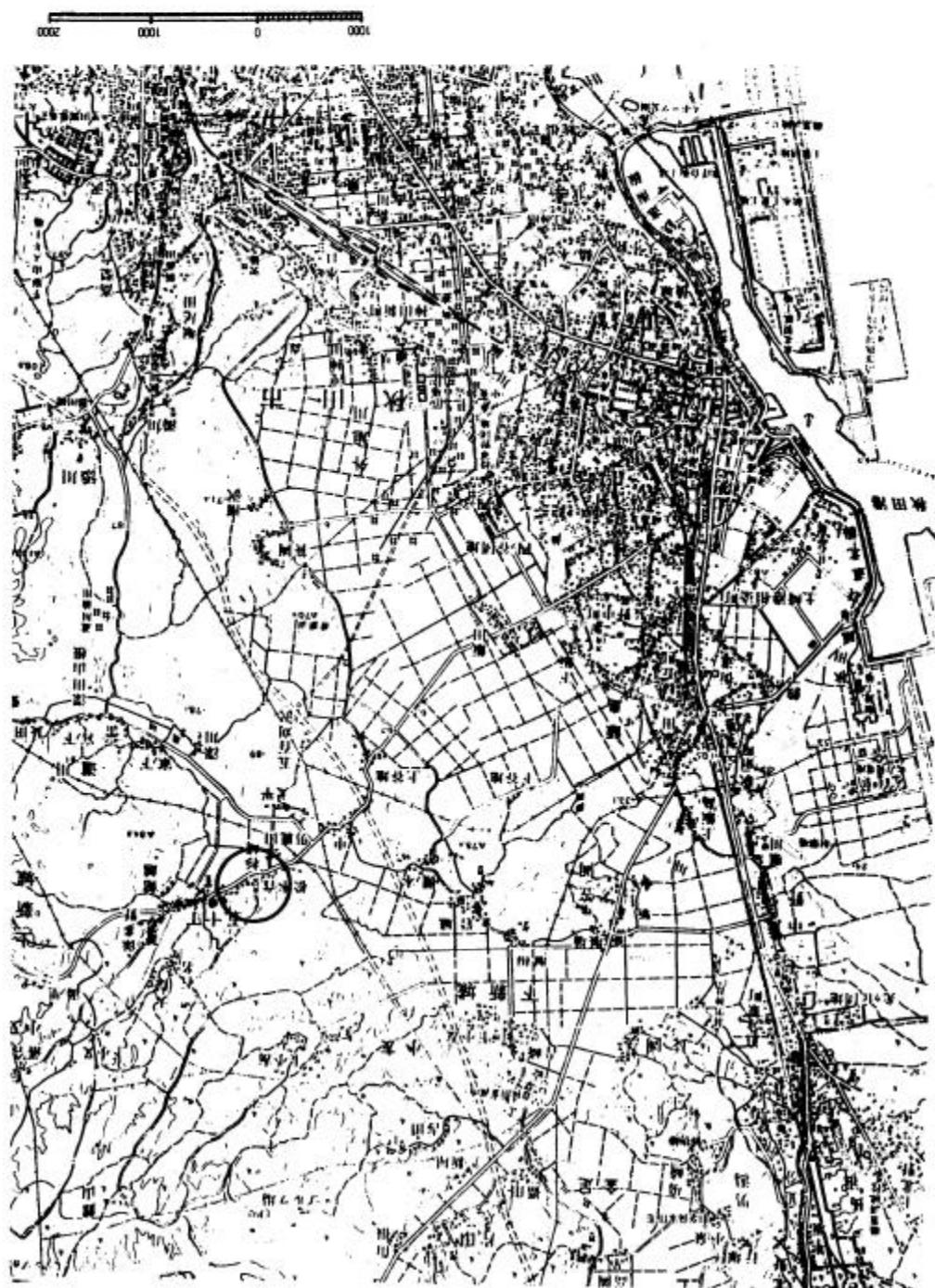
例　　言

1. 本報告書は秋田市上新城五十丁字小林190の1に所在する上新城中学校遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆は、石郷岡誠一、安田忠市、納谷信広が担当した。
3. 遺跡の位置と立地は、「上新城中学校遺跡とその周辺遺跡」（1973 秋田市教育委員会）の遺跡と環境の文章を利用し、調査区層序を付け加えた。
4. 遺構の平面図、土層断面図中のPは土器（片）、Sは石（礫）を示す。石器実測図のアスファルト付着箇所は黒塗りで示した。
5. 発掘調査による出土遺物、実測図、写真その他は秋田市教育委員会が保管する。
6. 昭和63年度、平成2年度調査分については、各年度において概報として報告しているが、今報告書において、再検討、総括のうえ本報告とする。

目　　次

序	
例言	
調査に至るまでの経過	1
調査期間と体制	1
調査の方法と経過	1
遺跡の位置と立地	2
発見遺構と出土遺物	5
まとめ	116

第1図 滅跡の位置



調査に至るまでの経過

上新城中学校敷地は、その全域が縄文時代晩期を中心とした集落遺跡である上新城中学校遺跡に含まれると考えられ、これまでにも隣接する林道工事、小グランド造成工事等に伴い発掘調査が実施してきた。

校舎の老朽化により新校舎が建築されることとなり、昭和63年度（旧校舎前庭部）、平成2年度（旧体育館跡地）、平成3年度（旧校舎跡地）の発掘調査が実施された。

調査期間と体制

調査期間	昭和63年度	6月13日～8月31日
	平成2年度	4月16日～6月14日
	平成3年度	7月24日～10月30日
調査面積	昭和63年度	1174m ²
	平成2年度	1160m ²
	平成3年度	1500m ²
調査主体者	秋田市教育委員会	
調査担当者	秋田市教育委員会	
調査員	菅原俊行 石郷岡誠一 安田忠市 納谷信広（秋田市教育委員会文化振興課）	
調査補佐員	五十嵐芳郎（秋田考古学協会員）	
調査作業員	相沢貞雄 泉金悦 佐藤和一郎 斎藤雄光 三浦政美 藤原アイ子 徳山京子 佐藤 トシ子 鎌田克子 佐藤スズ 泉サヨ子 佐田孝子 鎌田俊 若狭キミ子 石井ヤエ 石井タケ子 小柳絹子 佐藤芳枝 石井スジエ 渡辺フミエ 泉ひめ子 藤原アキ 佐藤イト子 佐藤タカ子 大渕真理子 渡辺リサ 大渕政子 吉木洋子 鎌田千代 佐藤祐子 佐藤キクノ	
整理作業員	伊藤秀子 三浦秋子	

調査の方法と経過

発掘調査初年度（昭和63年度）に校舎を中心に調査区を設定し、以降の調査においても一連の調査区とした。原点を任意に定め、東西南北（磁北）に基準線を作り、調査区全体に大グリット（40m×40m）を設定し、さらにその中に小グリット（4m×4m）を設定し、単位グリットにした。大グリットは（1～15）、小グリットは東西（X軸）に数字（1～10）、南北（Y軸）にアルファ

ベット（A～J）を配し、その組合せによりグリットの呼称とした。（第3図）

調査区の表土（第1層）及び黄色粘土盛土層（第2層）を除去すると遺物包含層である暗褐色土層（第3層）が認められたが、北側を中心広い範囲で削平されており、旧校舎建設に伴うものと考えられる。また南西側には沢状の落ち込みに多量の遺物を伴う厚い遺物包含層が、認められた。昭和55年の調査報告書において土器の捨て場と推定された地区である。第3層を除去すると、地山層（第4層 北側は黄色粘土、南側は砂礫層）が認められ、4層上面における精査により、溝跡、土壙墓、土壙等が確認された。

遺跡の位置と立地

遺跡の位置（第1図）

上新城中学校遺跡（秋田市遺跡詳細分布調査報告書NO119）は秋田市上新城五十丁字小林にあり、上新城中学校を中心とした一帯である。秋田市街から北へ直線距離にして約9kmの地点で、秋田から土崎を通り、飯島字長野、飯田を経て、秋田中央交通バス停留所「上新城中学校前」の斜面の道路を登りきった標高約35m前後の南面する段丘上に位置する。

遺跡周辺の地形（第2図）

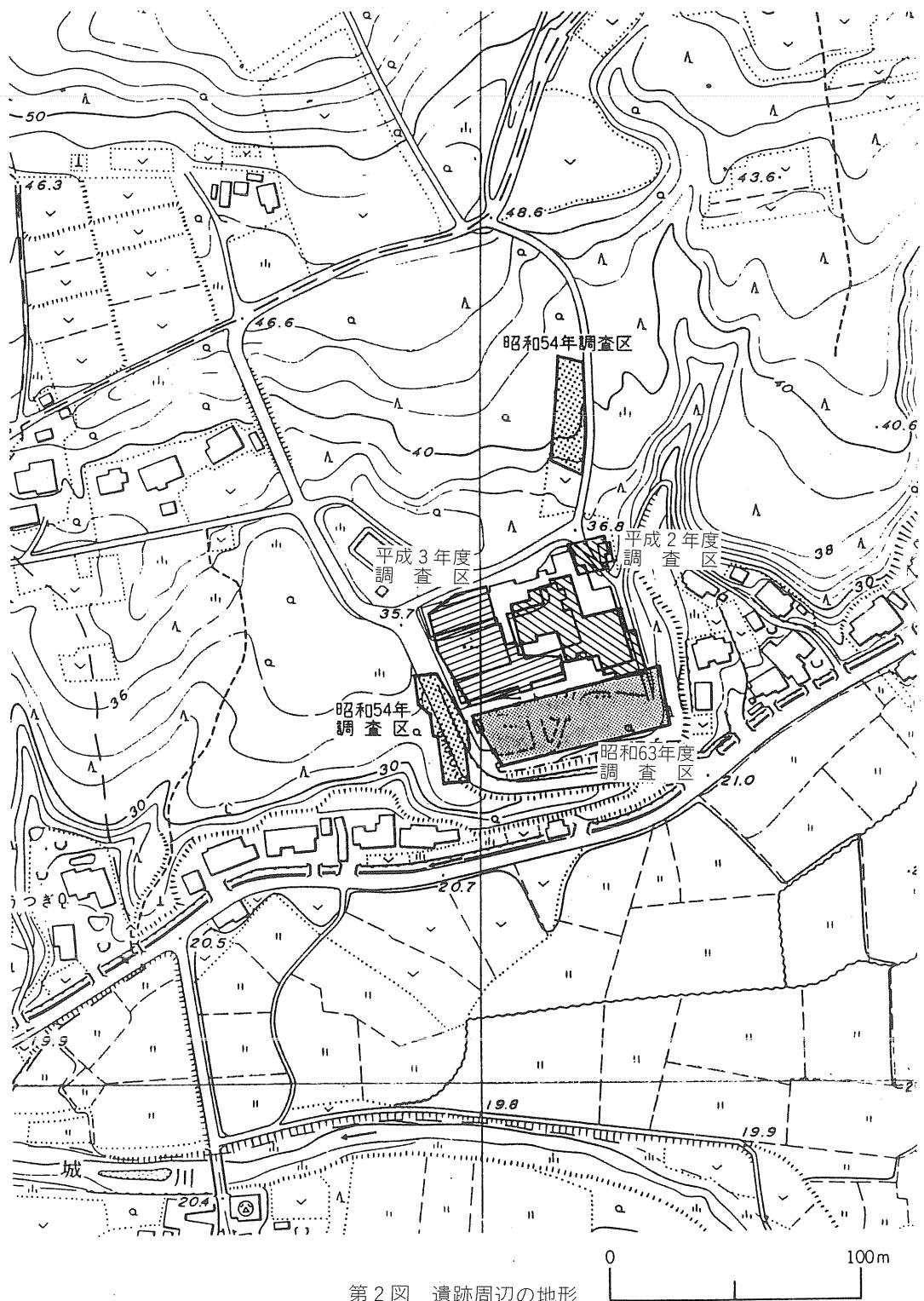
上新城地区は太平山塊に源を発し、日本海に注ぐ長さ約20kmの新城川の上流部に位置し、新城川とその支流の愛染川との細長く二分した谷底平野と、それを挟むように分布する丘陵からなる。

この上新城丘陵は標高約60～200mのかなり開析を受けた地形であり、この丘陵の末端を南西に流れる新城川沿いには、数段の段丘がみられる（注1）。五十丁集落付近には上下2段みられ、上段は開析を受けた標高60～65m、下段は40～50mで、約10mの比較的急な斜面で上段と区別される。しかし空中写真と地形図から判断すると杉崎付近から五十丁集落にかけては、少なくとも上下3段の段丘が確認でき、前述の上下2段の段丘のほかに標高20～30mの段丘が認められる。

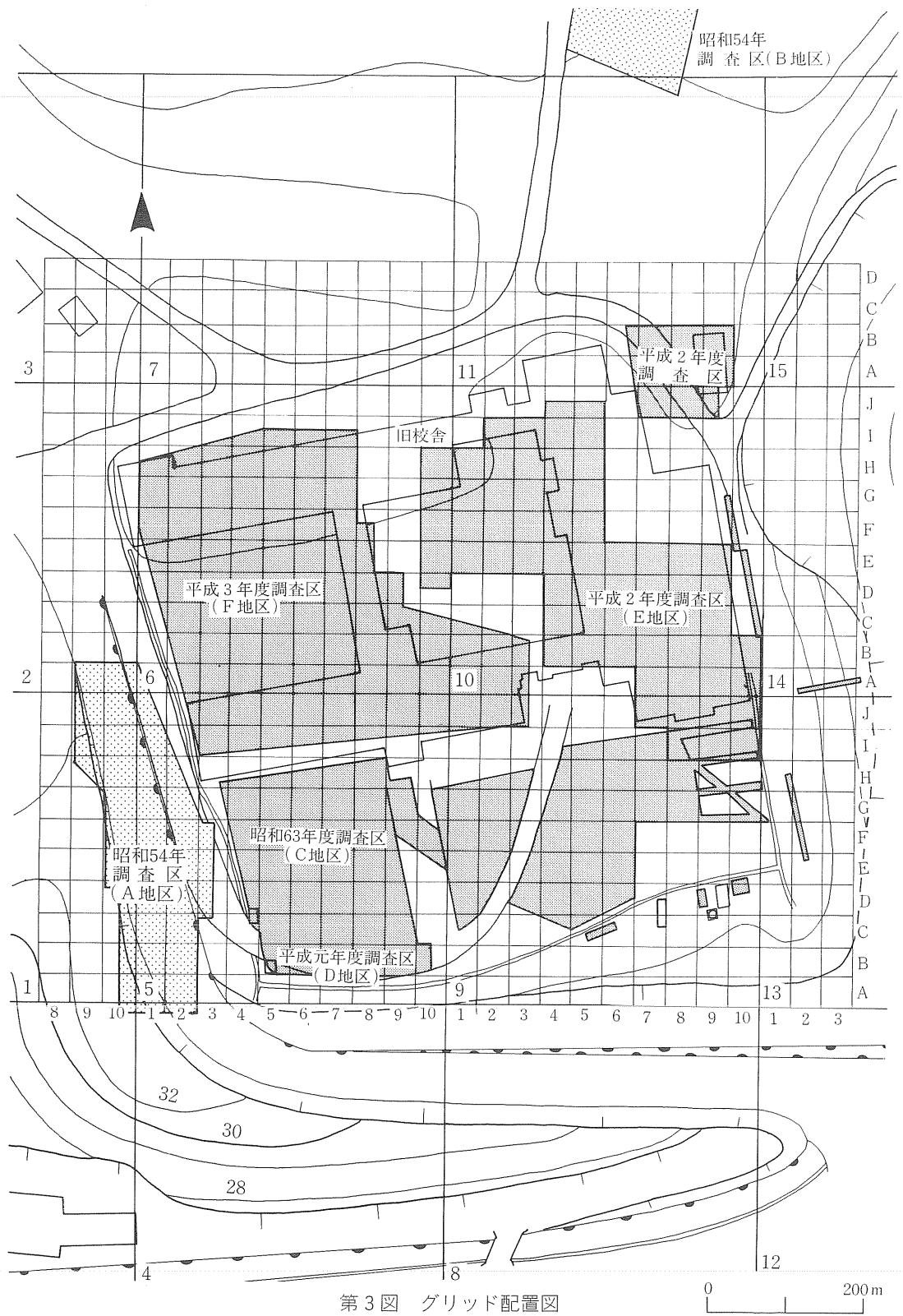
遺跡付近の地質・土壤

遺跡付近の丘陵並びに段丘を構成する地層（注2）は、基盤は新第3系中新世船川層で、その上には暗灰～灰色泥岩およびシルト岩で上方に漸次砂質化し、上部は微細粒の砂岩になる。この鮮新世笠岡層の上には寒風火山の噴火によるといわれる黄褐色の粘土質火山灰土が堆積し、最上位には亜円礫が混入する黒色土が覆っている。これはいわゆる高岡2統で、黒色の色調はそれほど強くない。一次鉱物を見ると火山ガラスが混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。現水田面はシルト主体の沖積層（西山統）である。

調査における層序は第1層が表土、第2層が体育馆造成時に丘陵上部より削り出したと考えられ



第2図 遺跡周辺の地形



る黄色粘土による盛土層、第3層が旧表土と考えられる暗褐色土層であり、遺物包含層でもある。第4層が発掘区北部が黄色粘土層、南部が砂礫層である。

(注1) 国土庁(土地分類調査) 秋田(5万分の1) 経済企画庁 1966年

(注2) 同 上

発見遺構と出土遺物

発見遺構

昭和63年から平成3年までの調査において溝跡、ピット群、住居跡、土壙墓、土壙、土器埋設遺構、炉跡が発見された。

溝跡

1. 2号溝跡(第4・106図)

遺跡段丘上の中央部よりやや東南側で橢円形を呈する溝跡が発見された。発見された長さは、約101m、橢円形の北から西～南にかけての部分であり、北東側約3分の1が調査区外である。全体の規模は円周約185m、長軸約59m、短軸約49m、長軸方位が北で約58度、西に偏すると推定される。

溝は西側と南側で二重となる。北側では内側の溝が認められなかったが、旧校舎基礎等による破壊が激しく、レベル的にも削平されている可能性は強い。溝の幅は約30cm、確認面からの深さは、概ね20～25cmであるが、北側は5cm前後と浅く旧校舎による削平と考えられる。

北側及び西側の溝底部には約40cm間隔でピットが確認され、ピット周辺の壁際には平坦面のある河原石が認められている。南側の溝底部には明確なピットは認められなかったが、壁際の河原石は北・西側より間隔は密になる。

1号溝跡出土遺物

土器(第19図)

9～12は埋土出土の鉢形土器片である。11は口縁部に細い沈線が一条めぐる。

石器(第25図)

すべて埋土から出土した。1～4は有茎石鏃である。1は茎部にアスファルトが付着している。5はつまみ部の上部が欠損する小形の石匙である。6はヘラ状石器、7は上部が欠損する磨製石斧である。



第4図 1・2号溝跡配置図

2号溝跡出土遺物

土器（第19図）

13～19は埋土出土の鉢形土器片である。13は頸部が外反し、胴部にかけてゆるく膨らむ鉢形土器で、太い沈線文と2個1対の粘土粒が貼付されている。14、15は沈線により工字文が施されている。15は口唇部に刻みが施され、口縁部は粘土粒と沈線による工字文を施す。胴部は単節斜縄文である。17は太い沈線による変形工字文が施されている。

石器（第25～27図）

すべて埋土から出土した。8は全長4.2cmの石錐である。先端部は鋭利で断面形は菱形を呈する。32、33は両面使用のくぼみ石である。33は半分欠損している。



第5図 ピット群

3号溝跡（第106図）

調査区の南側で発見された。1、2号溝跡に切られている。幅60cm～130cm、確認面からの深さ約10cmで、中に2条の小さな溝が認められる。

3号溝跡出土遺物

土器（第19図）

20～22は埋土から出土した。20、21は数条の平行沈線文が施文される。22は口唇部に山形突起があり、口縁部には沈線による工字文が施文される。

石器（第25図）

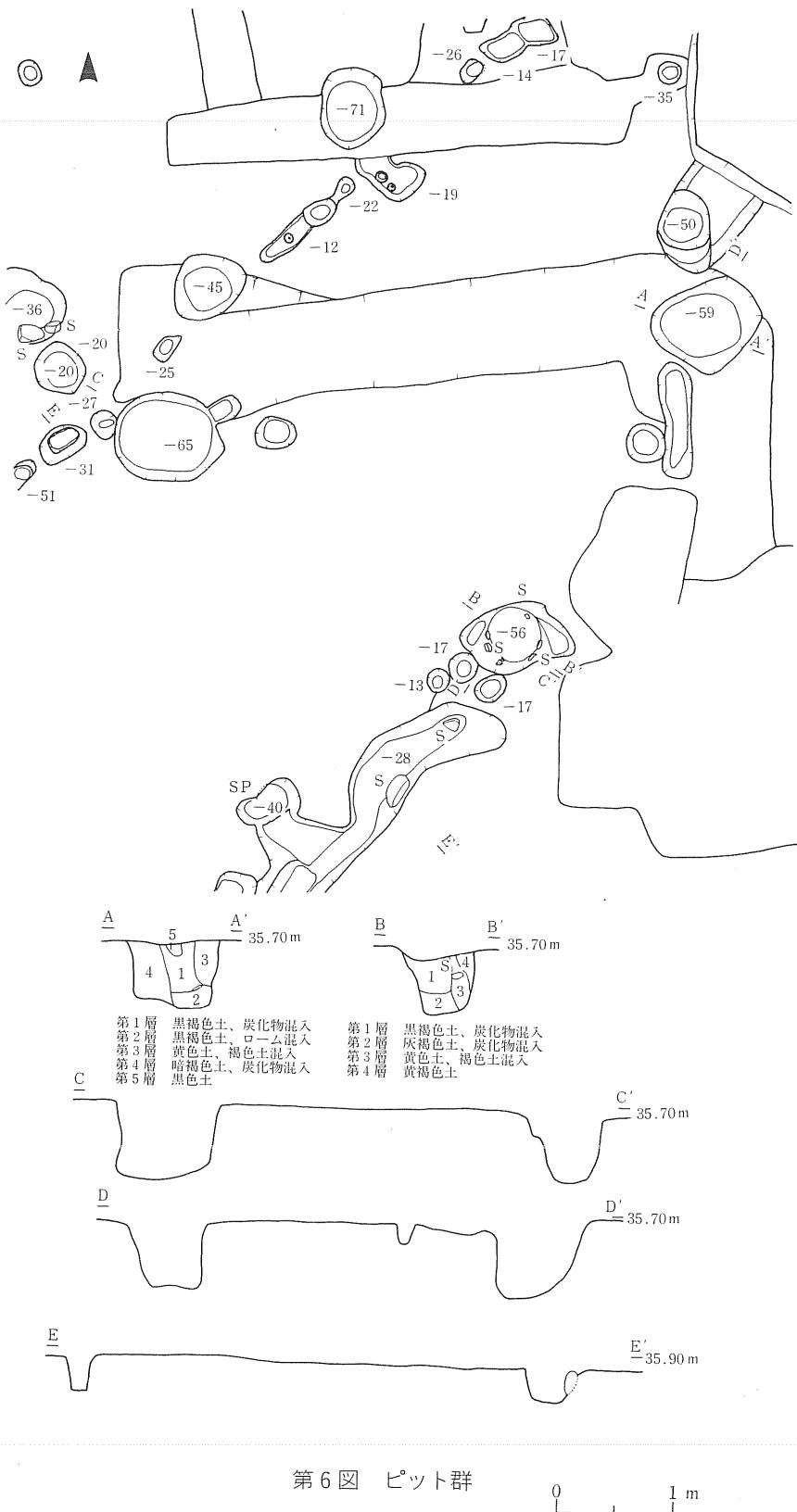
9は埋土から出土した。偏平な礫の周縁を打ち欠いて円形に加工した円盤状石製品である。直径約5.5cm、厚さ約1.7cmである。

ピット群（第5・6図）

溝跡の北側及び西側に途切れ部（北側約4m。西側約3m）が認められ、途切れ部の両端に1対のピットが認められた。西側は1号溝跡（7、8号ピット）、2号溝跡（5、6号ピット）に取り付く形であり、1号溝跡が認められなかった北側では、2号溝跡に取り付く形で1対（1、2号ピット）、その約3m内側に1対（3、4号ピット）、合計4対、8基のピットが確認されている。

ピットの径は1～4号ピットが40cm～50cm、5～8号ピットが70cm～80cmであり、確認面からの深さは1～4号ピットが20cm～40cmであり4号ピットが最も深い。5～8号ピットは70cm～80cmである。

明瞭に柱痕跡の認められるものもあり、柱穴と思われるが、溝の途切れ部に位置すること、1号溝跡、2号溝跡双方に同様の形で認められること等から出入口的な性格を持つ施設の可能性が強い。



第6図 ピット群

住居跡

1号住居跡（第7図）

調査区の南側で発見された。

ローム面にピットと炉が確認されたもので、規模、平面形等は不明である。炉は地床炉で、強く火熱を受けている。床はほぼ平坦である。

2号住居跡（第8図）

調査区の南側で発見された。

ローム面にピットのみが確認されたもので、規模、平面形等は不明である。ピットは多数検出されたが、主柱穴は径40cm～60cm、深さは63cm～70cmの4個である。炉は確認されていない。

3号住居跡（第9図）

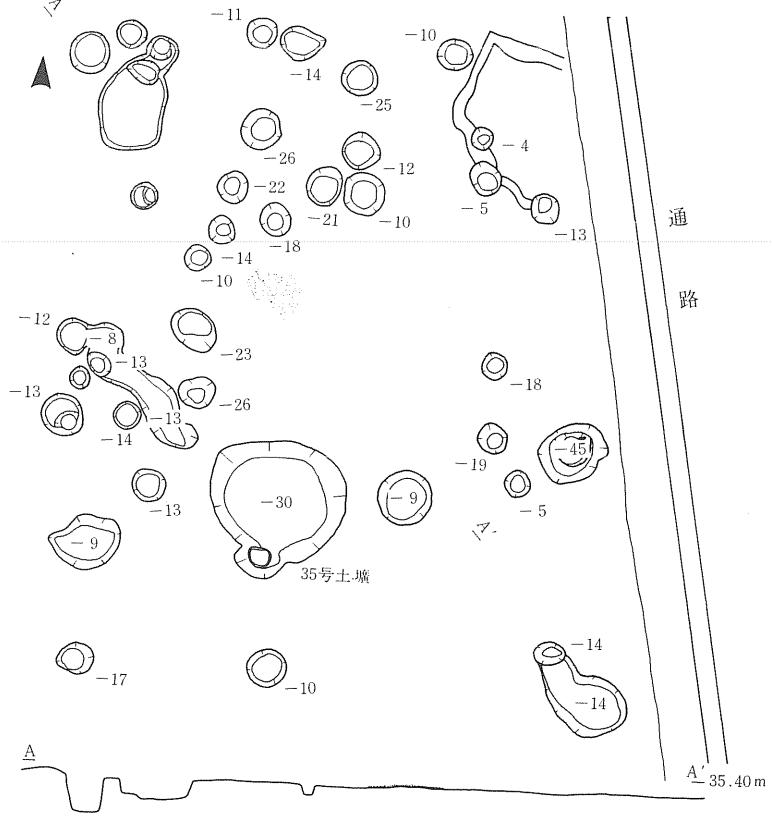
調査区の南側で発見された。

ローム面にピットと炉が確認されたもので、規模、平面形等は、不明である。ピットは多数検出されたが、主柱穴は径40cm～60cm、深さは62cm～75cmの4個であるが、1個は通路のため未確認である。炉は地床炉で、強く火熱を受け、礫が1個認められた。床はほぼ平坦である。

土壌墓

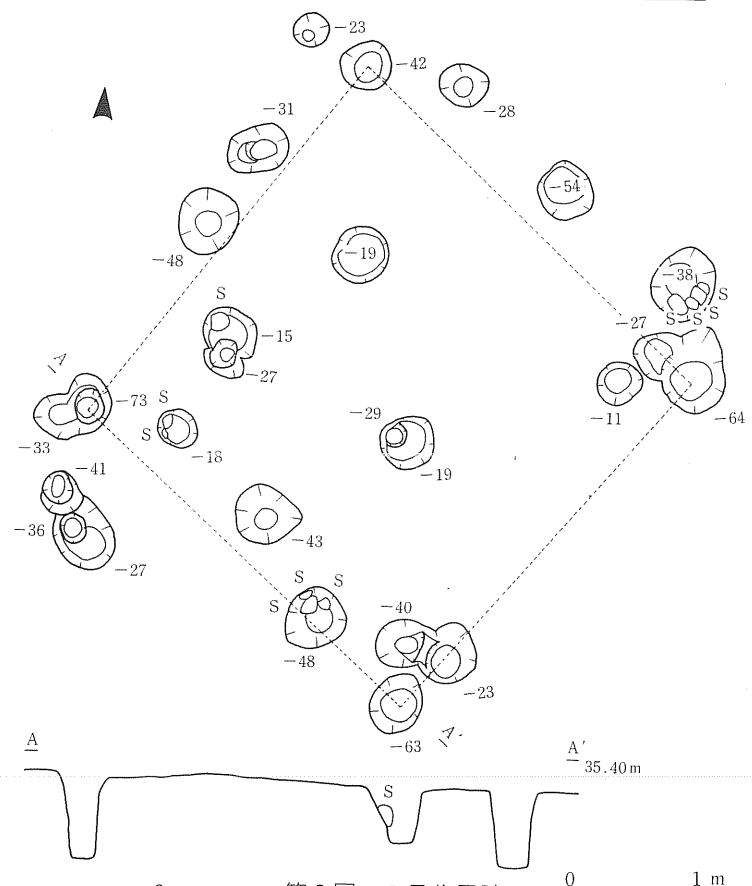
合計49基の土壌墓が発見された。

(表1)



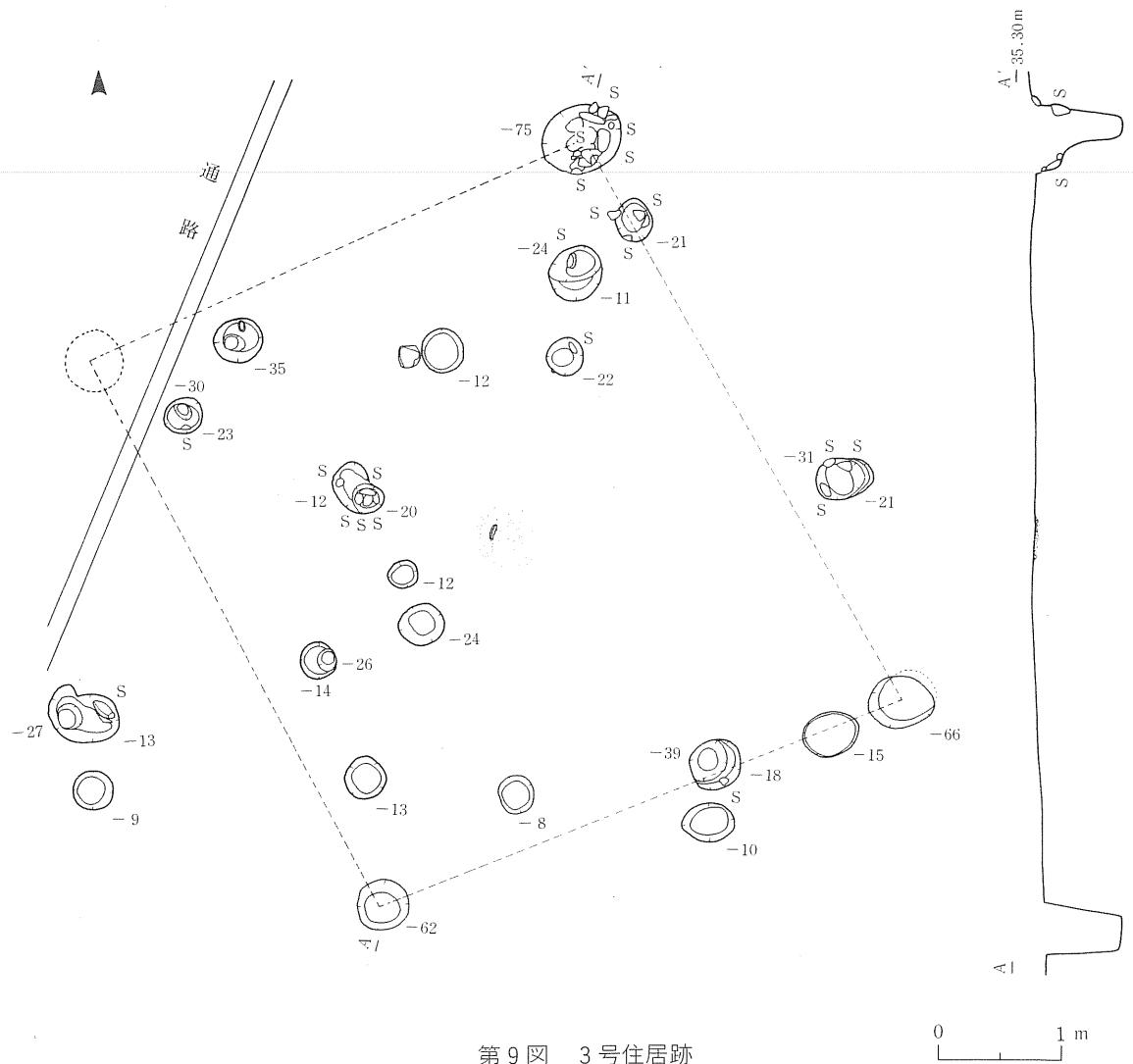
第7図 1号住居跡

0 1 m



第8図 2号住居跡

- 9 -



第9図 3号住居跡

0 1 m

土壤墓出土遺物

1号土壤墓出土遺物

土器（第19図）

23、24は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。23は口縁部片で口縁直下に細い沈線が施されている。

2号土壤墓出土遺物

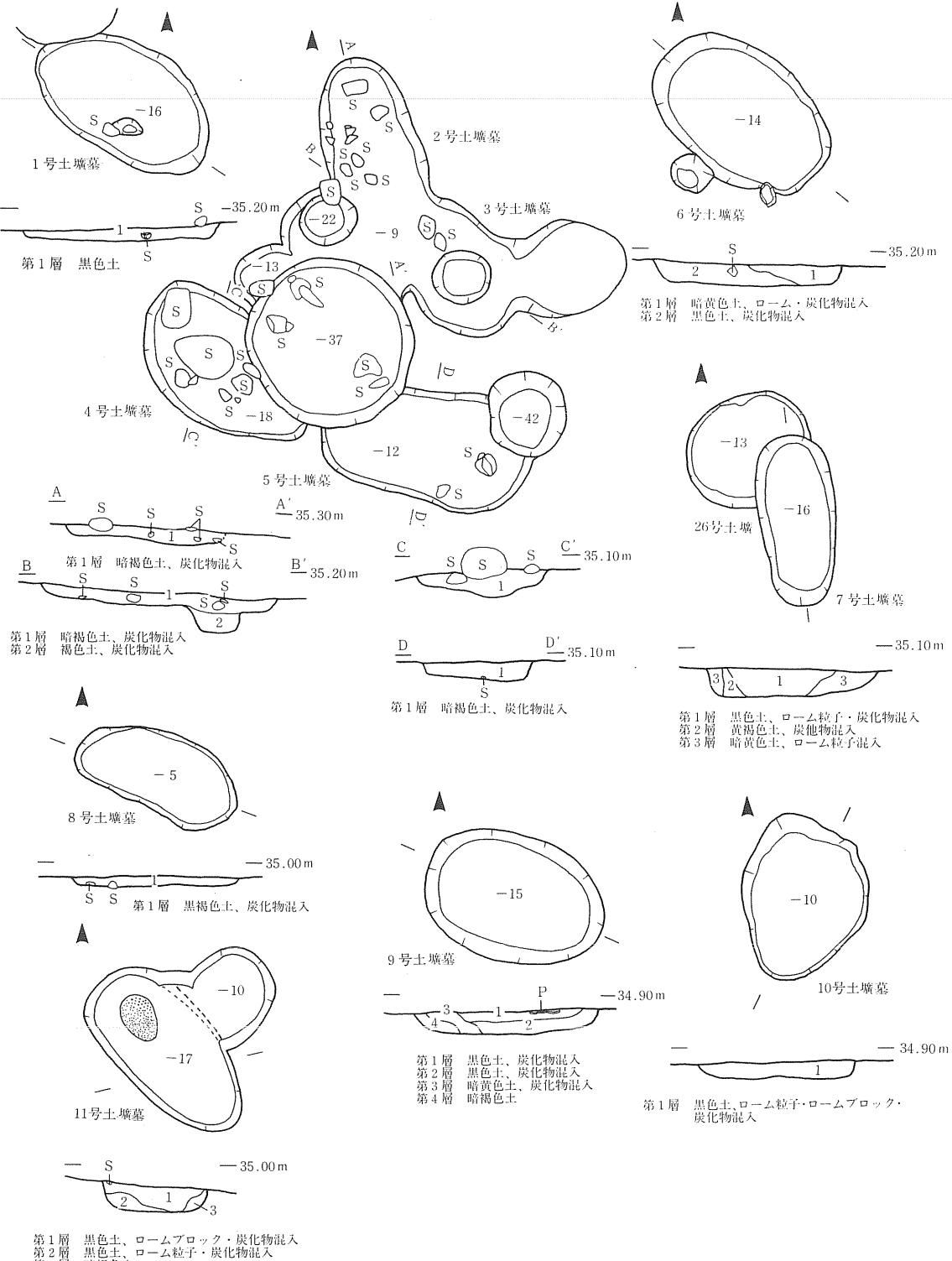
土器（第19図）

25～27は埋土から出土した。25は壺形土器の肩部小破片である。25は沈線により工字文が施される。

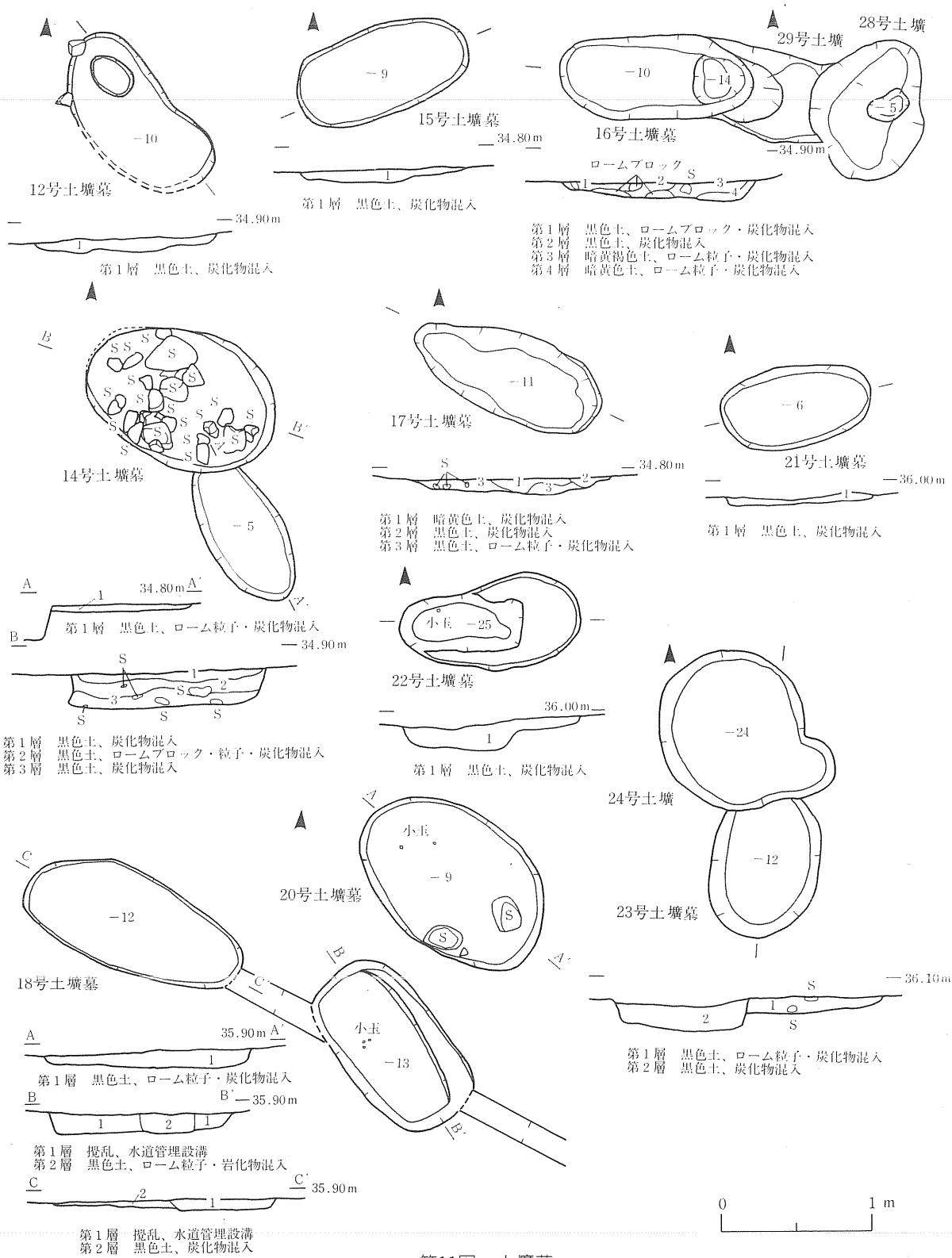
土 墓 一 覧 表

土壤墓 番 号	墳口部(cm)		墳低部(cm)		深さ (cm)	平面形	ベンガラの有無 と散布場所	頭位	長軸方向	出 土 遺 物	備 考 等
	長軸	短軸	長軸	短軸							
1	122	68	113	58	16	楕円形	無		N44°W	第19図23・24	
2	△102	60	90	47	9	楕円形	無		N 2°W	第19図25~27	3号土壤墓を切っている。
3	144	60	132	54	9	楕円形	無		N28°W	第19図28	2号土壤墓に切られている。
4	△122	72	△110	65	18	楕円形	無		N45°W	第19図29~31	
5	135	68	120	59	12	楕円形	無		N77°W	第19図32・33	
6	118	77	101	65	14	楕円形	無		N51°W	第19図34~36	
7	112	48	93	37	16	楕円形	無		N 4°W	第17図1、第19図37~39	26号土壤を切っている。
8	105	48	96	41	5	楕円形	無		N72°W		
9	115	71	97	52	15	楕円形	無		N65°W	第17図2、第19図40、第20図41	
10	101	△60	82	△52	10	楕円形	無		N24°E	第20図42・43	
11	122	△60	111	△54	17	楕円形	有(北西)	北西	N46°W	第20図44~46	
12	122	△59	113	△50	10	楕円形	無		N41°W	第20図47	
13	△92	50	△90	40	5	楕円形	無		N31°W	第20図48・49	14号土壤墓に切られている。
14	△130	89	△121	82	22	楕円形	無		N71°W	第20図50	13号土壤を切っている。
15	117	59	109	51	9	楕円形	無		N69°E		
16	△127	55	△115	38	10	楕円形	無		N83°W	第20図51~53	29号土壤を切っている。
17	132	56	113	40	11	楕円形	無		N67°W	第20図54・55	
18	△151	64	143	61	12	楕円形	無		N63°W		
19	125	68	108	46	13	楕円形	無		N38°W	第24図1・2	
20	137	92	127	84	9	楕円形	無		N47°W	第24図3・4	
21	99	55	90	44	6	楕円形	無		N86°E		
22	△108	58	△97	52	△25	楕円形	無		N88°E	第24図5	
23	△90	71	△80	55	12	楕円形	無		N 2°E		24号土壤に切られている。
24	194	73	163	64	13	楕円形	有(北東)	北西	N41°W		25号土壤を切っている。 旧1号(91年度概報)
25	140	76	△140	69	12	楕円形	有(中央)	西南	N59°E		24号土壤墓・26号土壤墓に 切られている。 旧2号(91年度概報)
26	95	△55	86	△55	13	楕円形	有(北西)	北西	N75°W		旧3号(91年度概報)
27	192	76	175	52	14	楕円形	無		N68°E		28号土壤墓と重複している。 旧4号(91年度概報)
28	141	82	125	70	18	楕円形	無		N20°E		27号土壤墓と重複している。 旧5号(91年度概報)
29	186	81	154	50	23	楕円形	無		N70°W		旧6号(91年度概報)
30	137	60	110	47	20	楕円形	無		N46°E		旧7号(91年度概報)
31	98	70	94	64	8	楕円形	無		N84°W		32号土壤墓と重複している。 旧8号(91年度概報)
32	△100	56	△100	45	10	楕円形	無		N78°W		31号土壤墓・33号土壤墓と 重複している。 旧9号(91年度概報)
33	104	92	△53	△45	12	楕円形	無		N33°W	第24図6・7	32号土壤墓と重複している。 旧10号(91年度概報)
34	188	58	152	42	12	楕円形	無		N73°W		旧11号(91年度概報)
35	132	76	98	53	29	楕円形	無		N55°W		旧12号(91年度概報)
36	△124	86	△106	70	24	楕円形	無		N79°E		37号土壤墓と重複している。 旧13号(91年度概報)
37	△130	△60			27	楕円形	無		N14°W	第20図56	36号土壤墓と重複している。 旧14号(91年度概報)
38	96	62	72	48	16	楕円形	無		N70°W		旧15号(91年度概報)
39	△128	67	118	42	41	楕円形	無		N40°W		41号土壤墓と重複している。 旧16号(91年度概報)
40	146	44	130	35	16	楕円形	無		N45°W		41号土壤墓・42号土壤墓を 切っている。 旧17号(91年度概報)
41	△100	72	△90	54	24	楕円形	無		N88°E		40号土壤に切られている。 39号・42号土壤墓と重複し ている。 旧18号(91年度概報)
42	△110	52	△100	38	14	楕円形	無		N46°W		40号土壤墓に切られている。 41号土壤墓と重複している。 旧19号(91年度概報)
43	124	98	112	66	20	楕円形	無		N18°E		44号土壤墓と重複している。 旧20号(91年度概報)
44	△110	58	△104	44	8	楕円形	無		N21°W		43号土壤墓と重複している。 旧21号(91年度概報)
45	94	55	60	58	12	楕円形	無		N51°E		旧22号(91年度概報)
46	151	116	102	58	33	楕円形	無		N33°E		旧23号(91年度概報)
47	146	73	116	50	22	楕円形	無		N68°W		旧24号(91年度概報)
48	134	78	119	48	19	楕円形	無		N62°W		旧25号(91年度概報)
49	138	70	68	33	18	楕円形	無		N79°W		旧26号(91年度概報)

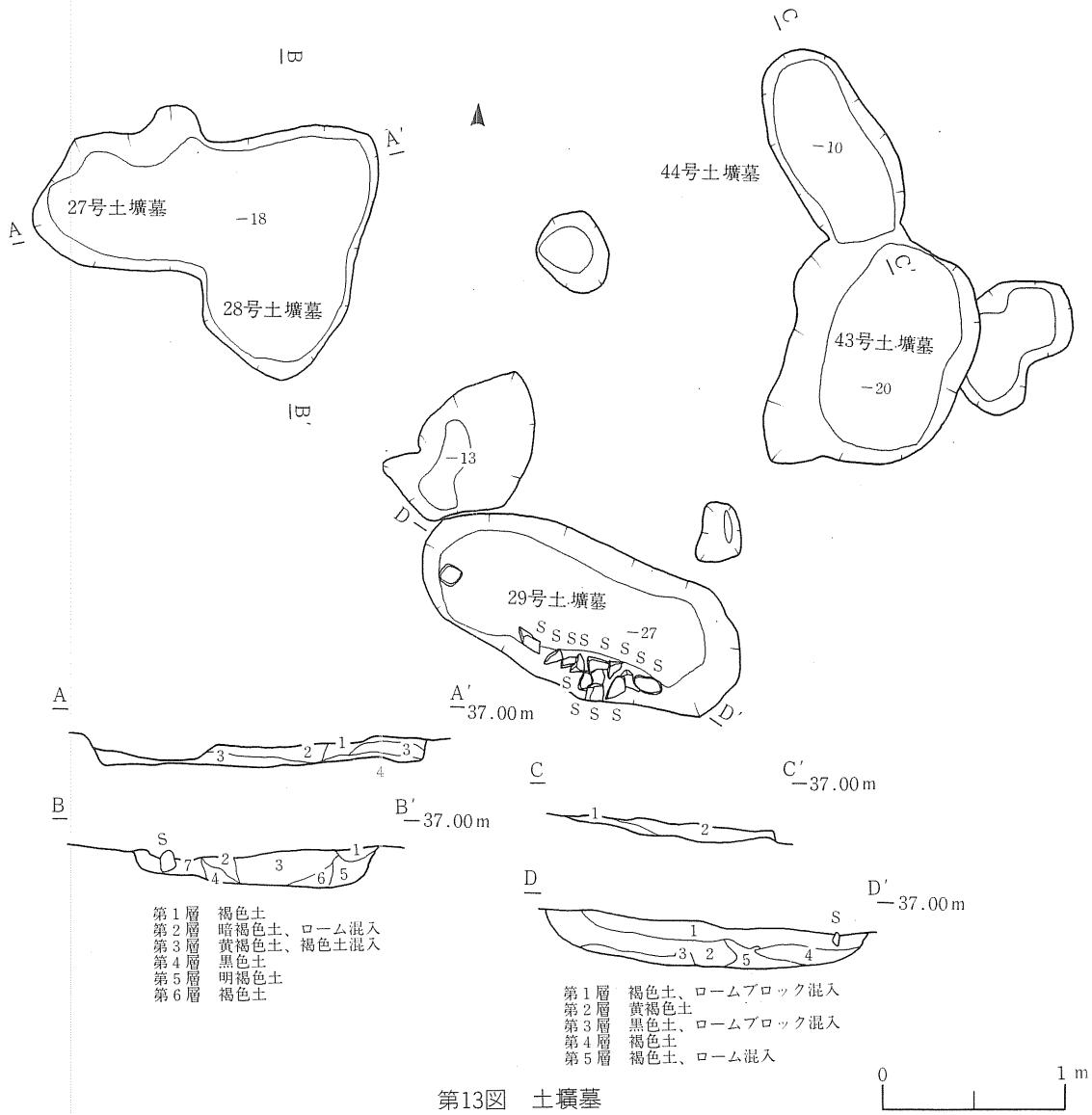
△推定の“規模”もしくは“以上”を示す。



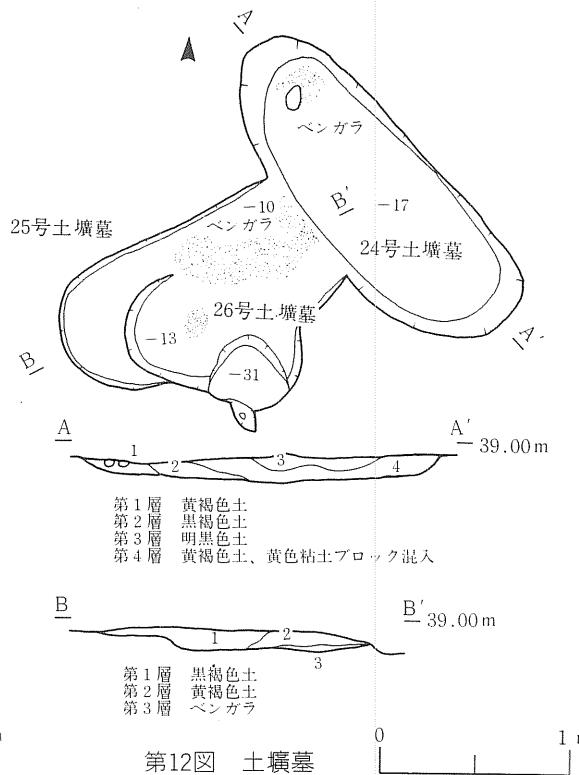
第10図 土塚墓



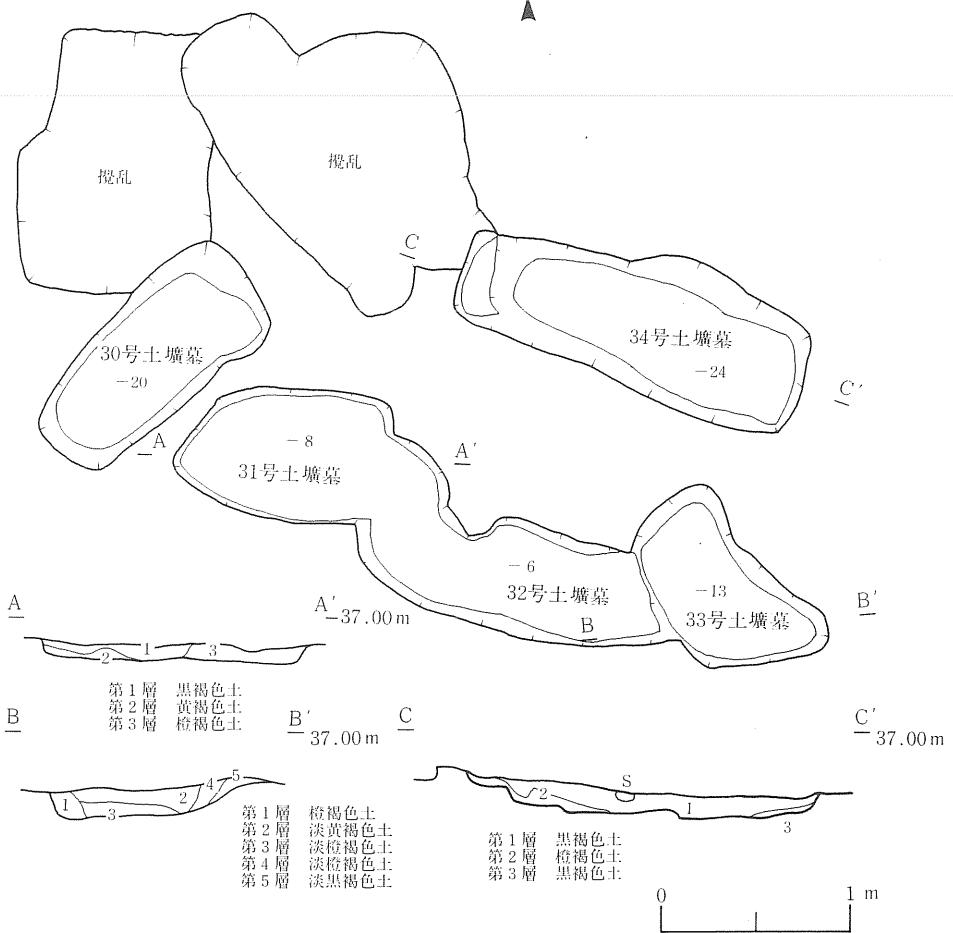
第11図 土塚墓



第13図 土壙墓



第12図 土壙墓



第14図 土壙墓

3号土壙墓出土遺物

土器（第19図）

28は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。地文はL R 単節斜縄文（縦位回転）が施文される。

4号土壙墓出土遺物

土器（第19図）

29～31は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。

5号土壙墓出土遺物

土器（第19図）

32、33は埋土から出土した、鉢形土器の小破片で、地文はL R 単節斜縄文（縦位回転）である。

6号土壙墓出土遺物

土器（第19図）

34～36は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。36は口唇部に刻みが施され、口縁部には3条の平行沈線文が施文される。

7号土壙墓出土遺物

土器（第17・19図）

37～39は埋土から出土した。

1は深鉢形土器である。口径31.8cmで地文はL R 単節斜縄文（横、斜位回転）である。

9号土壙墓出土遺物

土器（第17・20図）

2は深鉢形土器である。口径27.6cmで、口縁部が外反する。頸部にL R 単節斜縄文の圧痕をめぐらし、その下部には同原体の斜縄文（横位回転）を施している。40、41は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。

10号土壙墓出土遺物

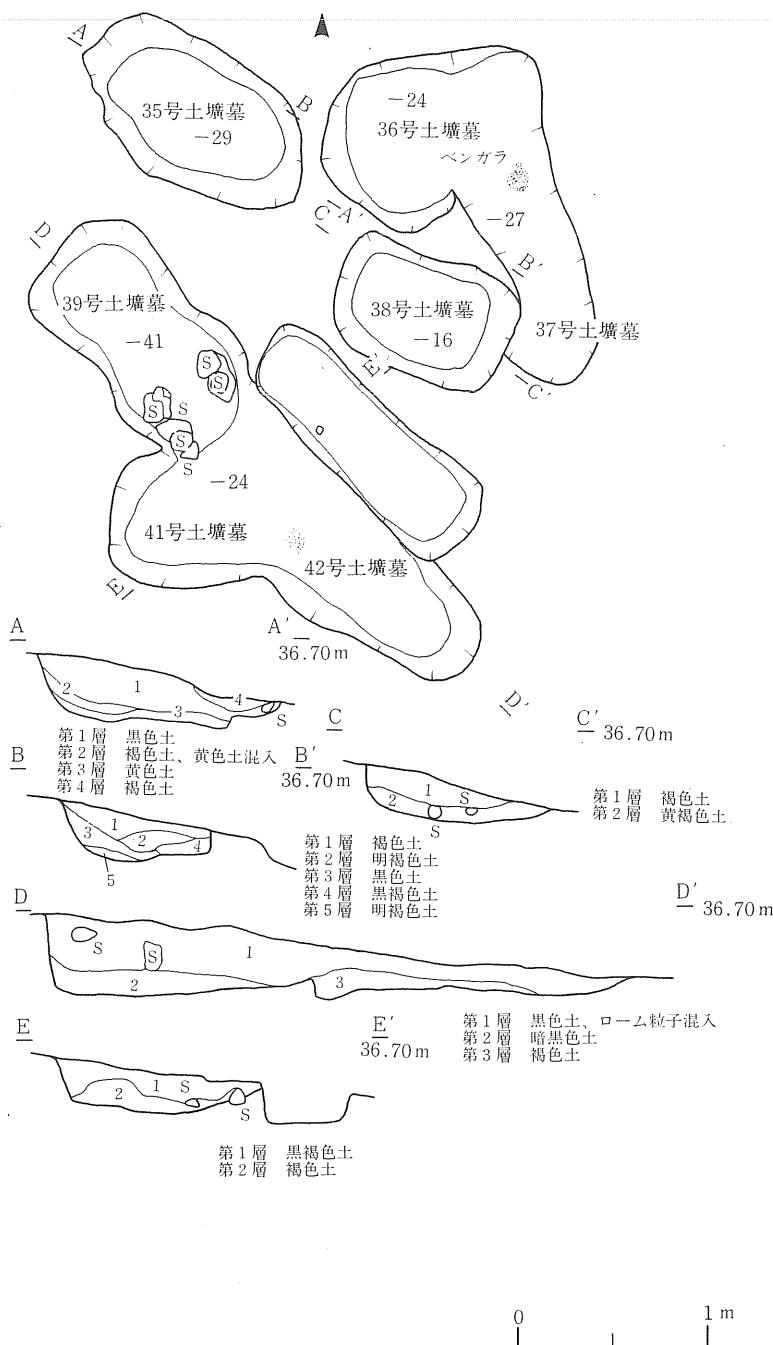
土器（第20図）

42は細い沈線によって工字文が施文される。

11号土壙墓出土遺物

土器（第20図）

44～46は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。44は口縁部直下に1条の沈線文が施文され



第15図 土壙墓

る。45は山形突起を有し、口縁部直下に7条の平行沈線文が施文され、46は沈線間に刻目文が施文されている。

12号土壙墓出土遺物 土器（第20図）

47は埋土から出土した鉢形土器片である。
摩滅が激しい。

13号土壙墓出土遺物 土器（第20図）

48、49は埋土から出土した鉢形土器片である。

14号土壙墓出土遺物 土器（第20図）

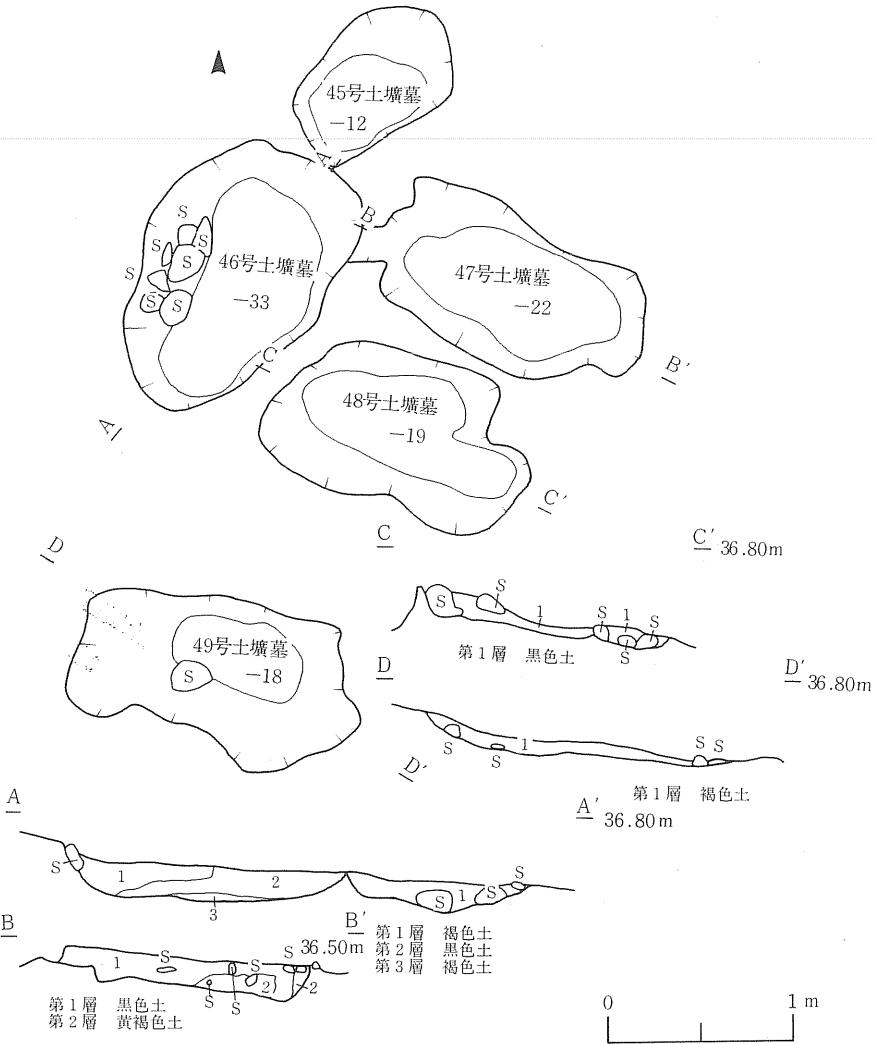
50は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。沈線と刻目文が施文される。

16号土壙墓出土遺物 土器（第20図）

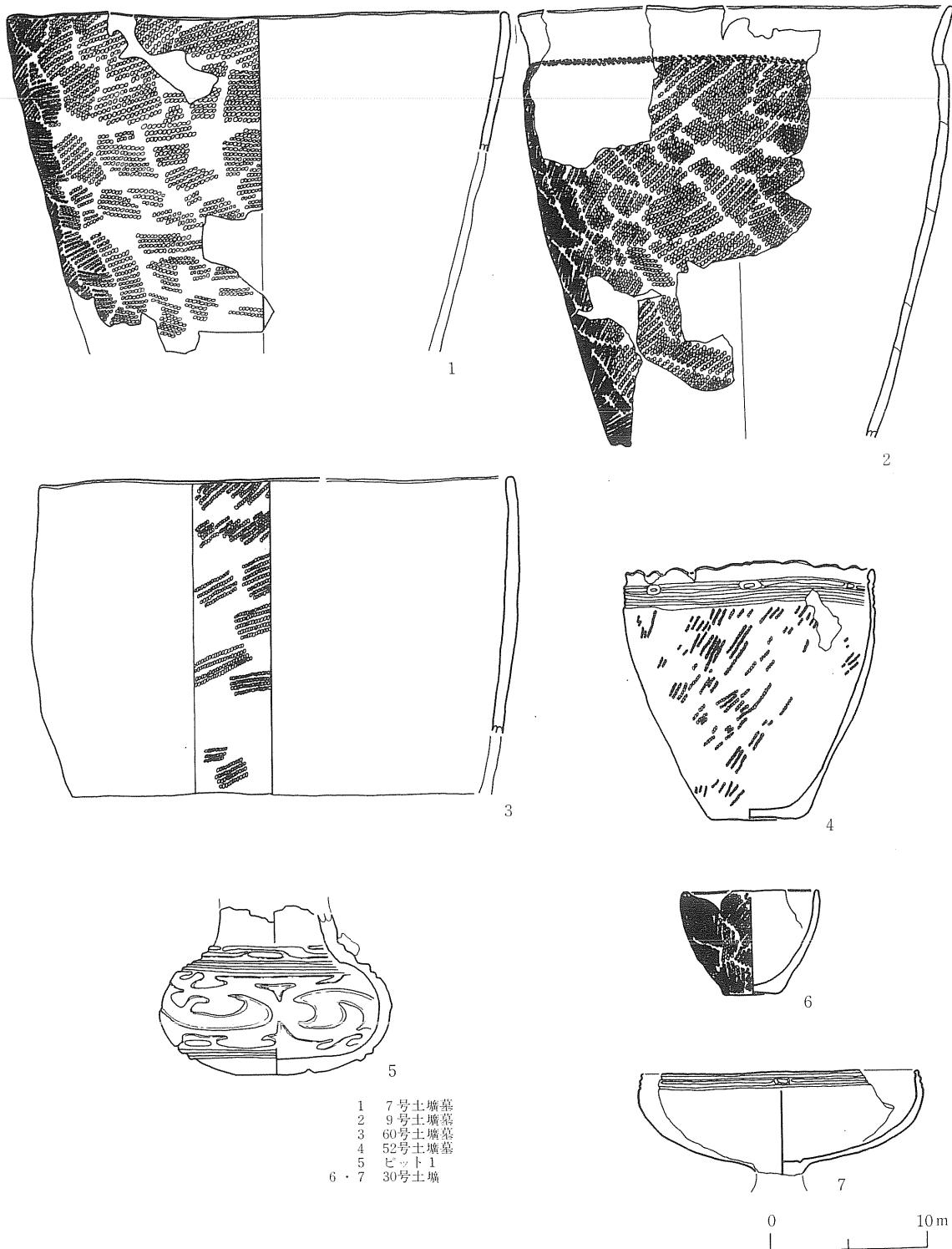
51～53は埋土から出土した鉢形土器片である。52は2条の平行沈線文、53は工字文が施文されている。

17号土壙墓出土遺物 土器（第20図）

54、55は埋土から出土した。54は鉢形土器片で頸部が外反し、口唇部に刻みが施される。55は壺形土器片で平行沈線による工字文が施文される。



第16図 土壙墓



第17図 遺構内出土土器

19号土壙墓出土遺物

石製品（第24図）

1、2は埋土下部から出土した。1は径0.9cm、2は径0.8cmの小玉である。

20号土壙墓出土遺物

石製品（第24図）

3、4は埋土下部から出土した。3は径0.8cm、4は径0.9cmの小玉である。

22号土壙墓出土遺物

石製品（第24図）

5は埋土から出土した径0.8cmの小玉である。

33号土壙墓出土遺物

石製品（第24図）

6、7は埋土から出土した。6は長さ1.9cm、巾1.3cmの勾玉、7は径0.9cmの小玉である。

37号土壙墓出土遺物

土器（第20図）

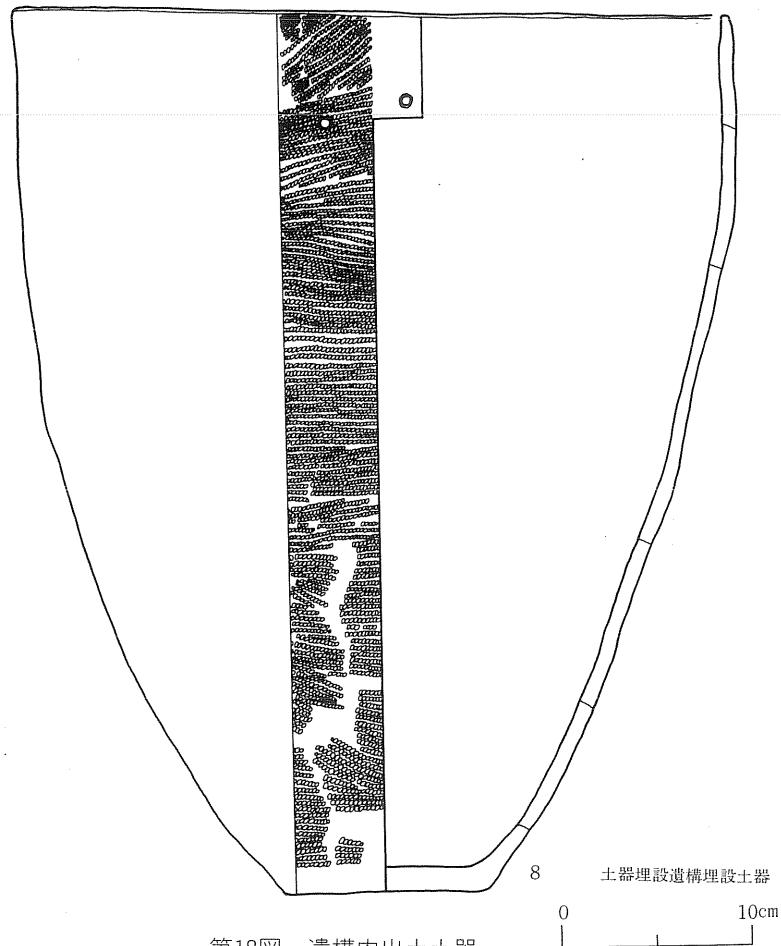
56は埋土から出土した鉢形土器の口縁部小破片である。

土壙

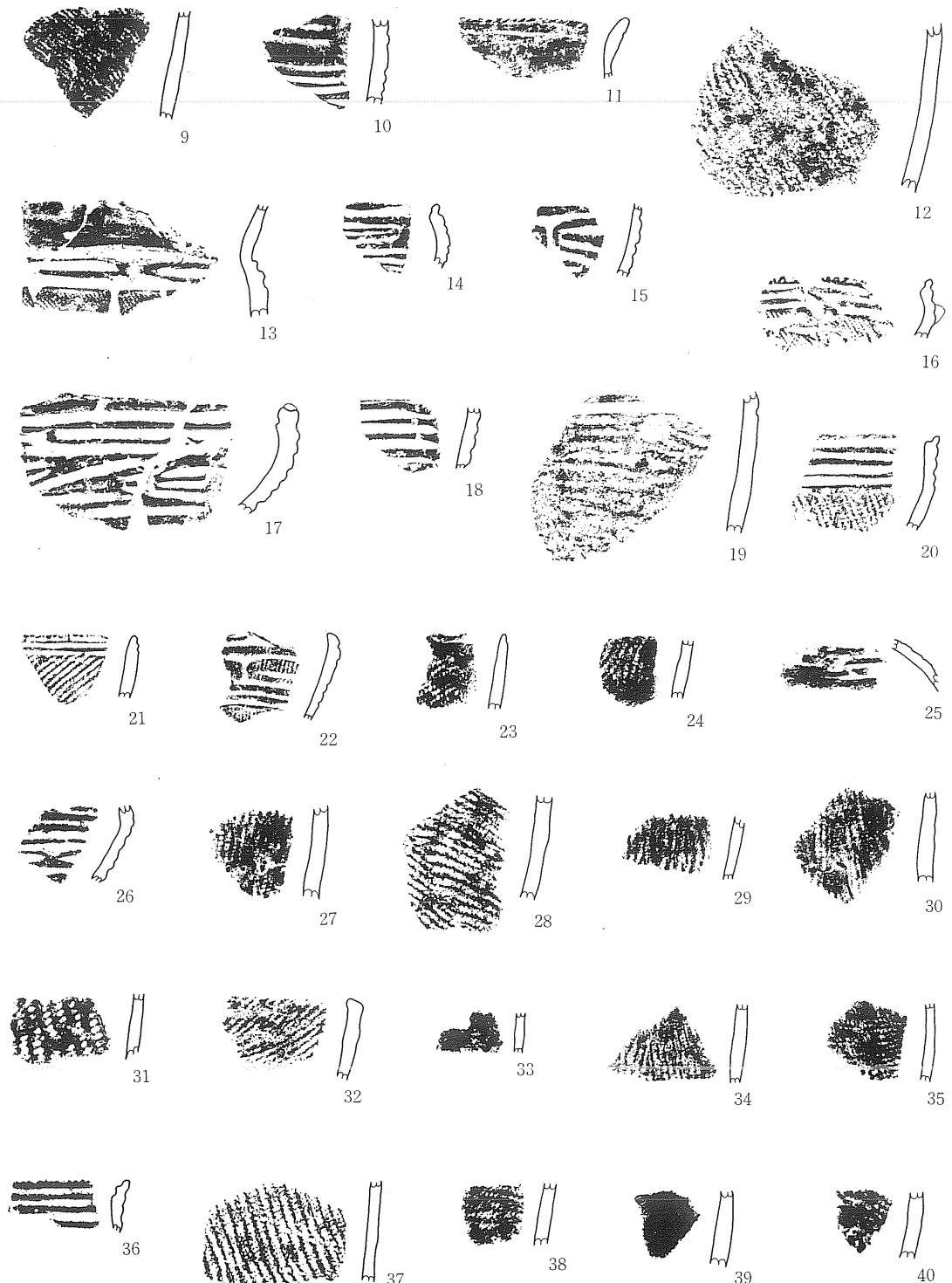
合計66基の土壙が発見された。（表2、3）

土壙出土遺物

1号土壙出土遺物



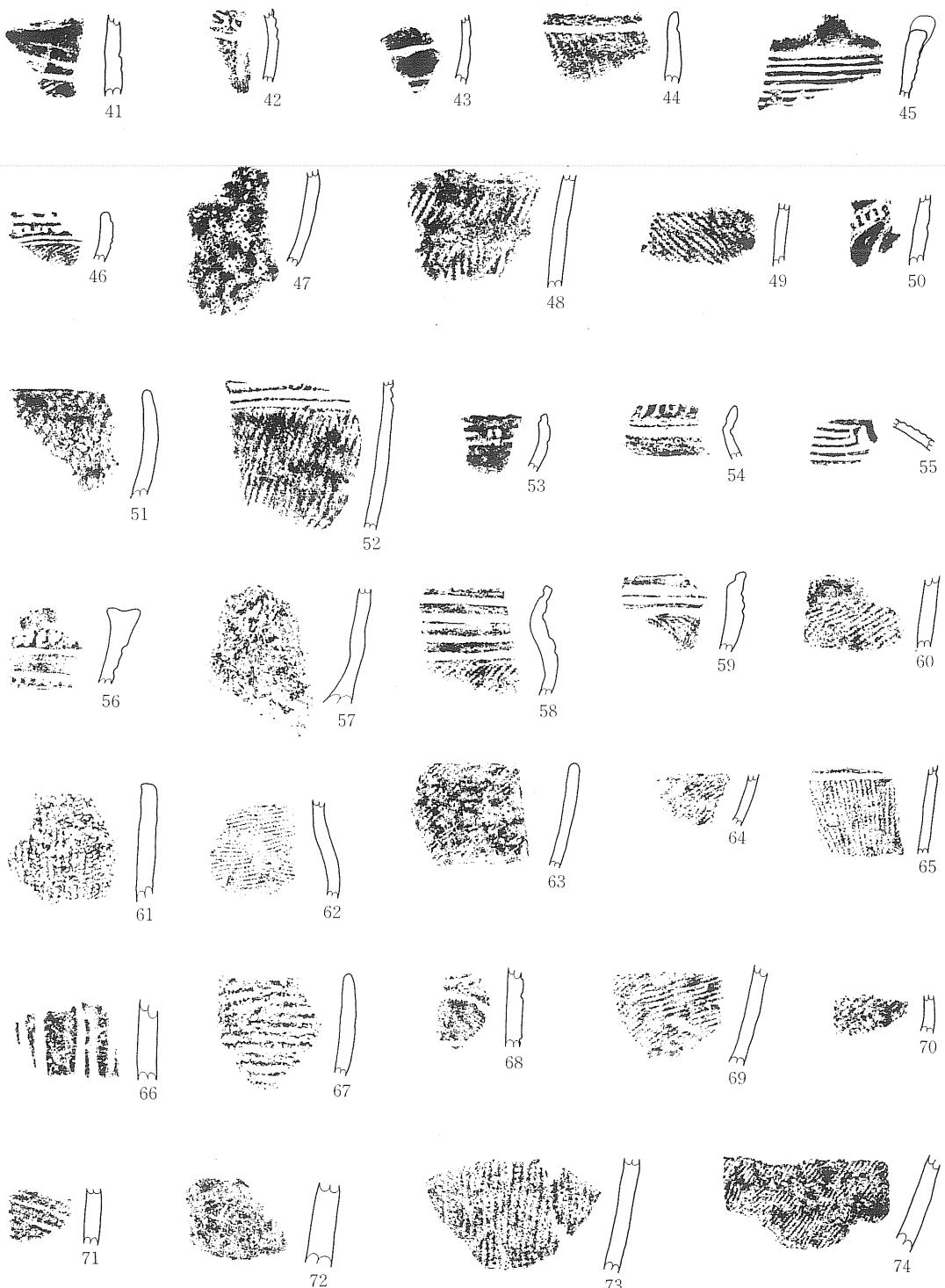
第18図 遺構内出土土器



9~12 1号溝
23・24 1号土壙墓
32・33 5号土壙墓
13~19 2号溝
25~27 2号土壙墓
34~36 6号土壙墓
20~22 3号溝
28 3号土壙墓
37~39 7号土壙墓
39~40 4号土壙墓
40 9号土壙墓

0 10cm

第19図 遺構内出土土器

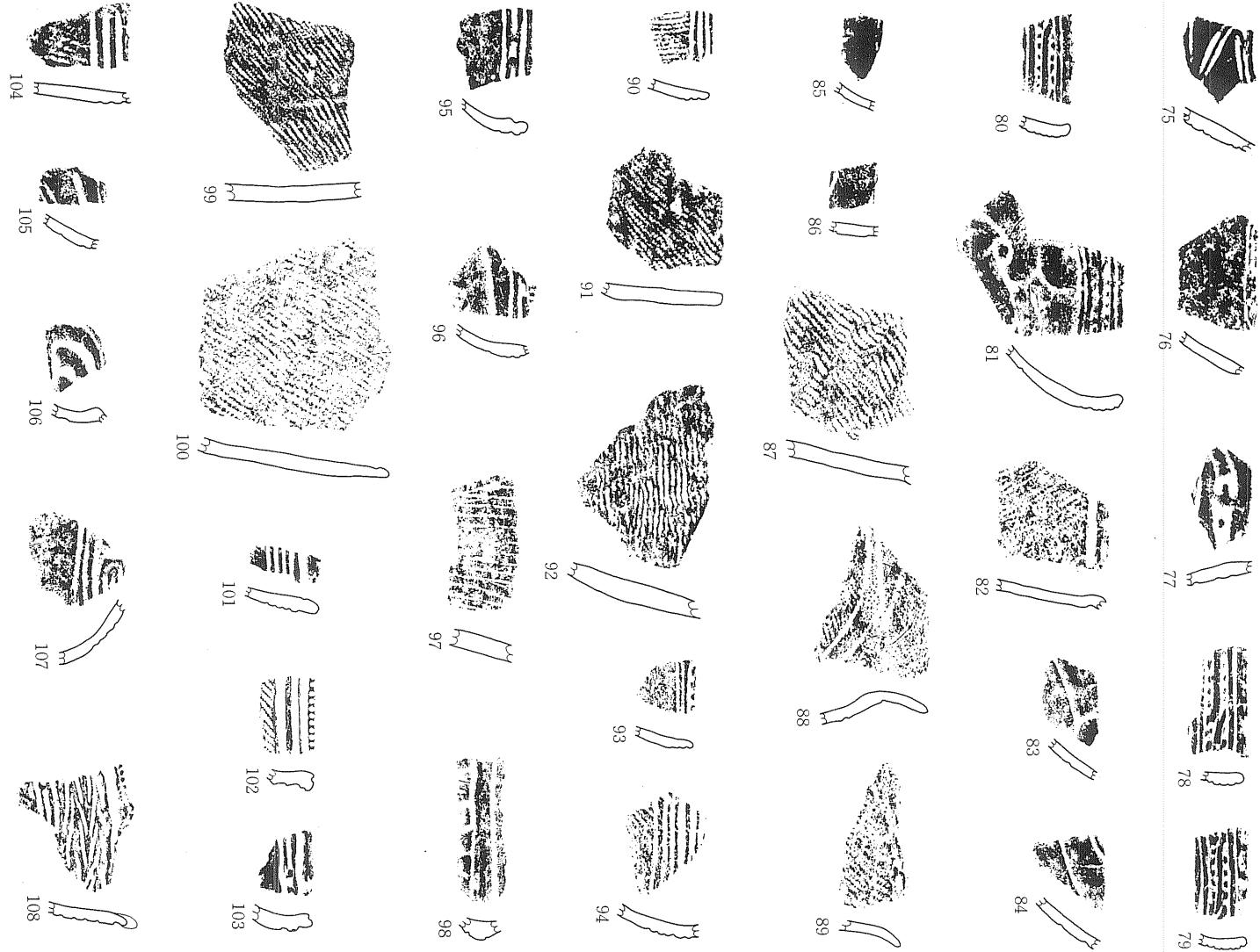


41 9号土器
 42・43 10号土器
 44～46 11号土器
 47 12号土器
 48・49 13号土器
 50～53 16号土器
 54・55 17号土器
 56 37号土器
 57 1号土器
 58 6号土器
 59～60 7号土器
 61 8号土器
 62 10号土器
 63 11号土器
 64 13号土器
 65 14号土器
 66 16号土器
 67 17号土器
 68 18号土器
 69 19号土器
 70 20号土器
 71 21号土器
 72 22号土器
 73 23号土器
 74 24号土器

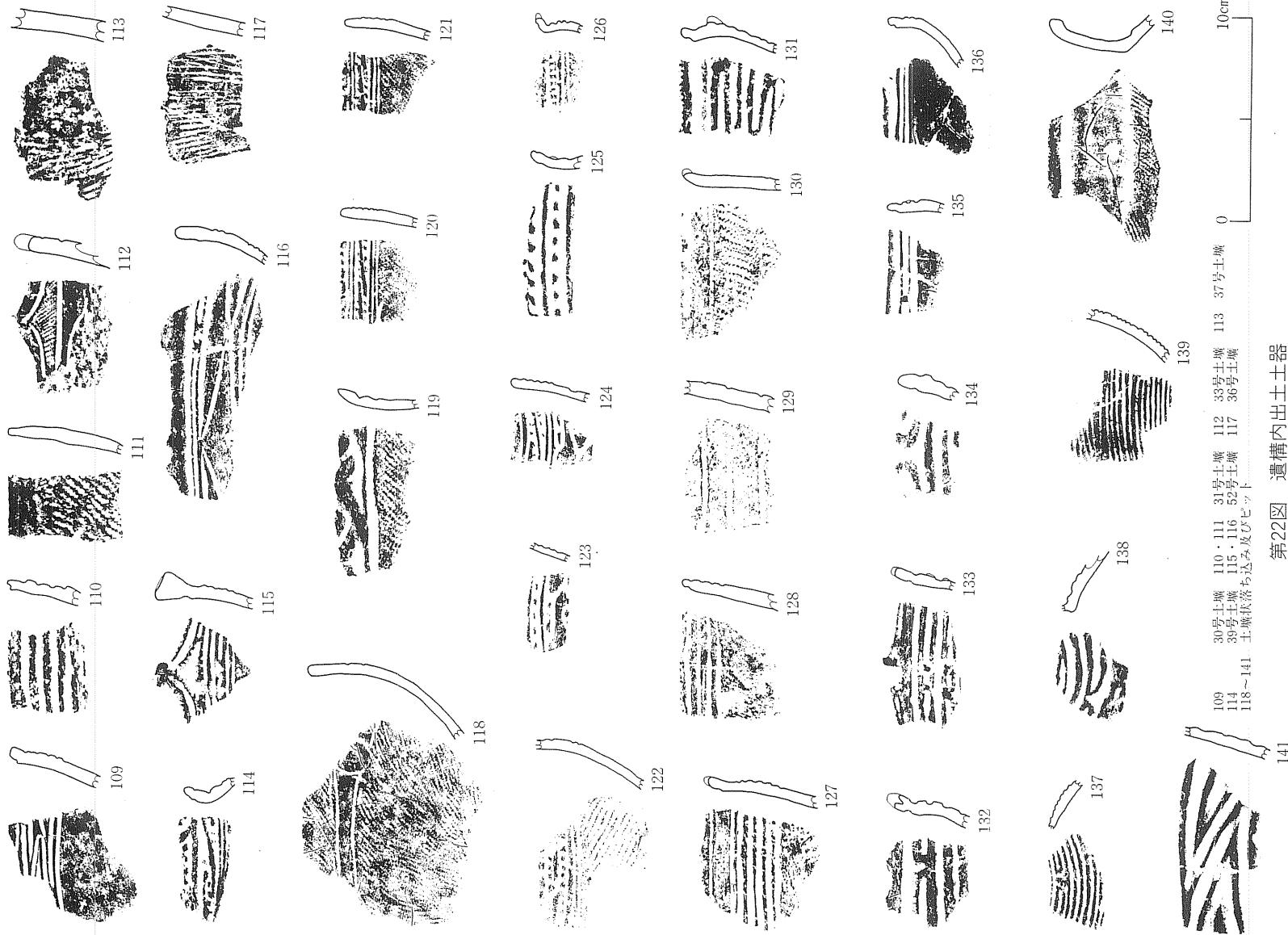
0 10cm

第20図 遺構内出土土器

75 16号土塊
90 76・77 19号土塊
91・92 22号土塊
101 29号土塊
102～108 102～108 30号土塊



第21図 遺構内出土土器



第22図 遺構内出土土器

土器（第20図）

57は埋土から出土した鉢形土器破片である。

2号土壌出土遺物

土器（第20図）

58は埋土から出土した鉢形土器破片である。口
縁部に4条の平行沈線文を施し、体部は単節斜縄
文である。

3号土壌出土遺物

土器（第20図）

59、60は埋土から出土した、鉢形土器片である。
59は口縁部破片で、口唇部に刻みがあり、口縁部
に2条の平行沈線文が施文される。

5号土壌出土遺物

土器（第20図）

61、62は、埋土から出土し
た深鉢形土器片である。61は
口縁部片でR L 単節斜縄文

(横位回転)である。

6号土壌出土遺物

土器（第20図）

63、64は埋土から出土した。
63は鉢形土器の口縁部片であ
る。

7号土壌出土遺物

土器（第20図）

65～67は埋土から出土した鉢形土器片である。65は横、66は縦位に沈線文が施文される。67は鉢
形土器の口縁部破片である。

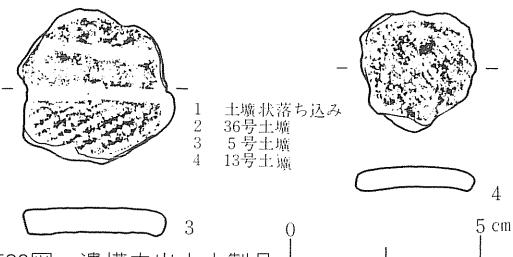
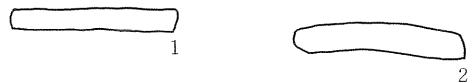
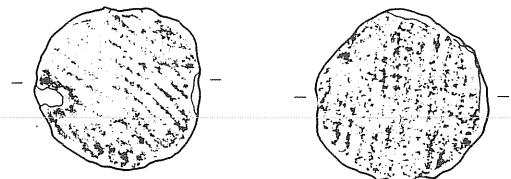
8号土壌出土遺物

土器（第20図）

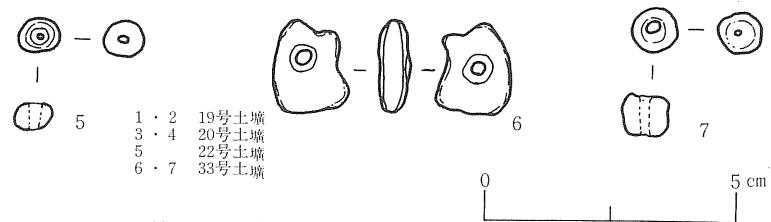
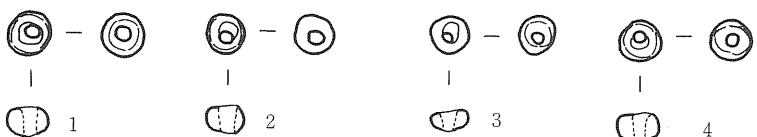
68、69は埋土から出土した鉢形土器片である。

石器（第25図）

10は埋土から出土した刃部が欠損するヘラ状石器である。



第20図 遺構内出土土製品



第20図 遺構内出土土製品



第20図 遺構内出土土製品

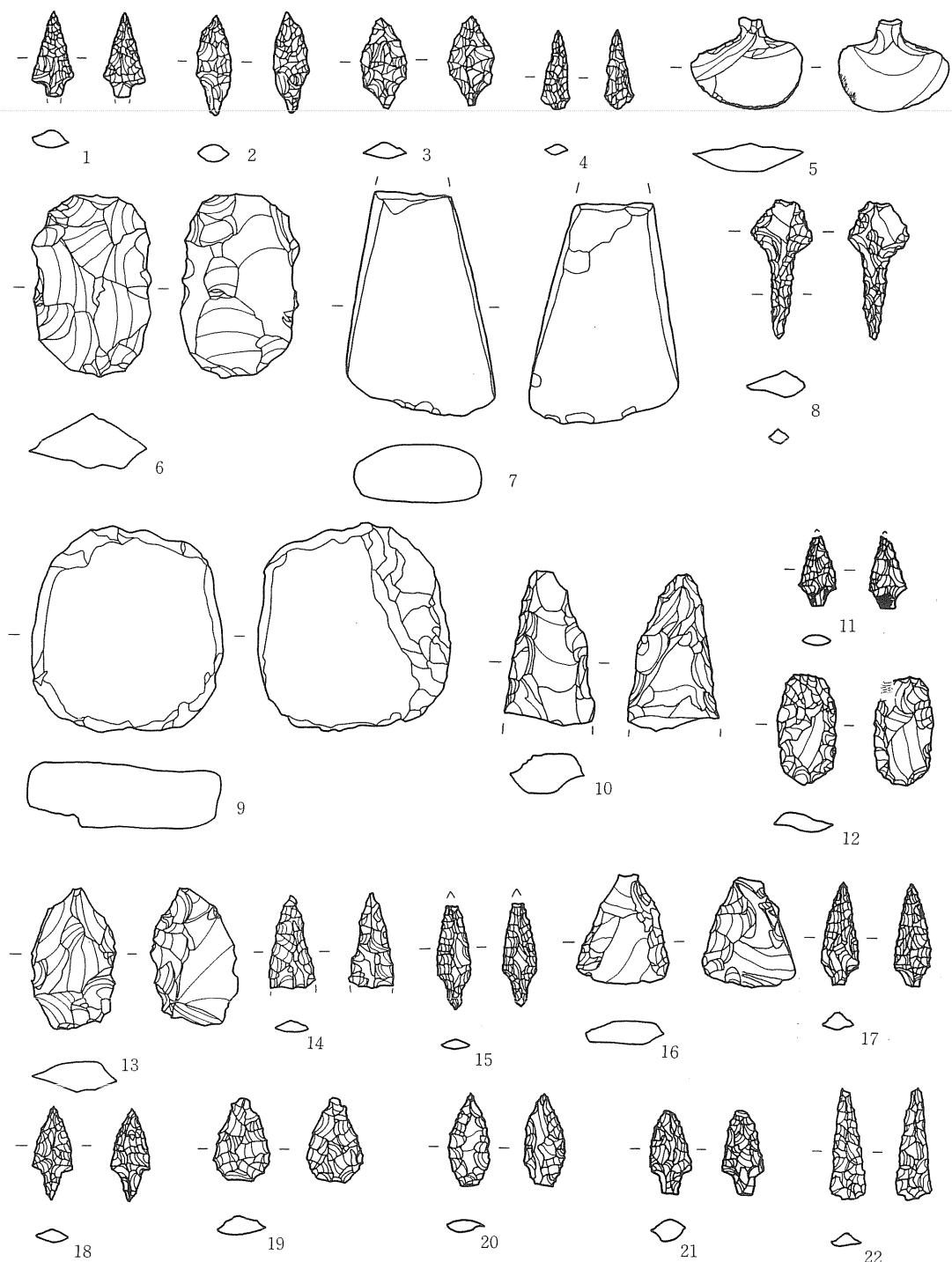
土壤一覧表

番号	規 模(cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物	備 考
	長軸	短軸	深さ				
1	83		4	円 形	皿 状	第20図57	
2	75			円 形	鍋 状	第20図58	
3	104		25	円 形	鍋 状	第20図59・60	
4	92	82	21	不 整 形	皿 状		
5	105		37	円 形	洗面器状	第20図61・62、第23図3	
6	80		36	円 形	鍋 状	第20図63・64	
7	130	112	12	不 整 形	皿 状	第20図65～67	
8	183		10	円 形	皿 状	第20図68・69、第25図10	
9	74		8	円 形	皿 状	第25図11	
10	66		14	円 形	皿 状	第20図70	
11	92	80	14	椭 圆 形	皿 状	第20図71	
12	64		6	円 形	皿 状		
13	109	85	10	不 整 形	皿 状	第20図72、第23図4	
14	△100		6	円 形	皿 状	第20図73、第25図12・13	16号土壤に切られている。
15	△98		37	円 形	皿 状		16号土壤を切っている。
16	83		44	円 形	鍋 状	第20図74、第21図75	14号土壤を切っている。15号土壤に切られている。
17	96		7	円 形	皿 状	第21図76・77	
18	64		7	円 形	皿 状		
19	65	55	6	不 整 形	皿 状	第21図78～86、第25図14	
20	80		27	円 形	鍋 状	第21図87・88	
21	84		29	円 形	皿 状	第21図89	
22	70		11	円 形	皿 状	第21図90	
23	56		13	円 形	皿 状	第21図91・92	
24	110	100	16	椭 圆 形	鍋 状	第21図93～97	23号土壤基に切っている。
25	66	50	5	椭 圆 形	皿 状	第25図15	
26	80		11	円 形	皿 状		7号土壤基に切られている。
27	109		14	円 形	皿 状	第21図98・99、第25図16	
28	96	77	19	椭 圆 形	皿 状	第20図58、第21図100	29号土壤を切っている。
29				椭 圆 形		第21図101	28号土壤、16号土壤基に切られている。
30	△105	△53	21	椭 圆 形		第17図6・7、第21図102～108、第22図109、第25図17・18	31号土壤を切り、32号土壤に切られている。
31		△61	14	椭 圆 形		第22図110・111、第25図19	30号土壤・32号土壤に切られている。
32	△88		23	円 形		第27図34	30号土壤・31号土壤を切っている。
33	86		19	円 形	皿 状	第22図112	

△は“推定”もしくは“以上”を示す。

土 壤 一 覧 表

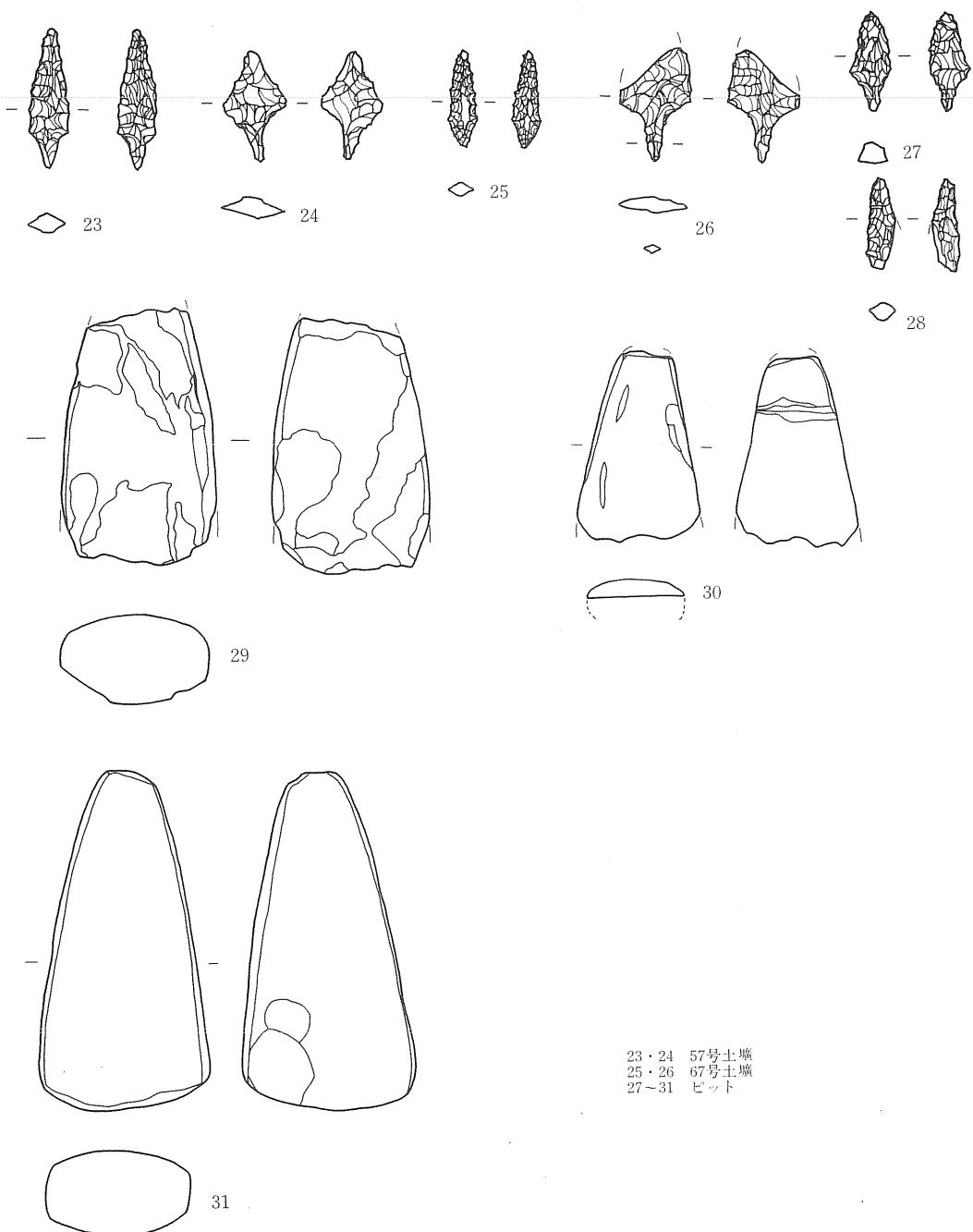
番号	規 模(cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物	備 考
	長軸	短軸	深さ				
34	90	△55	17	楕円形	鍋状		
35	112	90	30	楕円形	鍋状	第25図20・21	
36	120	100	34	楕円形	鍋状	第22図117、第23図2	
37	△170	93	47	楕円形	洗面器状	第22図113	
38	146	96	48	楕円形	洗面器状		
39	109	68	19	楕円形	皿状	第22図114	
40	63	52	9	楕円形	皿状		
41	80	65	38	不整形	鍋状		
42	85	60	38	不整形	鍋状		
43	73		18	円形	鍋状		
44	90	76	17	楕円形	鍋状	第25図22	
45	△80	51	5	楕円形	皿状		
46	90		55	隅丸方形	鍋状		
47	85	58	54	楕円形	袋状		
48	79		26		鍋状		
49	80	56	26	隅丸方形	ボール状		
50	85		22	円形	皿状		
51	105	90	20	不整形	皿状		
52	150	130	19	楕円形	皿状	第17図4、第22図115・116	
53	152		43	円形	鍋状		
54	179		38	円形	鍋状		
55	115	110	14	不整形	皿状		
56	102	96	12	不整形	皿状		
57	143		20	円形	皿状	第26図23・24	
58	178		10	隅丸方形	皿状		
59	120		34	円形	鍋状	第27図35	
60	153	133	25	楕円形	皿状	第17図3	
61	228	165	26	不整形	皿状		
62	40		15	隅丸方形	鍋状		
63	70		30	円形	鍋状		
64	96	85	22	不整形	皿状		
65	123		19		鍋状		
66	94		16	円形	皿状		



1 ~ 7 1号溝 8 2号溝 9 3号溝 10 8号土壤 11 9号土壤
12・13 14号土壤 14 19号土壤 15 25号土壤 16 27号土壤
17・18 30号土壤 19 31号土壤 20・21 35号土壤 22 44号土壤

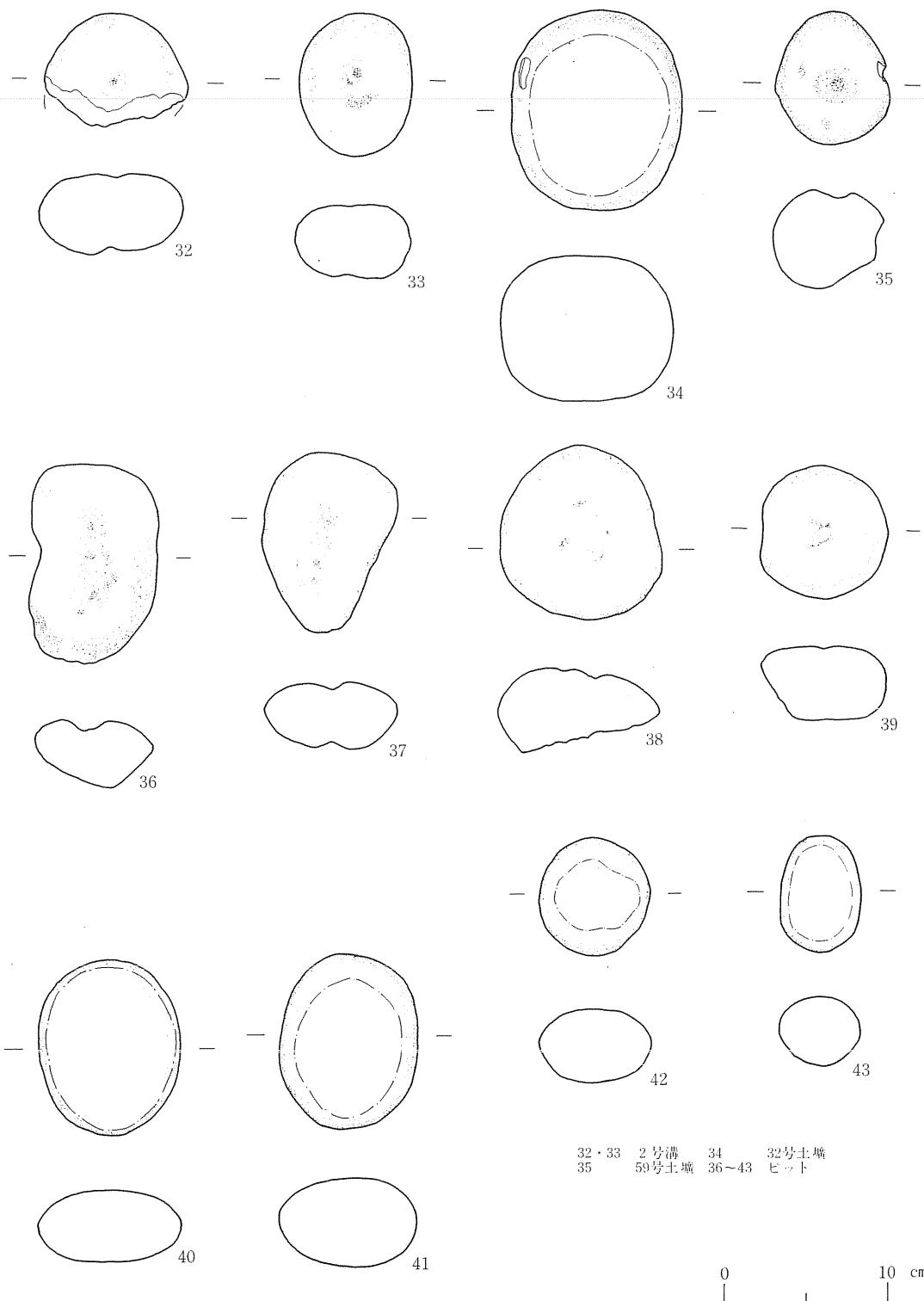
0 5 cm

第25図 遺構内出土石器

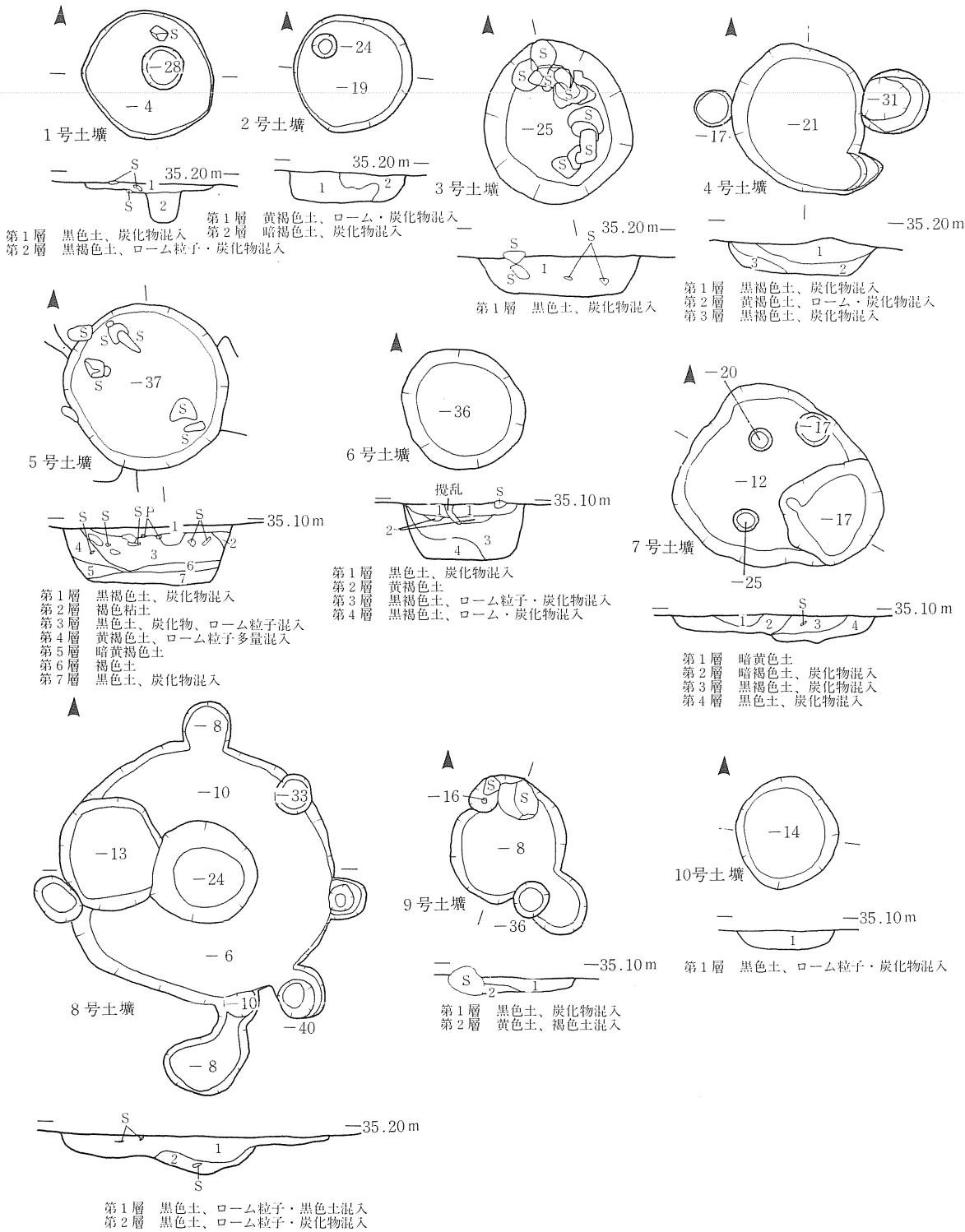


0 5 cm

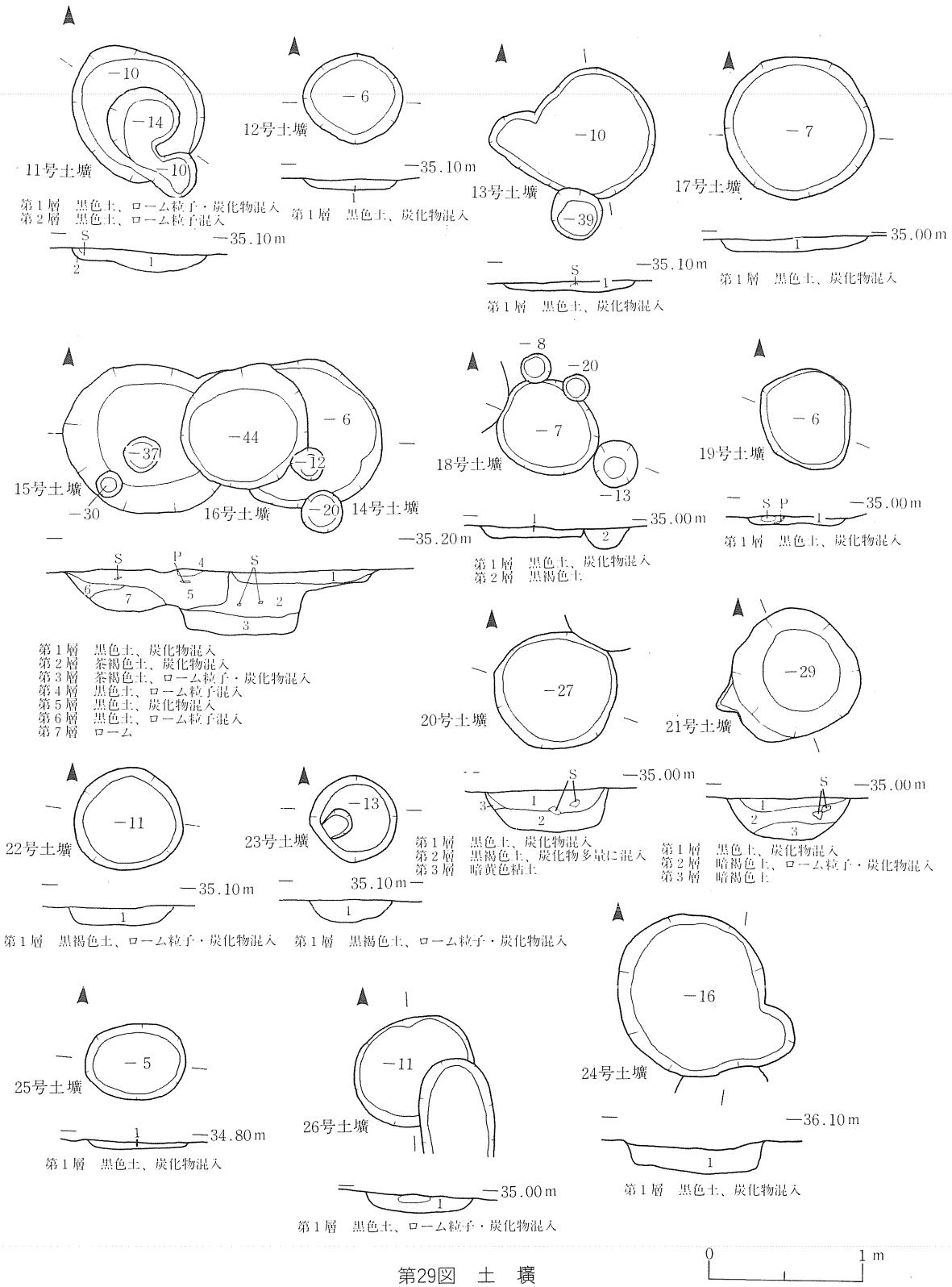
第26図 遺構内出土石器



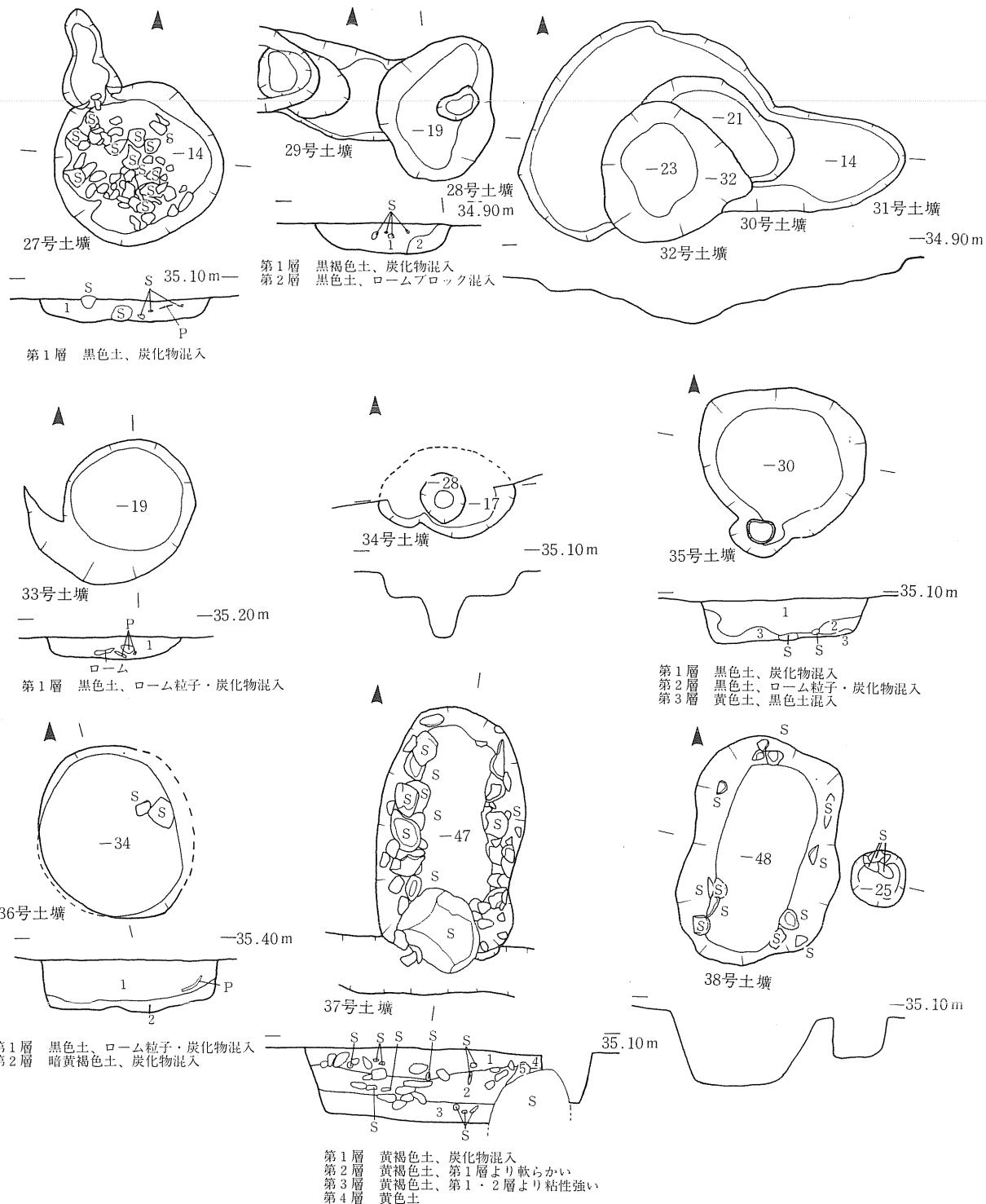
第27図 遺構内出土石器

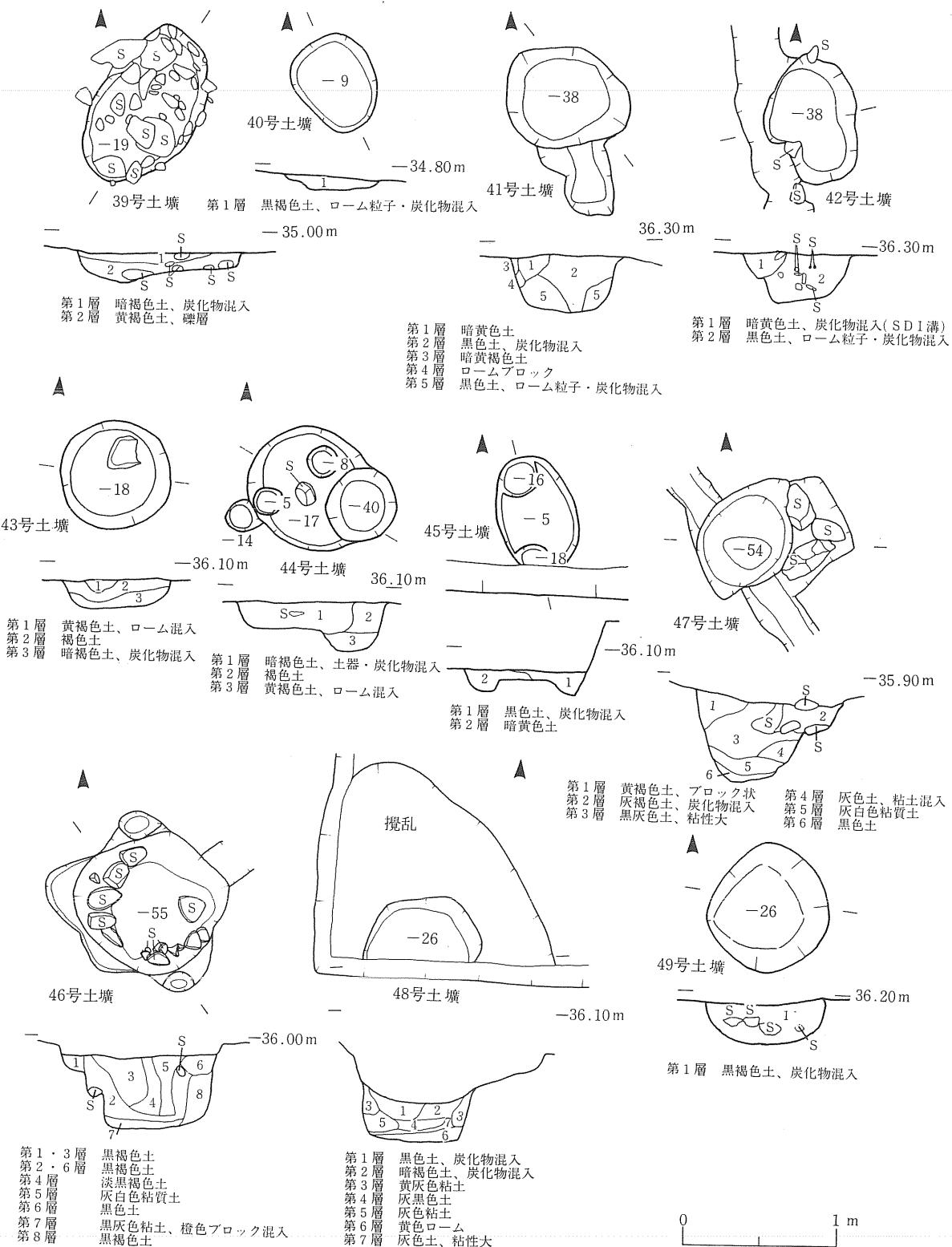


第28図 土 壤

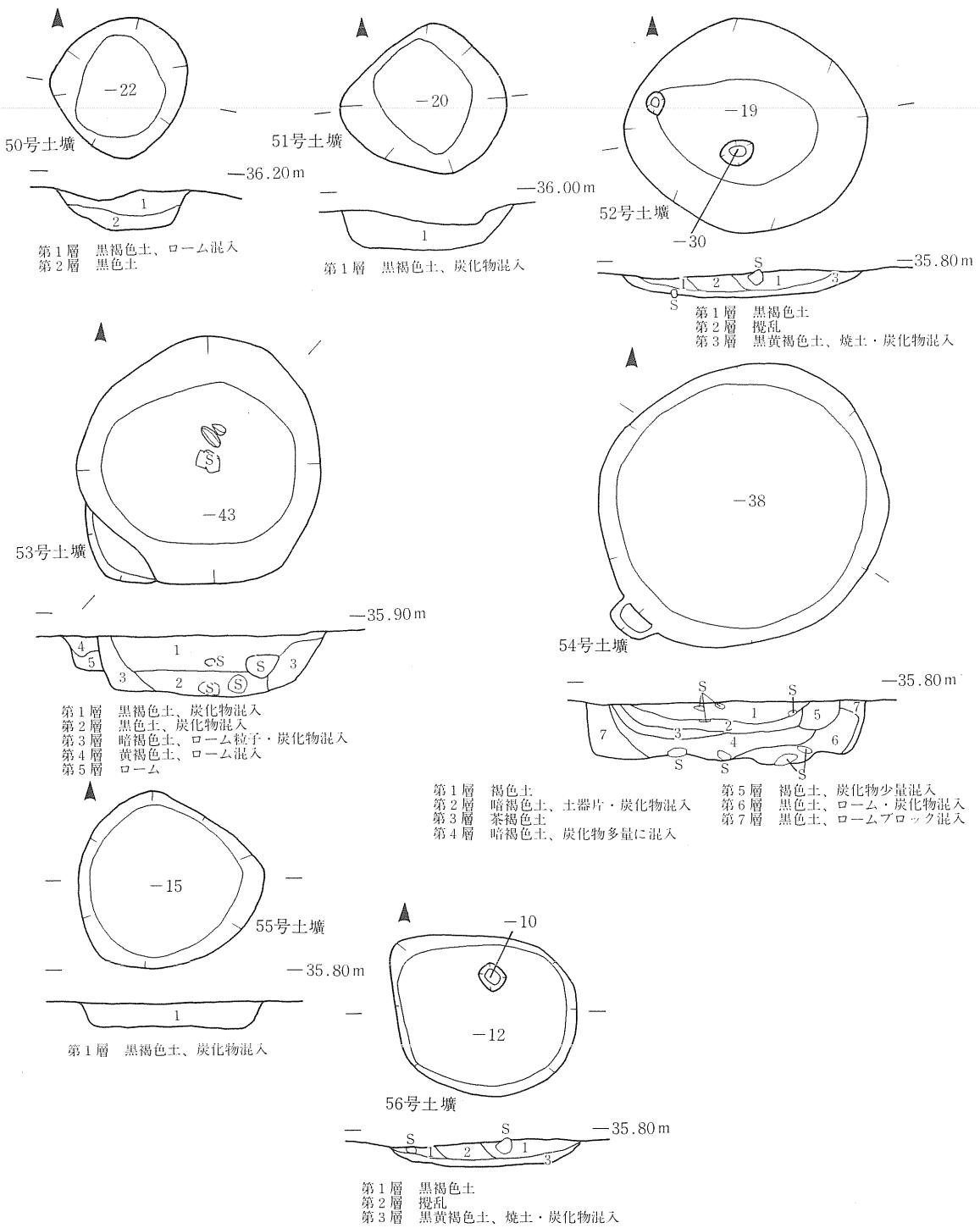


第29図 土 壤





第31図 土 売



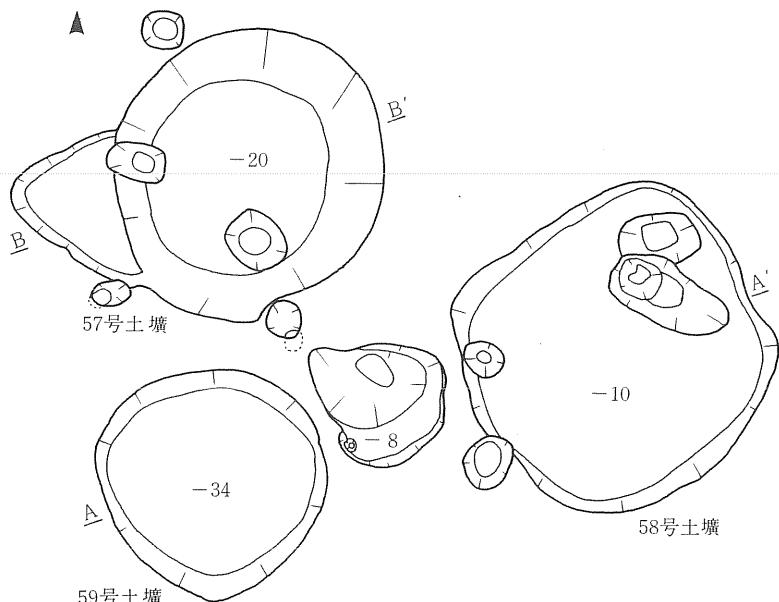
0 1 m

第32図 土 壤

9号土壌出土遺物

石器（第25図）

11は埋土から出土した有茎石鏃である。先端、茎部の一部が欠損する。茎部付根の両面にアスファルトが付着している。



10号土壌出土遺物

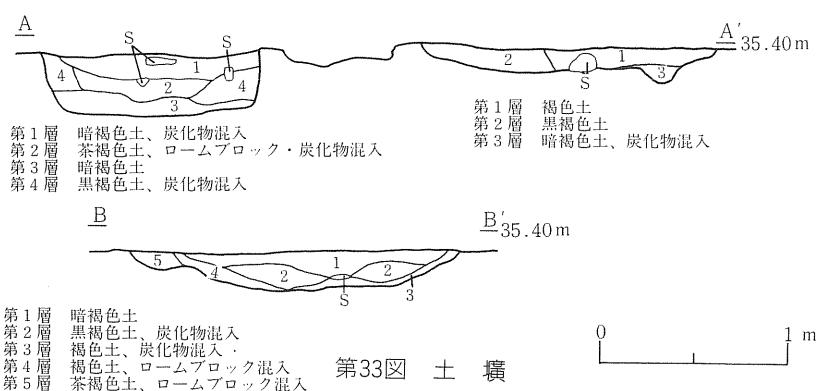
土器（第20図）

70は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。

11号土壌出土遺物

土器（第20図）

71は埋土から出土した鉢形土器小破片である。



13号土壌出土遺物

土器（第20図）

72は埋土から出土した鉢形土器片である。

14号土壌出土遺物

土器（第20図）

73は埋土から出土した鉢形土器片である。

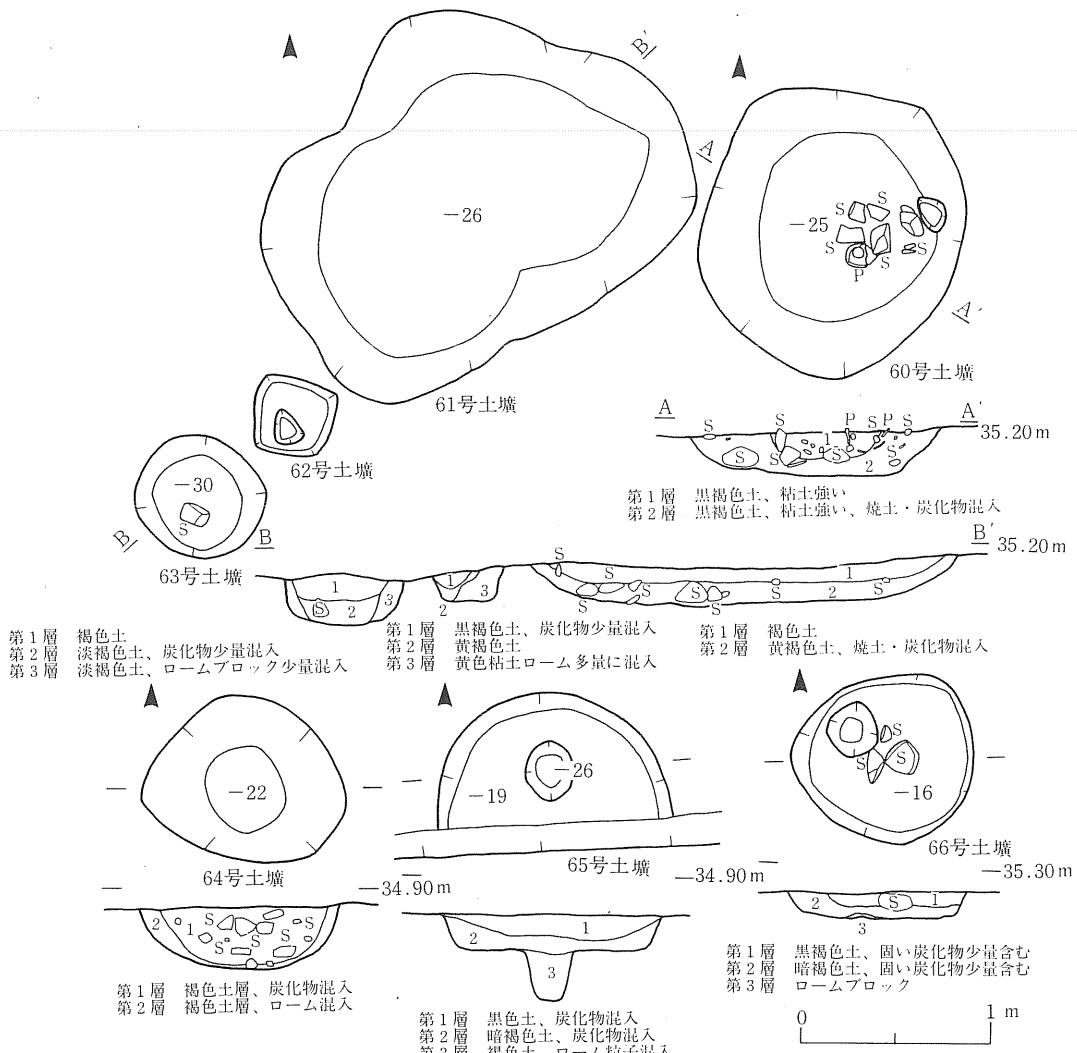
石器

12、13は埋土から出土した。12は長さ3.3cmのヘラ状石器である。13は一部欠損する搔器状の石器である。

16号土壌出土遺物

土器（第20・21図）

74、75は埋土から出土した鉢形土器片である。74は体部破片でLR单節斜縄文（横位回転）が施される。75は2条の沈線で変形工字文が施文されると思われる体部破片である。



第34図 土 壤

17号土壤出土遺物

土器（第21図）

76、77は埋土から出土した土器片である。76は鉢形土器片で平行沈線が施されている。

19号土壤出土遺物

土器（第21図）

78～86は埋土から出土した。78、79、82～86は浅鉢形土器の破片である。78、79は口縁部で沈線間に羊歯状文が施文される。81は口縁部に羊歯状文を施し、体部には雲形文が施文されている。78～81の羊歯状文は直線化する様相をなす。

石器（第25図）

14は埋土から出土した基部が欠損する石鏃である。

20号土壙出土遺物

土器（第21図）

埋土から出土した。87は深鉢形土器、88は壺形土器の破片である。88は口縁部は無文帯で、体部は沈線によって文様が施されている。

21号土壙出土遺物

土器（第21図）

89は埋土から出土した鉢形土器片である。

22号土壙出土遺物

土器（第21図）

90は埋土から出土した鉢形土器の小破片である。口唇部に3条の平行沈線が施文されている。

23号土壙出土遺物

土器（第21図）

91、92は埋土から出土した鉢形土器片である。

24号土壙出土遺物

土器（第21図）

93～97は埋土から出土した。93、95、96は浅鉢形土器の小破片である。沈線によって文様が施され、94は工字文が施されている。97は鉢形土器片で撲糸文が施文される。

25号土壙出土遺物

石器（第25図）

15は埋土から出土した有茎石鏃で、先端部が欠損する。

27号土壙出土遺物

土器（第21図）

98、99は埋土から出土した。98は注口土器の小破片である。99は深鉢形土器片で地文はL R 単節斜縄文（横位回転）である。

石器（第25図）

16は埋土から出土した小形のヘラ状石器である。

28号土壙出土遺物

土器（第21図）

100は埋土から出土した深鉢形の口縁部破片である。地文はL R 単節斜縄文（横位回転）で上部に補修孔が穿たれている。

29号土壙出土遺物

土器（第21図）

101は埋土から出土した鉢形土器の口縁部破片である。口唇部に4条の平行沈線文が施文されて

いる。

30号土壌出土遺物

土器（第17 21 22図）

6は口径8.6cm、器高6.6cmの鉢形土器である。地文はLR単節斜縄文（横位回転）である。7は台付鉢形土器で台部は欠損している。口縁部には平行沈線が施され2個1対の粘土粒が付されている。102、104、109は鉢形土器片で沈線によって文様が施されている。102は口唇部に刻みをもち口縁部には2条の平行沈線文が施文される。108は山形突起を有し、口縁部には細い沈線により矢羽状沈線文が施文されている。109は変形工字文が施され体部は磨消縄文帶である。103、107は平行沈線文による工字文が施されており、103は2個1対の粘土粒を付している。

石器（第25図）

17、18は埋土から出土した有茎石鏃である。17は茎部が一部欠損する。

31号土壌出土遺物

土器（第22図）

110、111は埋土から出土した鉢形土器の口縁部破片である。110は4条の平行沈線文が施される。

石器（第25図）

19は埋土から出土した無茎石鏃である。

33号土壌出土遺物

土器（第22図）

112は埋土から出土した鉢形土器片である。山形口縁を有し、沈線によって山形に文様が施される。地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。

35号土壌出土遺物

石器（第25図）

埋土から出土した。20は無茎、21は有茎石鏃で茎部の一部が欠損する。

36号土壌出土遺物

土器（第22図）

117は埋土から出土した鉢形土器片である。細い工具により縦位方向に条線が施されている。

37号土壌出土遺物

土器（第22図）

113は埋土から出土した鉢形土器片である。巾の狭いヘラ状の工具と思われるもので縦位方向に条線が施されている。上部は二次火熱を受け赤変し、下部は煤状の炭化物が付着している。

39号土壌出土遺物

土器（第22図）

114は埋土から出土した鉢形土器の口縁部小破片である。口唇部に刻みと小突起があり、口縁部

に羊歯状文が施文されている。

44号土壙出土遺物

石器（第25図）

22は埋土から出土した有茎石鏃で茎部は欠損している。

52号土壙出土遺物

土器（第17 22図）

4、115、116は埋土から出土した。4は口径15.6cmで波状口縁の鉢形土器である。口縁部には4条の平行沈線文がめぐり、2個1対の粘土粒が貼付される。地文はL R 単節斜縄文（横位回転）が施されている。115は山形突起を有し平行沈線によって工字文が施される。116は口縁部の山形突起間にB状の小突起を有している。口縁部は平行沈線文と2個1対の粘土粒が貼付されている。沈線間には波状工字文が施文されている。

57号土壙出土遺物

石器（第26図）

23、24は埋土から出土した有茎石鏃である。

60号土壙出土遺物

土器（第17図）

3は埋土から出土した深鉢形土器である。口径29.8cm、現高18.8cmで地文はL R 単節斜縄文（横位回転）が施される。

67号土壙出土遺物

石器（第26図）

25、26は埋土から出土した。25は有茎石鏃、26は上部が欠損する石錘である。

その他の出土遺物

遺構番号を付していない落ち込み、ピットから出土した遺物を一括した。

土器（第22図）

鉢、浅鉢、壺形土器片などがある。118～134は鉢形土器の破片である。119は頸部に1条の沈線をめぐらし、口縁には沈線による入組三叉文が施されている。120～124は羊歯状文が施されている。125、126は口縁部に連続刻目文が施される。また126は体部に細い沈線により文様が施されている。127、129は口縁部に小突起を有し、130は波状口縁をなす。131、132、134は平行沈線文と沈線による工字文が施文される。133、135は平行沈線文をめぐらし、133は上から2条、4条目に、135は中央部に2個1対の粘土粒を貼付している。136は浅鉢形土器片で口縁部に2条の平行沈線を施し、ほかは磨消無文帶である。137、138、140は壺形土器片である。137、138は肩部で数条の平行沈線文をめぐらし、工字文が施文されている。139は鉢形土器片で平行沈線文、工字文が施文される。

141は巾の広い矢羽状沈線文が施されている。

石器（第26図）

27は有茎石鏸、28は片側が欠損する石鏸である。29～31は磨製石斧である。29は上部が欠損し、表裏とも剥落が激しい。

土器埋設遺構（第35図）

調査区の南側で1基検出された。

III層面での確認で、ロームを掘り込んでいない。深鉢形土器が、埋設されており、口径39cm、高さ49cmである。

出土遺物（第18図）

土器は埋設土器である。口縁部は垂直に立ち上がる深鉢形土器で、補修孔が穿たれている。地文はL R 単節斜縄文（横、斜位回転）である。

炉跡（第36図）

調査区の南側で1基検出された。

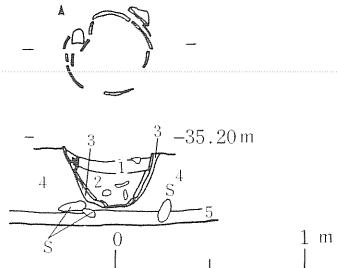
II層面での確認で、石囲炉である。礫は数個抜き取られ、炉底及び礫は強く火熱を受けて赤変し、焼土が約2cm堆積していた。

遺構外出土遺物について

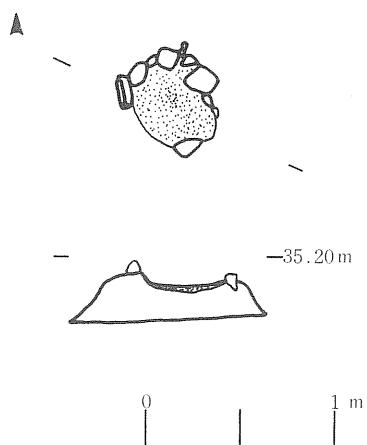
土器

上新城中学校遺跡では、多くの土器が出土している。特に昭和63年度調査区、5大グリット4～7-E～Gグリット、平成3年度調査区、5大グリット3～8-I、Jグリット付近は西から沢が入り込んでおり、沢頭にあたるところで、多量の土器が出土し、捨て場と考えられる。しかし、校舎建築時の削平や解体時の攪乱等によって、層位的に捉えることはできなかった。遺跡全体での土器の出土量は整理用コソテナで約85箱である。ここではそれらの中から復元、実測、拓本資料として抽出した土器について扱うこととする。土器は縄文時代晩期の土器が主体であり、若干、縄文時代後期、弥生、平安時代の土器が含まれている。縄文時代晩期の土器分類にあたっては、土器型式から群に、器形から類別し、さらには文様構成の相違から細別した。

第1層	暗褐色土、炭化物混入
第2層	黒褐色土、炭化物混入
第3層	黒褐色土、ソフト・炭化物混入
第4層	暗褐色土
第5層	暗黄褐色土



第35図 土器埋設遺構



第36図 炉跡

第1群土器（第37図1 第43図51～64）

縄文時代後期の土器を一括した。1は丸底を呈し、口縁が開く鉢形土器である。口縁部と体部にそれぞれ2条の平行沈線をめぐらし、細長い楕円形の列点文を施している。51は壺形土器と思われる。口縁部下に「8」の字状の隆帯が貼付され、細い沈線文により文様が施される。52～59は縦に連続刻目文が施される土器で、56～59は入組帶状文が施文される。60、61は口縁に山形突起をもち、数条の平行沈線文によって文様が展開される。

第2群土器（第37図2、第43図65～75、第44図76～80）

縄文時代晚期、大洞B式土器を本群とした。

1類土器

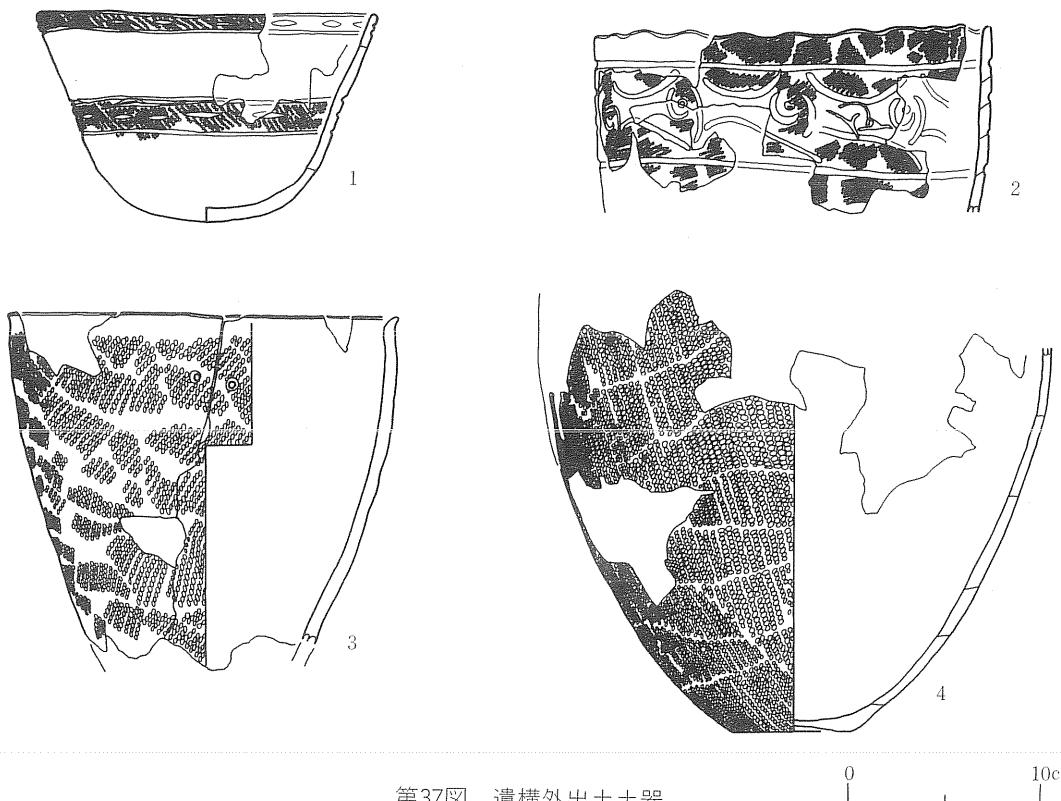
鉢形土器を本類とした。施文様からa・b類に分類した。

a類（65、66）

平縁に口縁部からのびる弧状の沈線と、体部に平行沈線文が施され、その間に沈刻により三角文が施文されている。

b類（2、68～80）

沈線により、入組文や三叉文が施文されるものである。67は並列する三叉文と平行沈線文によって文様が施されている。74は口縁部破片で、玉抱き三叉文が施文されている。



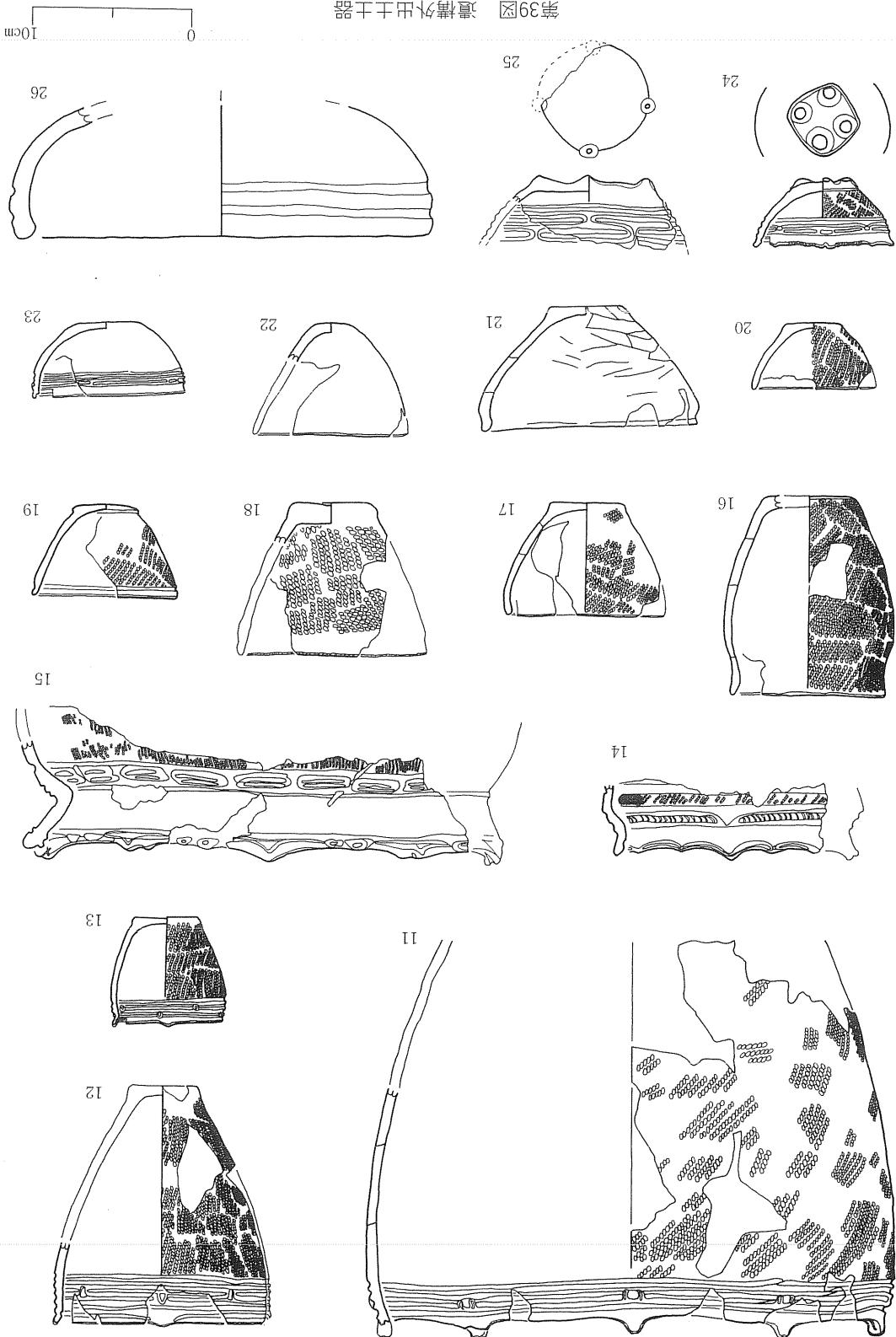
第37図 遺構出土土器

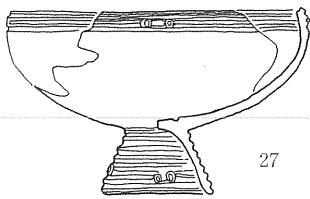
0 10cm



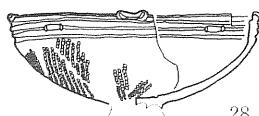
第38図 遺構外出土土器

第39图 谷堆出土土器

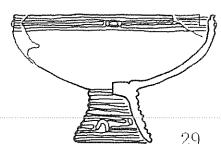




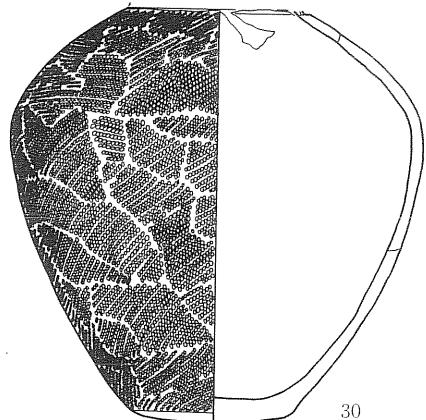
27



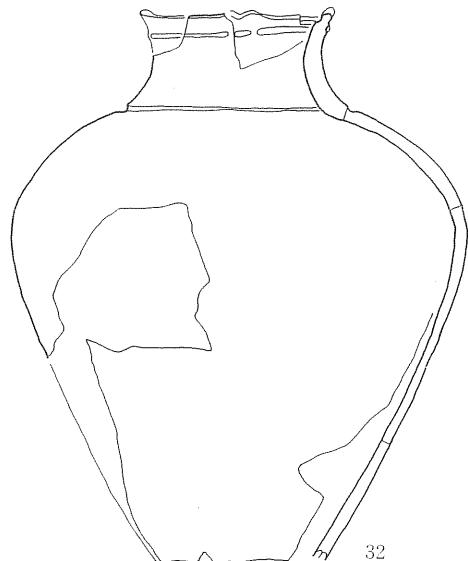
28



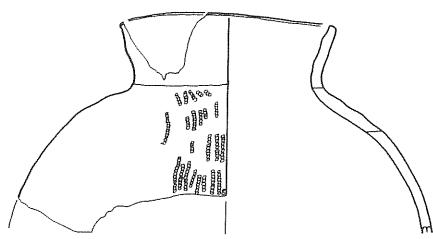
29



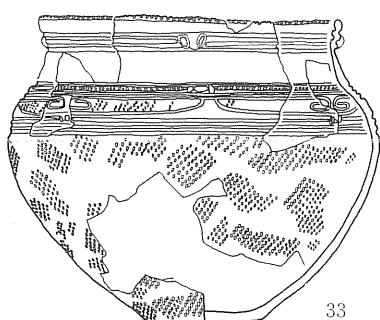
30



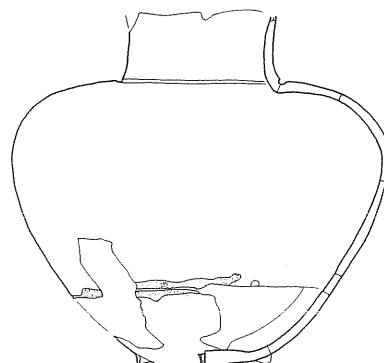
32



31



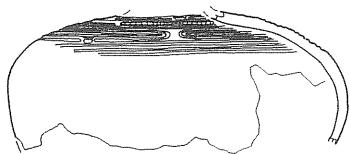
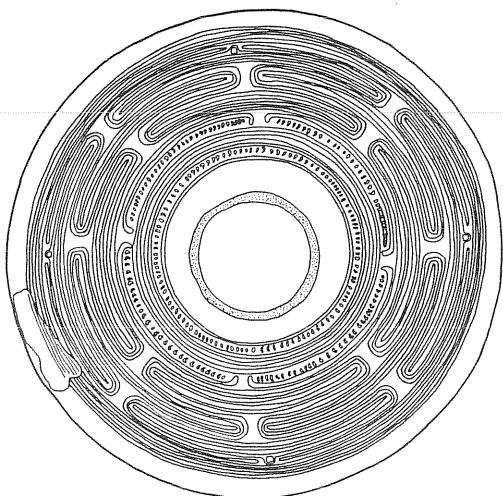
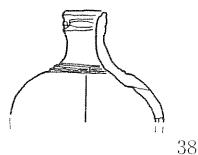
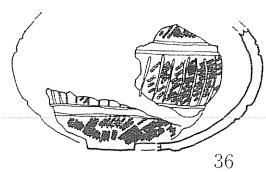
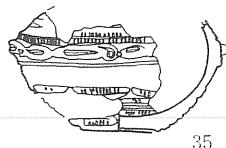
33



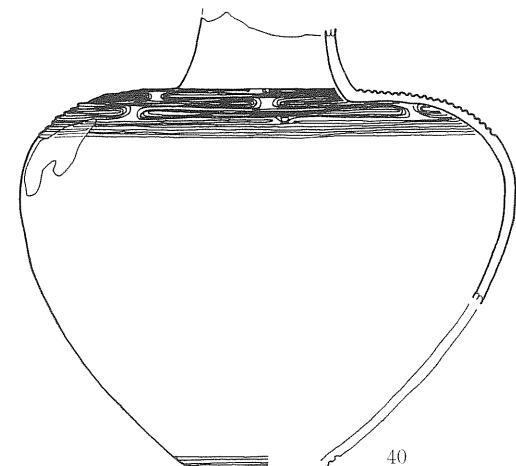
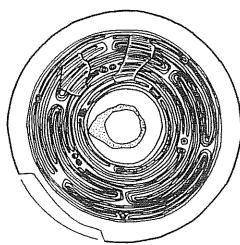
34



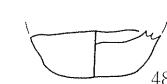
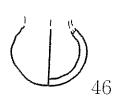
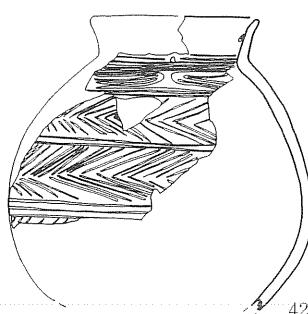
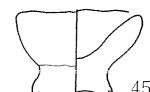
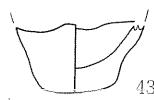
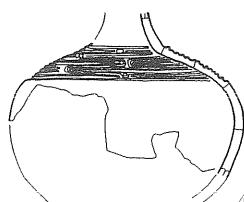
第40図 遺構外出土土器



39



40



0 10cm

第41図 遺構外出土土器

第3群土器（第38図5、第44図82、83、85～96）

縄文時代晚期、大洞B C式土器を本群とした。

1類土器

鉢形土器を本類とした。羊歯状文が施されるものであるが、その施文様からa～c類に分類した。

a類（82、83）

82は小さなB状突起をもち、口唇部に刻みが施される。

羊歯状文は太い線で描かれている。83は頸部が「く」の字状に外反し、口唇部に刻みを連続して施し、下部の羊歯状文は太く、間には口縁部刻みと同様の刻みが配される。

b類（85～89）

85、87、88は線の太い、末端のかみあわない羊歯状文が施されるものである。86、89は小破片で、詳細は不明であるが、直線化した羊歯状文の上下に截痕列が施されている。

c類（90～96）

器厚が薄く、胎土も緻密で、器表面のきめ細かい土器である。線の細い末端のかみあわない羊歯状文が施されるものである。

2類土器（5）

注口土器である。細い沈線によって文様が施され、口縁部には截痕列がみられる。

第4群土器（第38図6～9、第44図97～99、第45図103～129、第46図130）

大洞C式土器を本群とした。深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器がある。

1類土器

深鉢形土器を本類とした。施文様からa～c類に分類できる。

a類（81、84）

口縁に小さな山形突起をもつ。磨消された口縁部に数条の沈線をめぐらし、その間に上下2段に截痕列が施されるものである。体部は単節斜縄文が施文される。

b類（7、9）

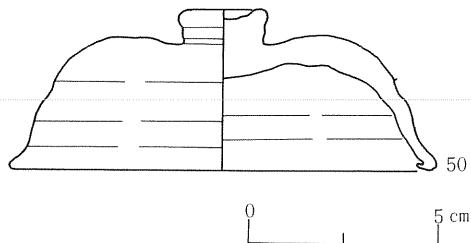
波状口縁で口縁部に2～3条の平行沈線文がめぐる。体部には単節斜縄文、羽状縄文などが施文される。

c類（6、8）

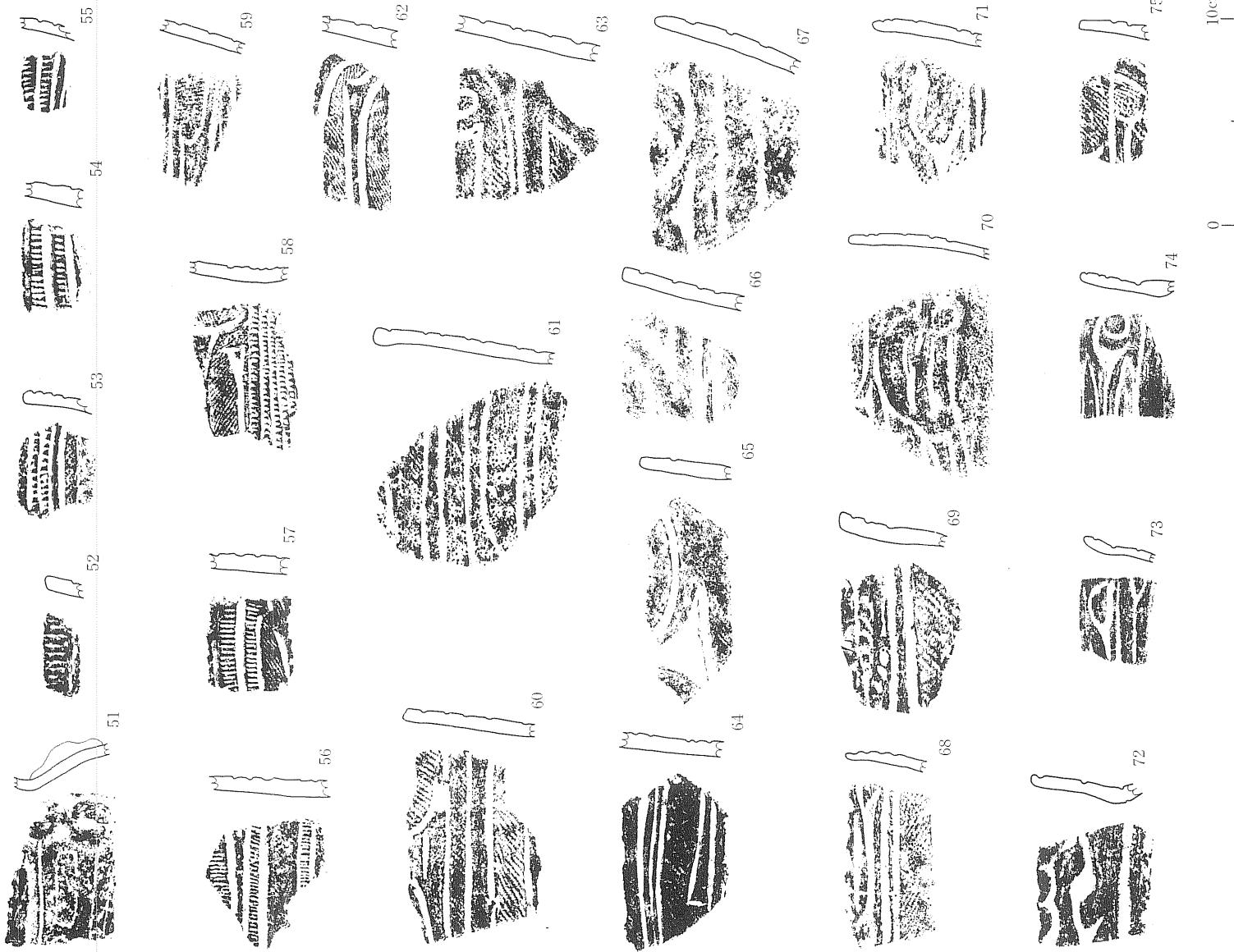
波状口縁で口縁部が磨消無文帶をなす土器である。

2類土器

鉢形土器を本類とした。施文様からa～d類に分類される。



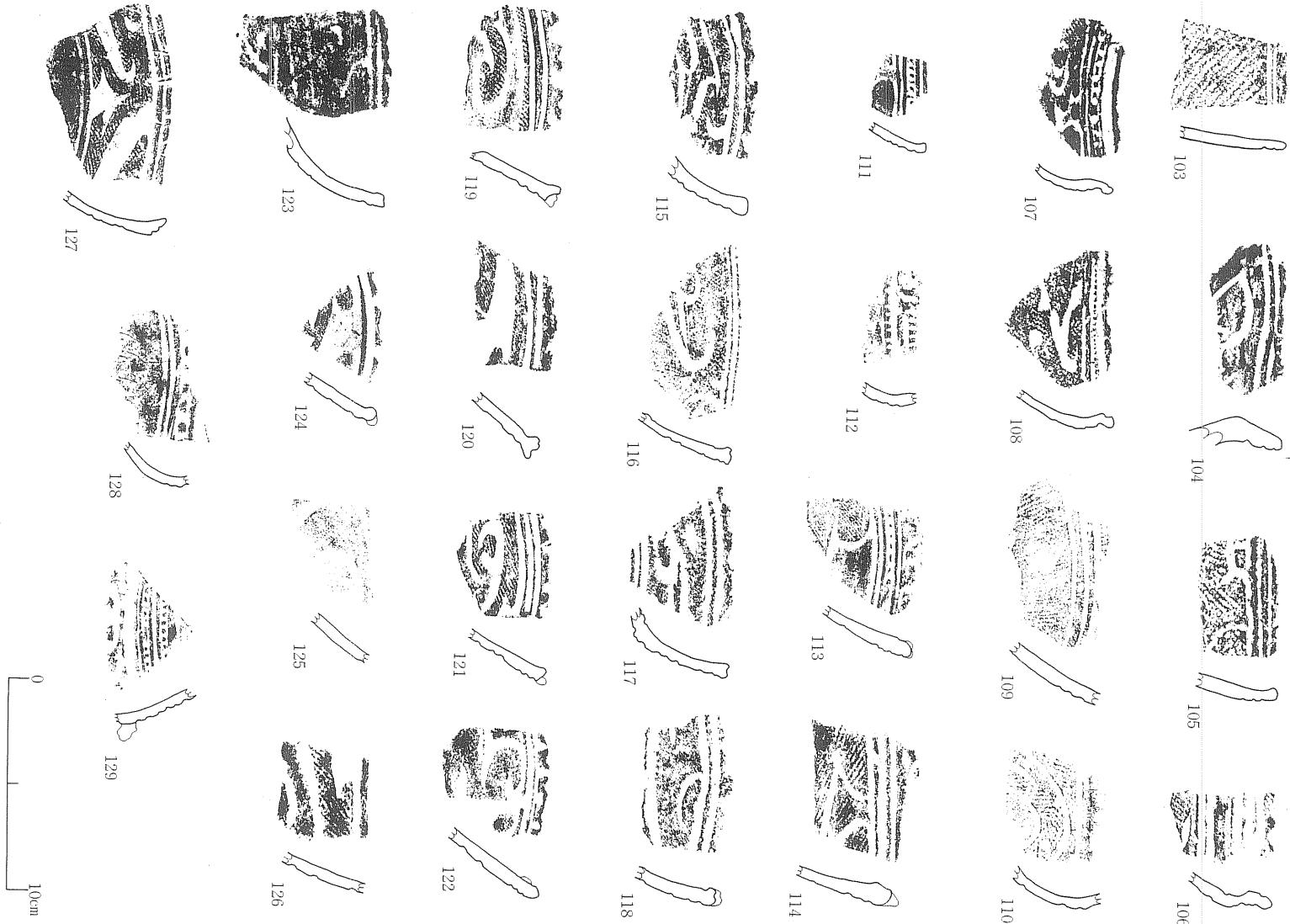
第42図 遺構外出土土器



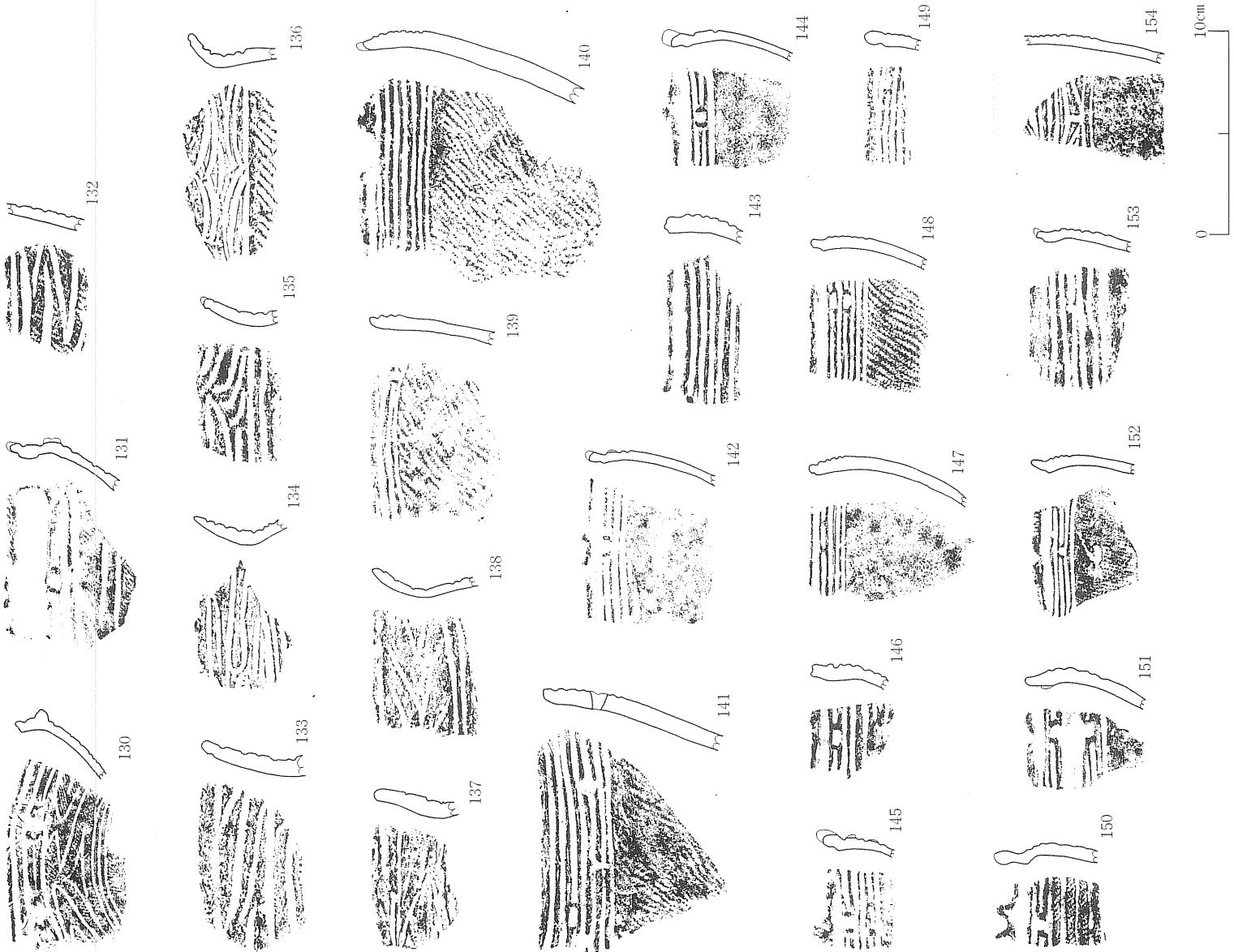
第43圖 遺構外出土遺物



第44図 遺構外出土土器



第45図 遺構外出土土器



第46図 遺構外出土土器

a類 (97、99)

口縁部に平行沈線文がめぐり、沈線間に連続刻目文が施される。体部は単節斜縄文である。

b類 (103～106、109、110、114)

口縁部に数条の沈線がめぐり、沈線下は地文の単節斜縄文だけのもの (103、109) 、沈線により木葉形の文様を施すもの (104) 、また四叉状の文様が施文されるもの (105、114) がある。

c類 (107、108、111、112)

口縁部に連続刻目文が施され、体部は磨消しによる雲形文が施文される土器である。

3類土器

浅鉢形土器を本類とした。施文様から a、b類に分類できる。

a類 (113、115～118、127)

口縁部は平縁のもの、連続した小突起をもち、内面に、連続刻目文が施される (113) ものがある。口縁部には数条の平行沈線文がめぐり、沈線間に連続刻目文が施されるものや、体部は磨消縄文によるX字文、雲形文が施文されるものがある。

b類 (119～124)

口縁部に小さな双頭突起を連続して施し、2～3条の平行沈線文がめぐっている。体部には磨消縄文による雲形文が施文されている。

4類土器 (128)

壺形土器を本類とした。128は頸部が外反する小型壺形土器である。胴部に2条の平行沈線文をめぐらし、刺突による半截痕を施している。胴下半は磨消無文帯である。

5類土器 (129)

注口土器を本類とした。129は平行沈線間に2段に連続刻目文が施されている。

第5群土器 (第39図14、第44図100～102、第46図130～132、第47図181、182、第48図183～189、
第49図232、233、第50図234～236、240)

大洞C₂式土器を本群とした。

1類土器

鉢形土器を本類とした。施文様から a～d類に分類した。

a類 (100～102)

口縁部が内反し、口縁が外反する鉢形土器である。口唇部に刻をもち、磨消された口縁部には半截竹管状工具により連続した刺突文が施されるが、刺突の途切れる箇所も見られる。体部は単節斜縄文である。

b類 (130～132)

平縁と小突起を付すものがある。130、131は2個1対の瘤状突起を付し、体部文様は磨消手法による雲形文が直線化し、横方向に展開する。

c 類 (232~236、240)

平縁で口唇部に刻みを施すものもある。数条の平行沈線文が口縁部の上、下部二段にわたって施され、その間にはC字状の文様が、向きを変えて二段に施されるもの（240）や沈線により背中合わせに配置され、二重に入組むC字文が施される。

d 類 (14、181~187)

口縁は、波状口縁で、山形突起をもつもの、平縁でB状突起を付するものがある。口縁部は磨消無文帶で、細長く区画した内部に半截竹管状工具による刺突文、細かい刻みが施され、胴部には1~2条の沈線がめぐっている。

第6群土器（第39図11~13、15、24、25、第40図27~34、第41図35~42、第46図137~154、第47図155~180、第48図188~205、第49図206~231、第50図241~262、第51図263~288、第52図289~295）

大洞A式土器を本群とした。深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、壺、注口土器がある。

1 類土器

深鉢形土器を本類とした。137、138は、口縁部に沈線によって文様が施され、矢羽状沈線文などが施文される。

2 類土器

鉢形土器を本類とした。その施文様からa~e類に分類した。

a 類 (11~13、139~162)

口縁は平縁が多いが、小さな山形突起、B状突起をもつものもある。文様は口縁部に施され、数条の平行沈線文が施文され、1~2段に2個1対の粘土粒が貼付されるものや、π状工字文が施されるものがある。

b 類 (163~180)

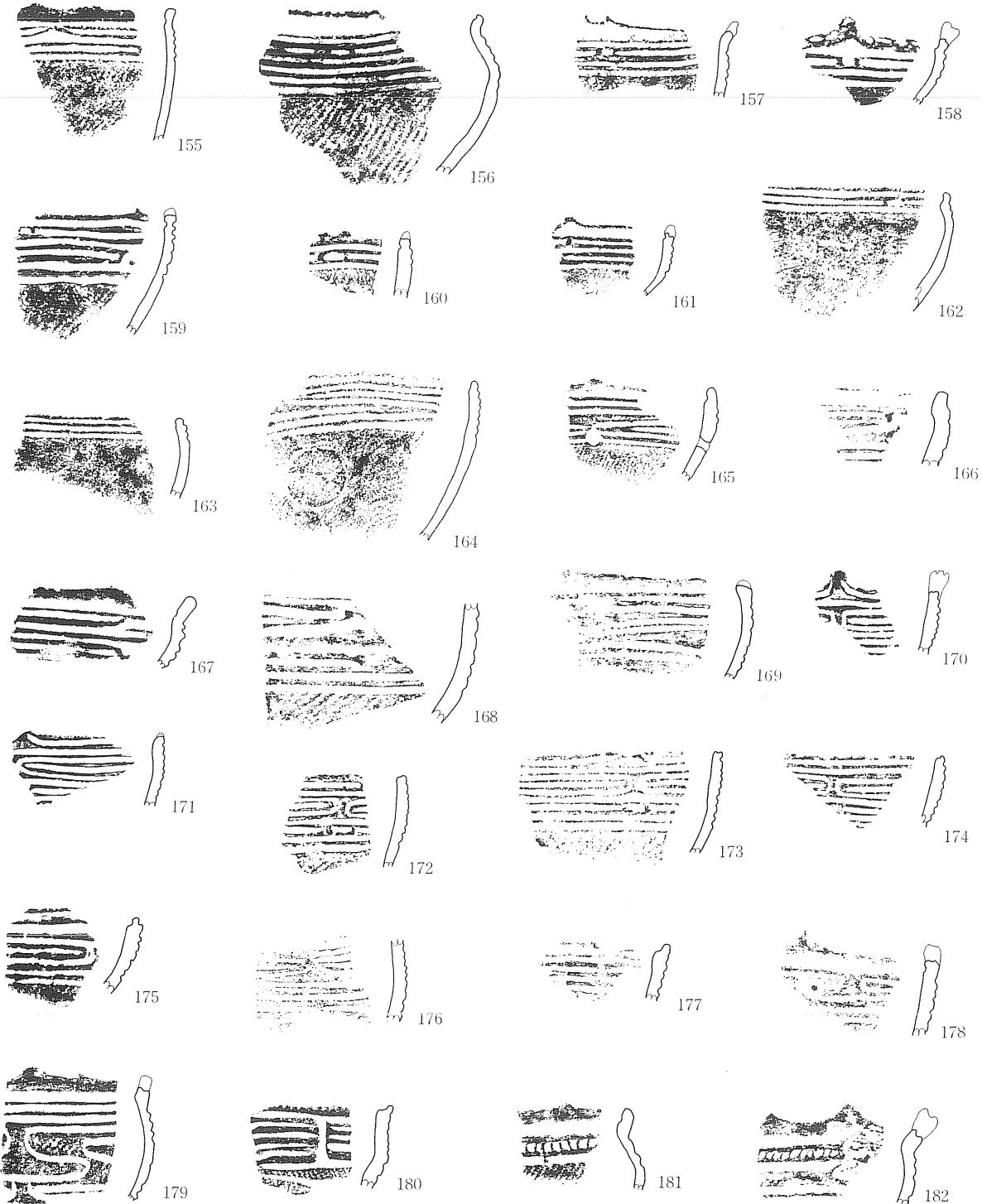
口縁は平縁と山形突起をもつものがある。数条の平行沈線文が施され、沈線による工字文が施文される。中には工字文の下部に2個1対の粘土粒を貼付するものも見られる。180は沈線を縦に施し、工字文を描いている。

c 類 (188~190)

口縁は、山形突起、B状突起をもつものと平縁のものがある。数条の平行沈線文、沈線による工字文が施文される。2個1対の瘤状突起が貼付されている。

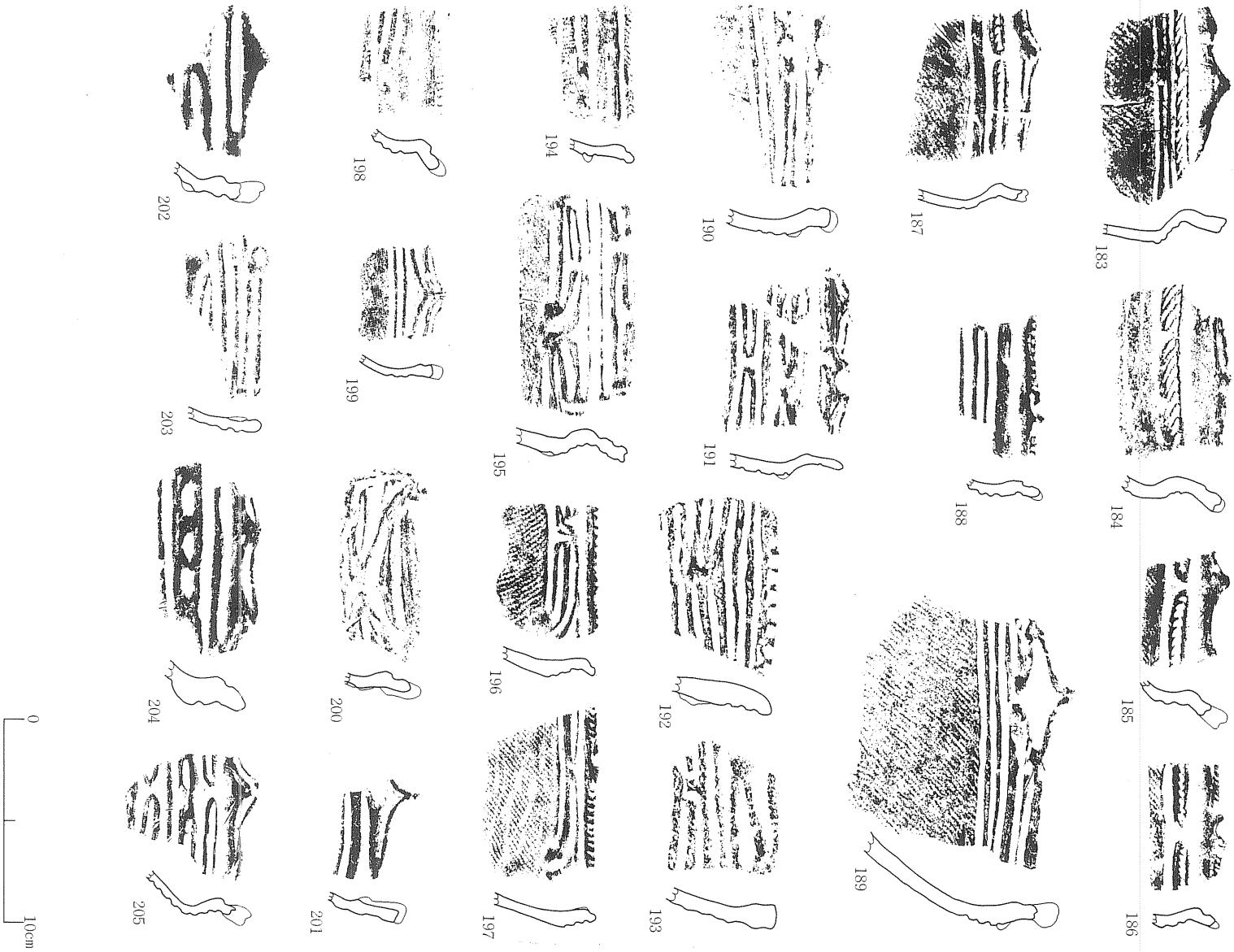
d 類 (206~228)

口縁は小さな、山形突起、B状突起をもつものと平縁のものがある。口縁部が内反し、内面に1条の沈線がめぐっている。ほとんどが口縁部に2個1対の瘤状の小突起を貼付し、体部文様は、数条の平行沈線文、沈線による工字文、π状工字文が施文されている。



第47図 遺構外出土土器

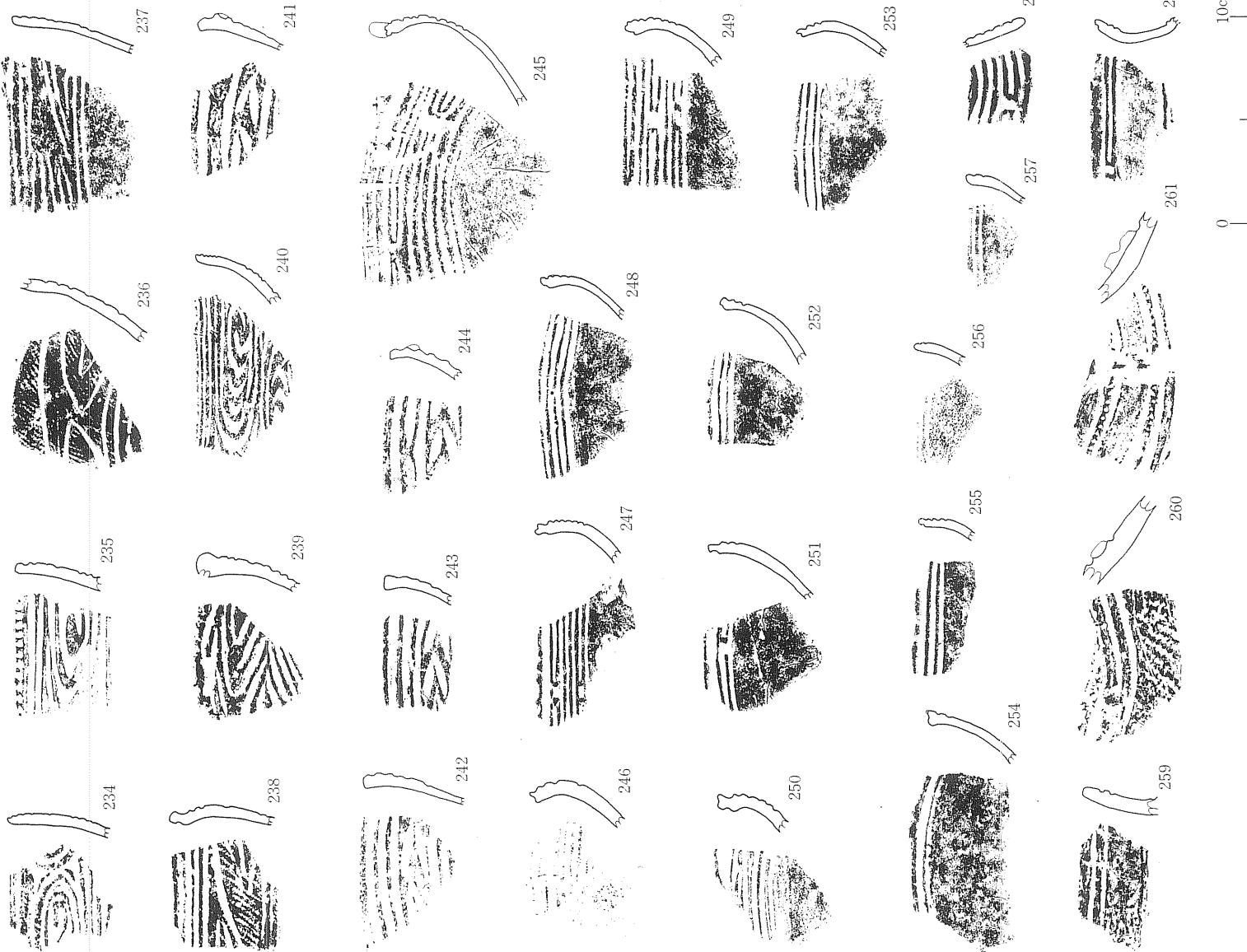
第48図 遺構外出土器





0 10cm

第49図 遺構外出土土器



第50図 遺構外出土土器

e 類 (204、205、229～231)

口縁は、平縁、波状口縁、山形突起をもつものがある。口縁部は細長い楕円で、メガネ状に区画される。体部は沈線による、工字文が施文されている。

3 類土器

浅鉢形土器を本類とした。その施文様により、a～e 類に分類できる。

a 類 (241～244)

平縁で、口縁部に1条の沈線がめぐる。体部文様は、平行沈線とその間に矢羽状沈線文が施文されている。部分的にベンガラが塗布されている。

b 類 (245、246)

245は、口縁に小さな山形突起をもつ。文様は全て、沈線で描かれ、口縁部と体部下方に2条ずつの平行沈線文が施される。その間に半单位ずらして、上段はπ状、下段は沈線による工字文が施文されている。

c 類 (247～251)

247を除き、平縁である。平行沈線文が施文され、1段、あるいは上下2段に粘土粒小突起が貼付される。

d 類 (252～257)

口縁部に数条の平行沈線文が施文されている。体部はきれいに研磨され、無文帯となっている。
254は、ベンガラが塗布されている。

e 類 (258)

258は台付浅鉢形土器の脚部である。平行沈線文が施文され、π状工字文が施される。

4 類土器

壺形土器を本類とした。その施文様から a～g 類に分類できる。

a 類 (259～260)

同一個体である。口縁と頸部に2条ずつの沈線がめぐり、頸部沈線上に瘤状の突起が貼付されている。

b 類 (261)

頸部破片である。2条の帯状の浮線上に爪形の刺突を施し、上下を瘤状の突起で連結させている。

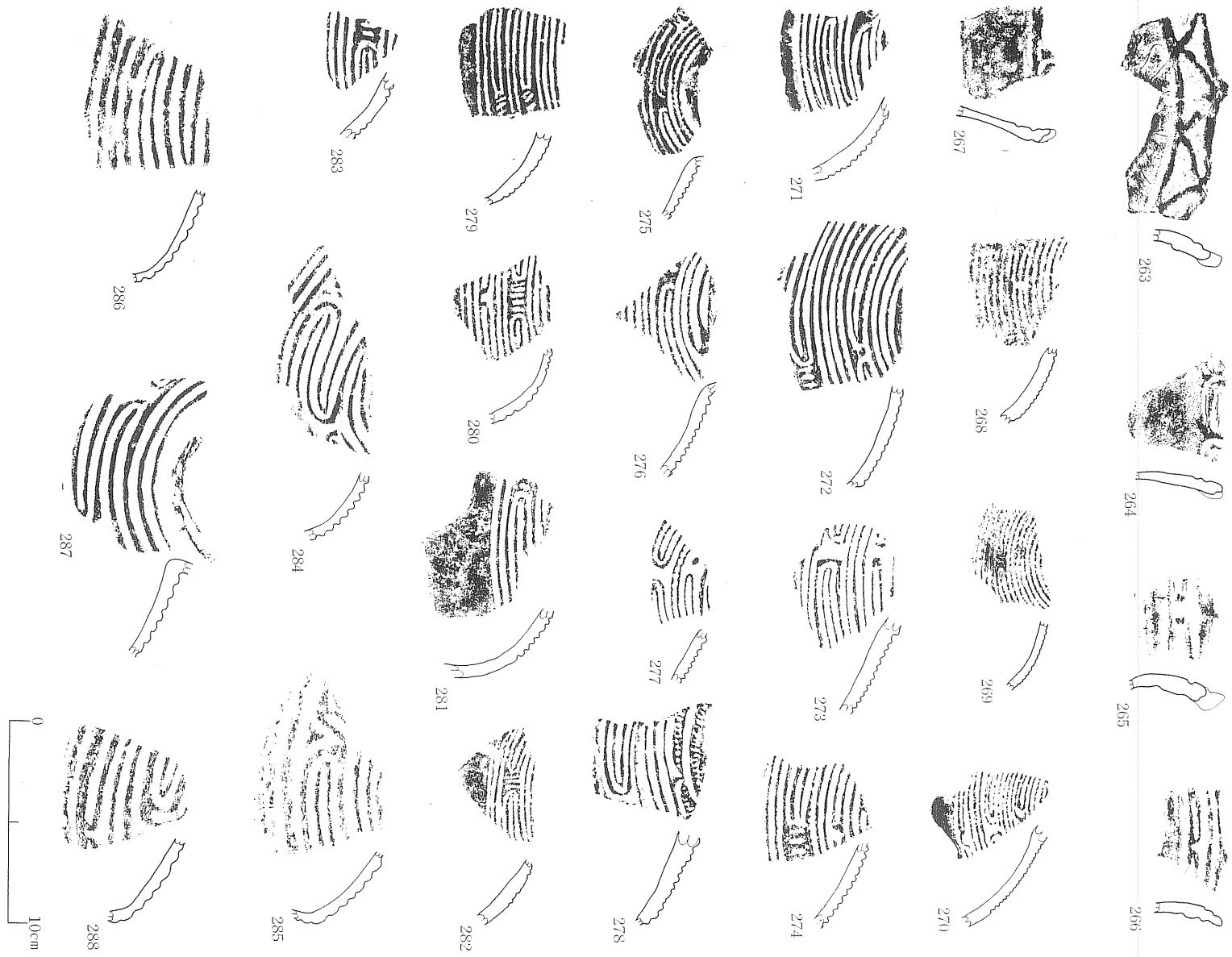
c 類 (262)

口縁部破片である。口縁と頸部に2条ずつ沈線を施し、口縁部にπ状工字文が、施される。

d 類 (263～267)

口縁部破片で山形突起をもつ。263は口縁部に隆線をめぐらし、突起の頂部から隆線で三角形に区画している。264、267は同一個体で、突起間、突起上に沈線を施している。頸部は無文である。
265、266は口縁部に、π状工字文が施されている。

第51図 遺構外出土土器





第52図 遺構外出土土器

e 類 (268～283)

頸部から胴上部の破片である。平行沈線によって文様が描かれ、π状、四字状の工字文が施文されている。269～272、274～278は頸部や胴上部にめぐらした沈線内や、π状工字文で区画した内部に、連続して刺突文を施している。また272、274は工字文の間に縦位に3～4本の刻みを入れている。273は頸部にめぐらした沈線上に2個1対の粘土粒を貼付している。279～282は工字文の間に縦位に3～4本の刻みを入れるもので、279は上下2段に入っている。

f 類 (284～292)

頸部から胴上部の破片である。太い沈線によって上下が連結する入組工字文や四字文が施されている。

g 類 (293)

胴部破片である。頸部と胴下方に2～3条の沈線をめぐらし、その間に矢羽状沈線文を施している。

5 類土器 (294、295)

注口土器を本類とした。294、295は最大径を計る胴部の隆線上に連続した刻みを施し、瘤状の突起を貼付している。その上、下方には、平行沈線による工字文が施されている。

第7群土器 (第52図296～305)

大洞A式土器を本群とした。296～305は鉢形土器である。口縁は平縁のもの、山形突起をもつもの、また山形突起とB字状突起を併せてもつものがある。体部文様は沈線によって、変形工字文が施されるものである。

第8群土器 (第52図306)

弥生式土器である。壺形土器の口縁部破片で、口縁部に縦位にカキ目を施し、頸部に細い沈線を3条めぐらし、連続刻目文を施している。頸部下はLR单節斜繩文（横位回転）である。

第9群土器 (第42図、第52図307、308)

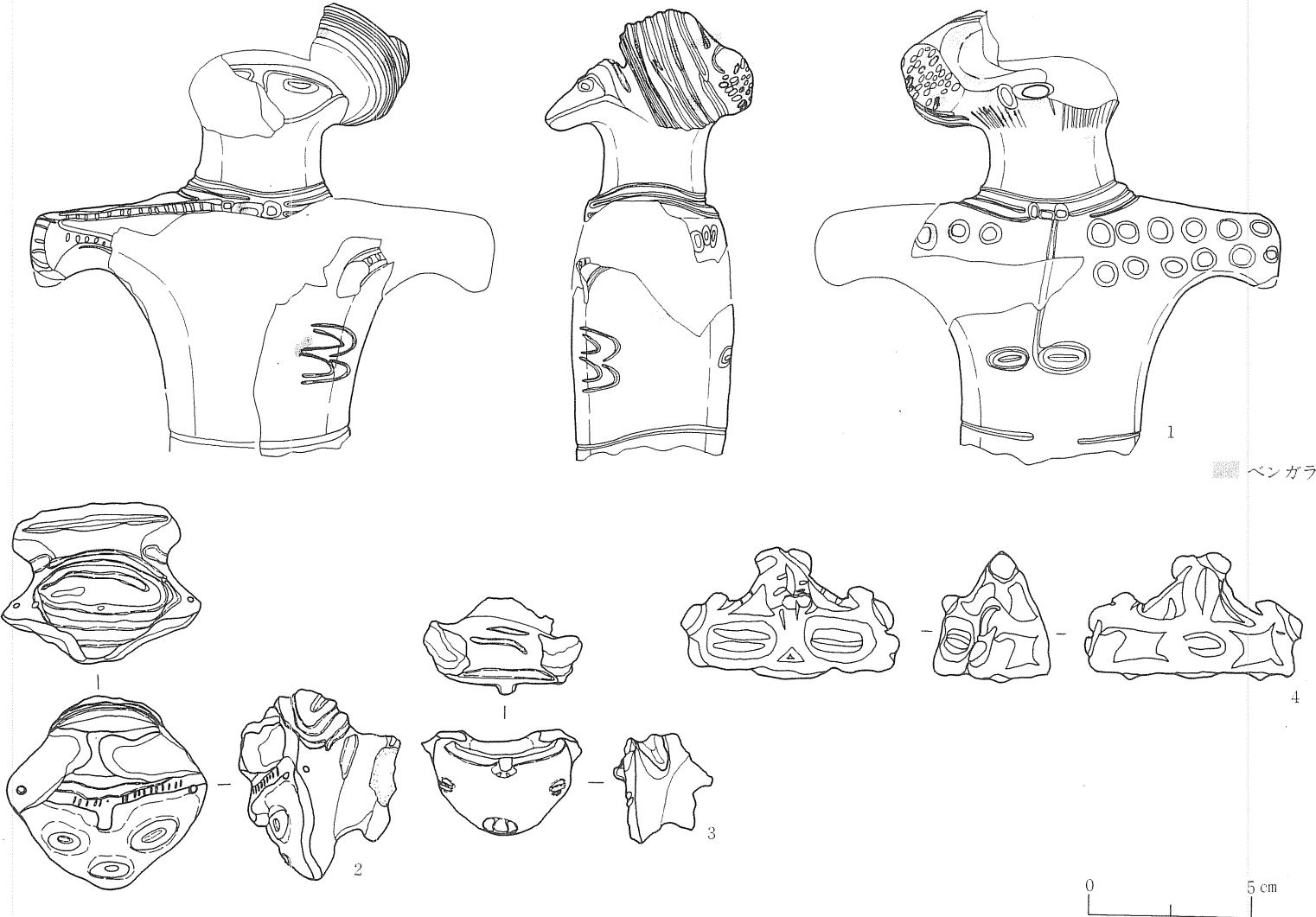
平安時代の須恵器蓋、甕の破片である。

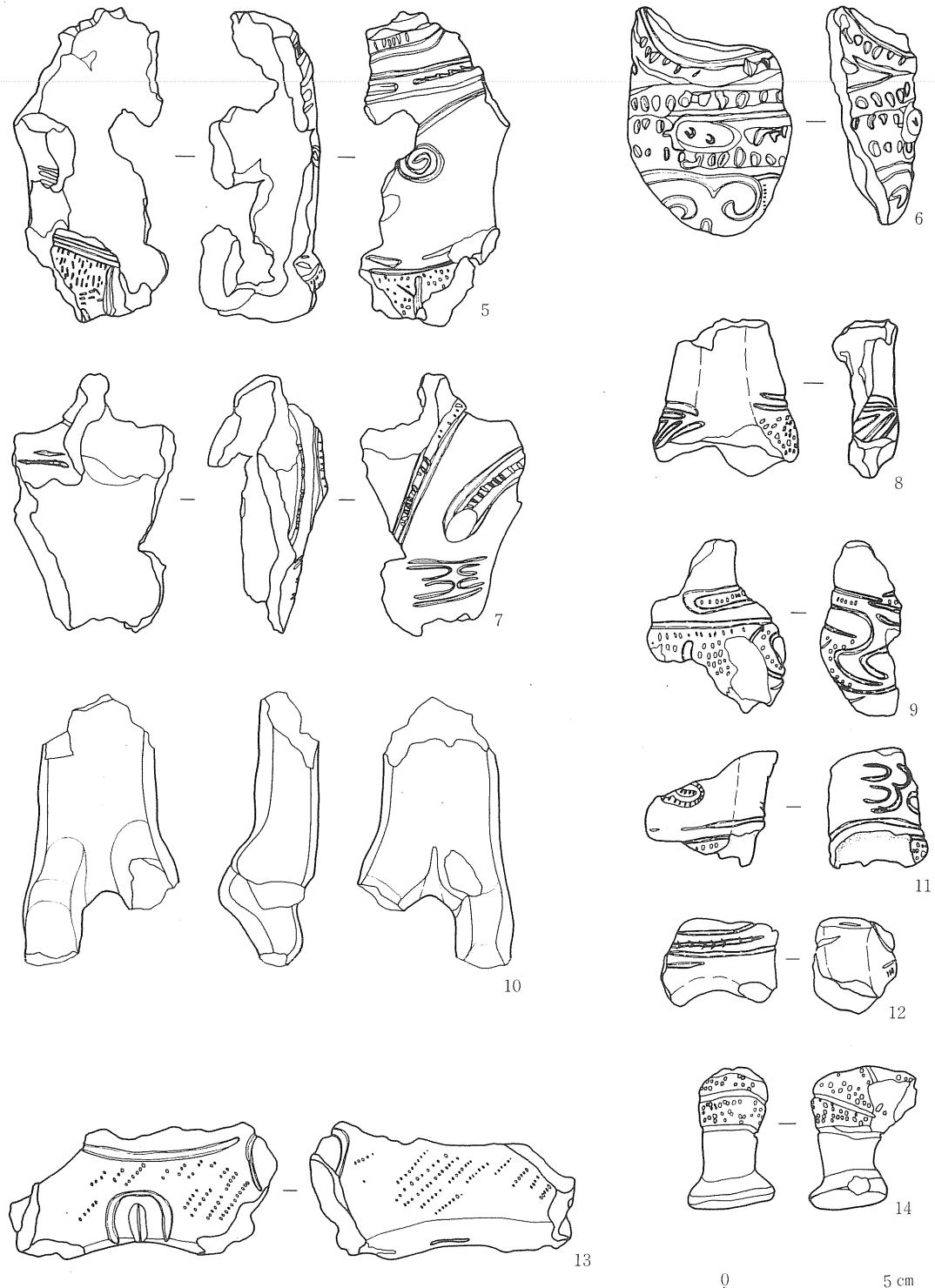
土製品

土偶 (第53～55図)

合計29点出土している。1～3、5～8、11、15、16、18、21、27～29は中空土偶である。1は頭～胴部である。部分的にベンガラが塗布されている。粘土紐貼付で頭部、眉、目を表現している。2、3は頭部である。2は顔の両端に穴をあけ耳を表現していると思われる。3は顔の眉、鼻、目、口は粘土紐貼付により端部に配されている。5は胴部であり中央部に渦巻文が施されている。6は足部で中央部に粘土粒を貼付し連続刻目文が施され、下部は磨消によりχ字文が施されている。7は胴部であり、沈線文と粘土紐貼付上に連続した刻目文が施される。8は胴部、10は胴部から足部

第53図 遺構外出土土製品

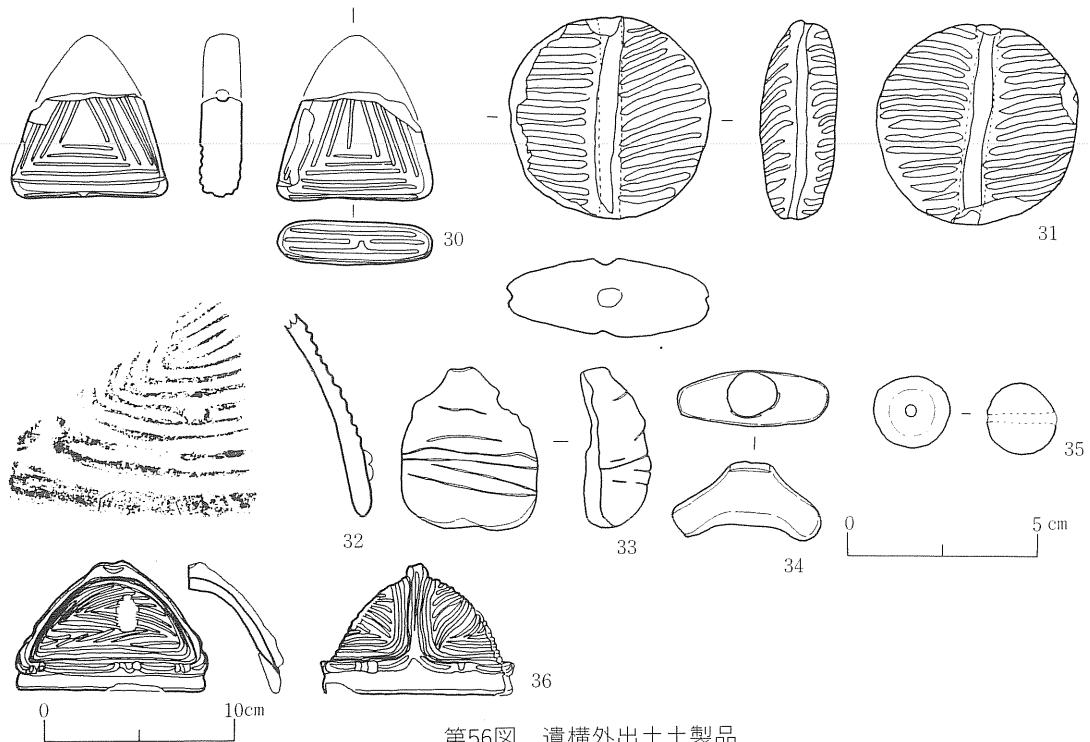




第54図 遺構出土土製品



第55図 遺構外出土土製品



第56図 遺構外出土土製品

にかけての部分で無文である。13は腰部破片である。4は遮光器土偶の頭部である。14～29は足部で、15、25、27には指が表現されている。

その他の土製品（第56～58図）

30は三角形土製品である。底部に工字文が施され、表、裏面には沈線で4重に三角形を描いている。31は円盤状土製品である。断面は橢円形で中央部に穴が貫通しており、表裏面には中心の縦沈線で左右に区画され、双方、横方向に沈線が施されている。縁辺にも1条、沈線がめぐる。32、36は蓋状土製品である。貼付により全体を2区画に分け、同心円状の沈線の内側に矢羽状沈線を施している。33、34は破片で全形は不明である。35は有孔土製品である。37～73は円盤状土製品である。土器の再利用と考えられる。

石製品（第59図）

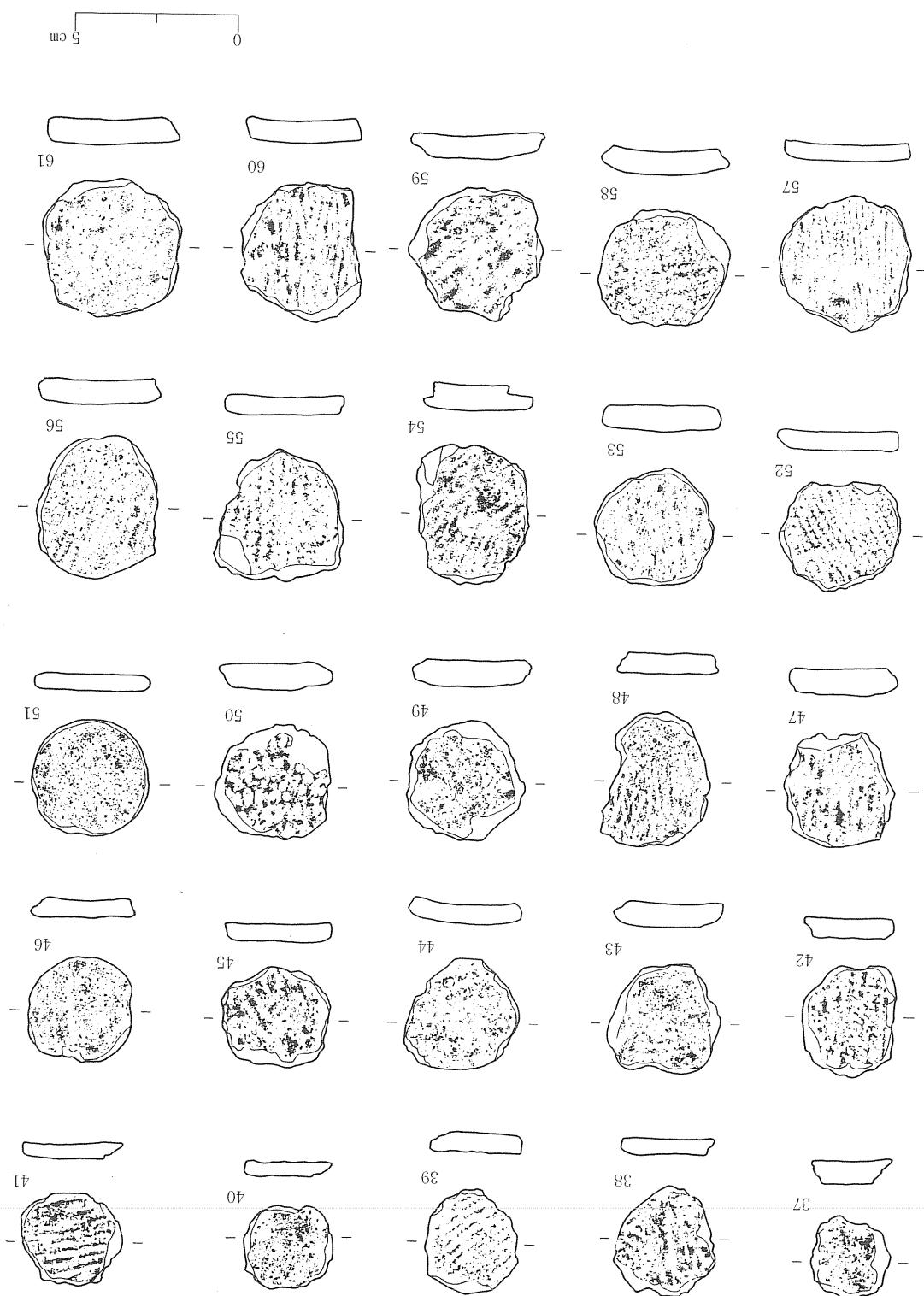
1は岩版である。3.7cm×5.3cmの破片であり両面ともに良く磨かれている。2は勾玉である。両面から穿孔している。3は不明石製品であり環状で全面に敲打調整を施している。4、5は石冠であり5は良く磨かれている。

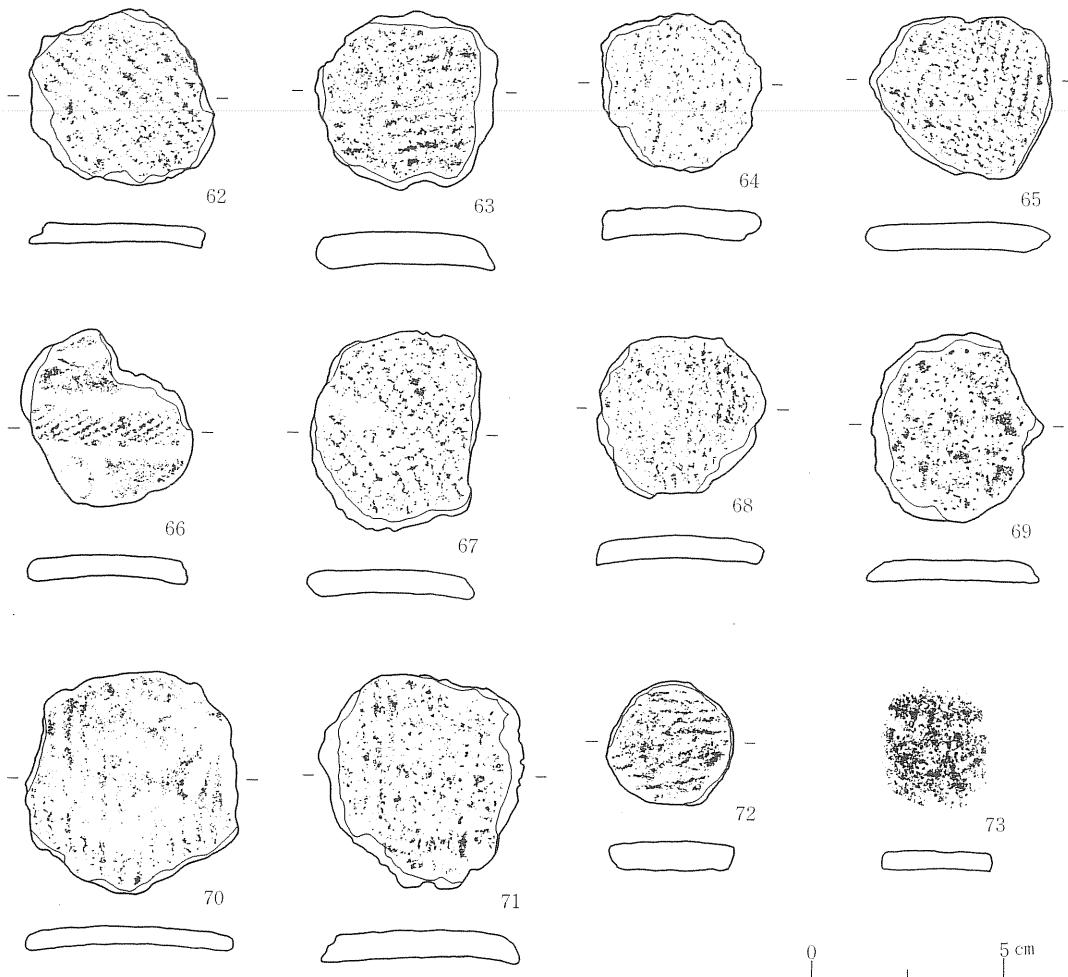
石器

石鏸（第60～66図）

合計220点出土している。形態的には、I類 無茎鏸、II類 有茎鏸に分けられる。I類が5%、II類が94%であり、破損等で分類できないものが2点認められた。

第57图 漢代出土玉器品





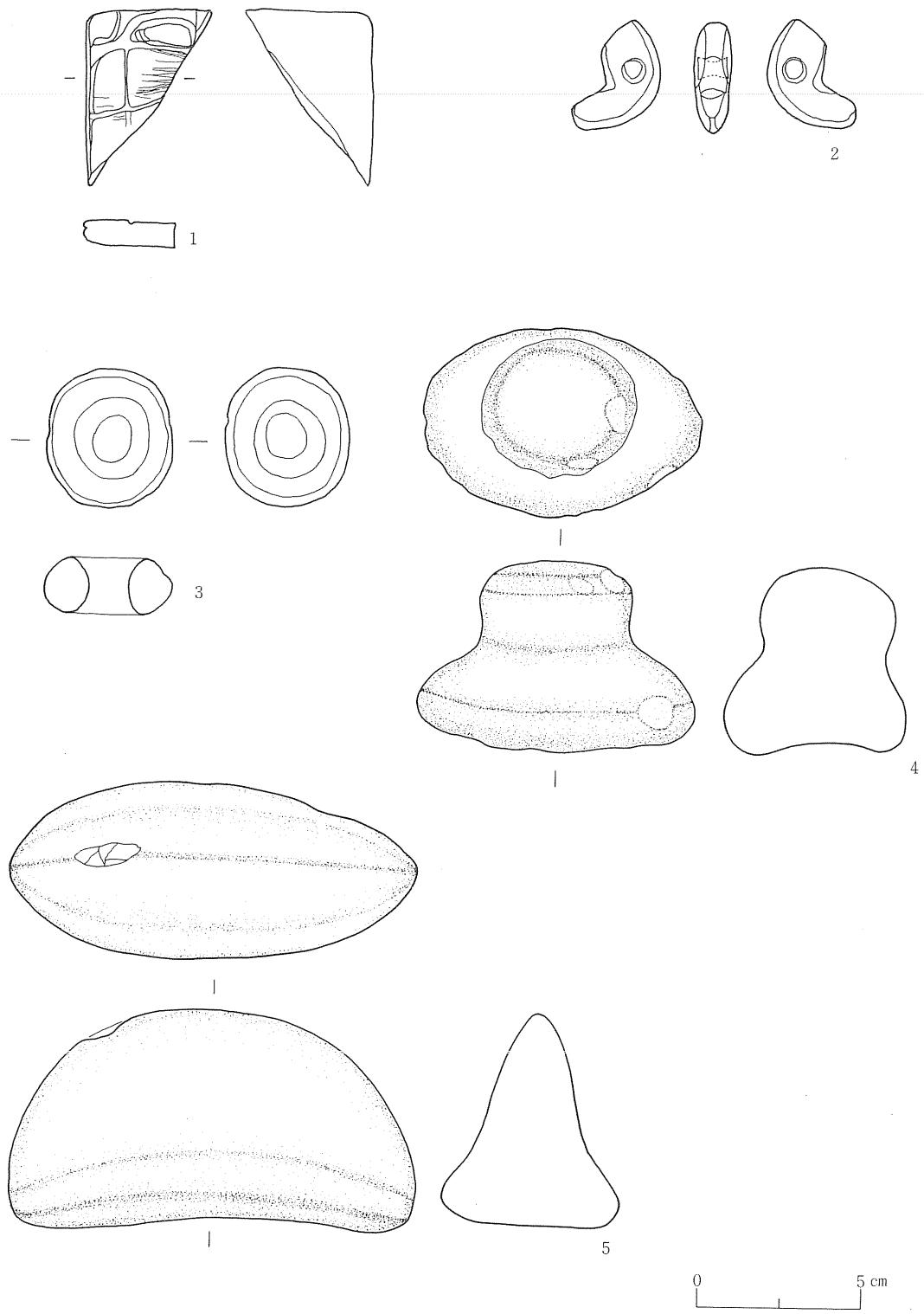
第58図 遺構外出土土製品

I類 無茎鎌

- A 基部が直線的、もしくは浅い抉入が認められるもの。 (194・195・203・207・208)
- B 基部が外側にゆるやかに湾曲するもの。 (206・209・210)
- C 基部にはっきりとした抉入が認められるもの。 (220)

II類 有茎鎌

- A 茎部のつけ根が直角になるもの。 (1～7・9・11)
- B 茎部のつけ根が鈍角になるもの。 (8・10・12・13・15～19・22～44・46・49・51～61
63～67・69～95・128～145・157～162・172・188・189・193・196・200・219)
- C 最大幅の部分から直線的に突出し茎部を形づくるもの。 (14・20・21・45・47・48・50
62・68・96～127・146～156・163～171・173～187・190～192・198・201・202・204・211
～218)



第59図 遺構外出土石製品

分類模式図							
項 目	分 類	I A	I B	I C	II A	II B	II C
アスファルト付着		0	0	0	0	11	5
総 点 数		6	3	1	9	108	91

分類模式図						
項 目	分 類	I	II A	II B	II C	III
アスファルト付着		0	0	0	0	0
総 点 数		5	5	6	3	5

石錐（第67～69図）

合計44点出土している。形態的にI～III類に分類されるが、破損等により分類できなかったのが、20点認められた。

I類 つまみ部が大部分を占め、小さな突起状の錐部を作りだすもの。（221・222・226・232・257）

II類 錐部が棒状であり、つまみ部を有するもの。

A つまみ部の中心部に錐部がつき、錐部がつまみ部より短いもの。（225・228・233・234・236）

B つまみ部の中心部に錐部がつき、錐部がつまみ部より長いもの。（239～242・244・247）

C つまみ部の中心部より端に錐部がつくもの。（237・245・246）

III類 つまみ部のない細い棒状のもの。（258～262）

石匙（第69～73図）

合計51点出土している。つまみ部と刃部の位置関係から縦型、横型、中間型に分類する。破損等により分類できなかったのが、5点ある。

縦型 つまみ部の主軸と刃部の方向が平行するもの。（265～277）

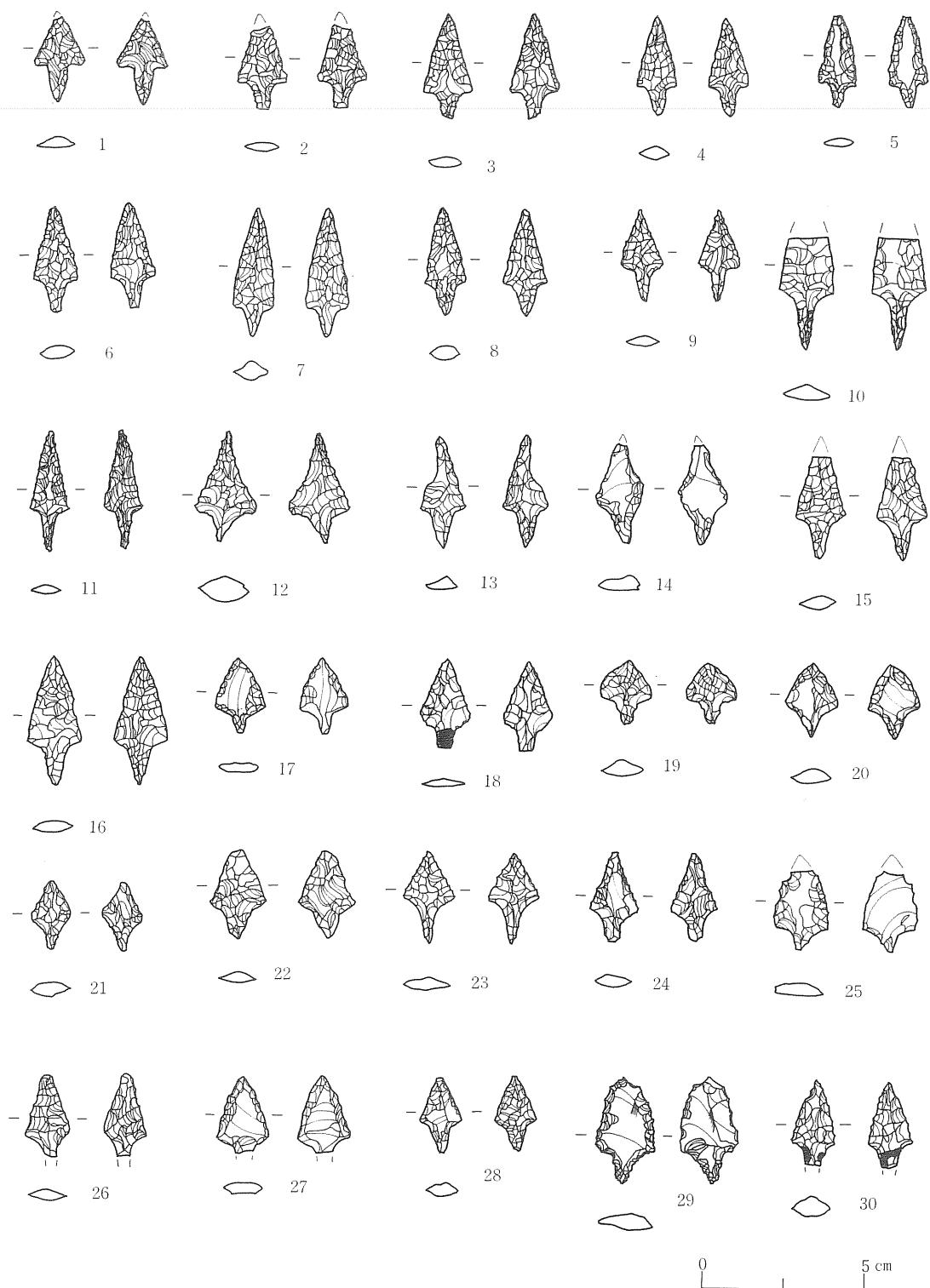
横型 つまみ部の主軸と刃部の方向が直交するもの。（279・281～283・285～312）

中間型 つまみ部の主軸と刃部が斜行するもの。（313）

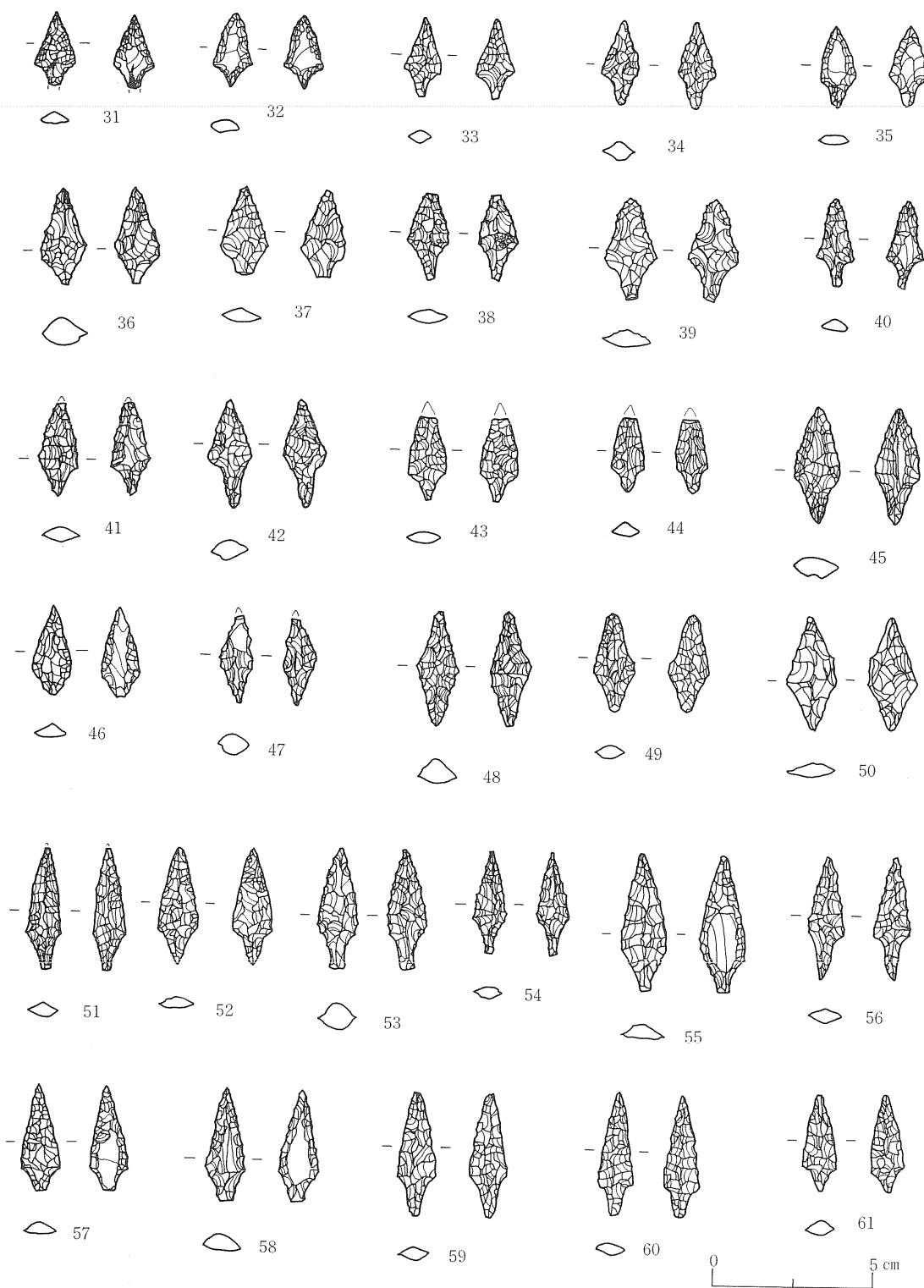
石槍（第73～75図）

合計24点出土している。形態的にI～III類に分類される。

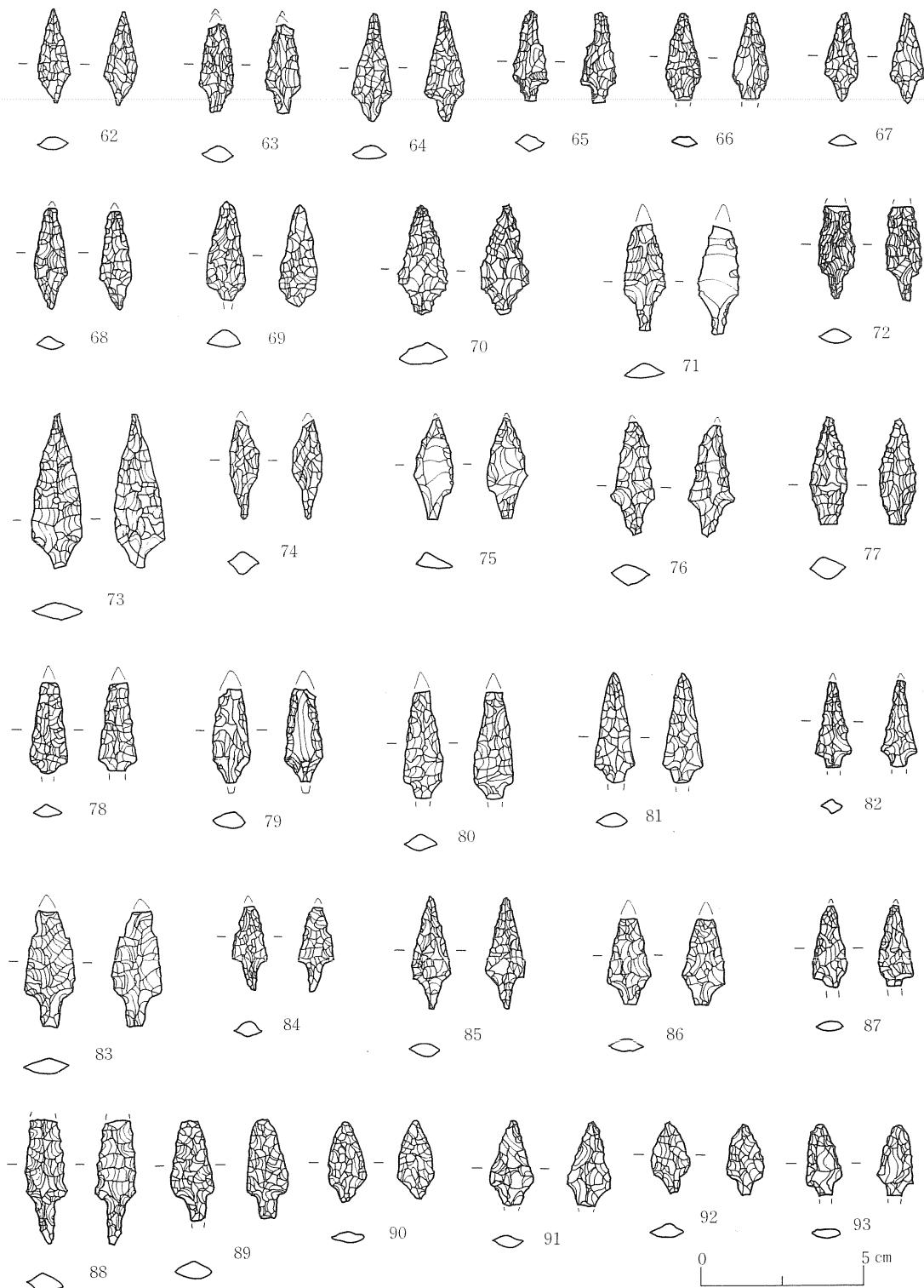
I類 無茎で基部が外側にゆるやかに湾曲するもの。石鍔I Aとは断面に相違が認められる。



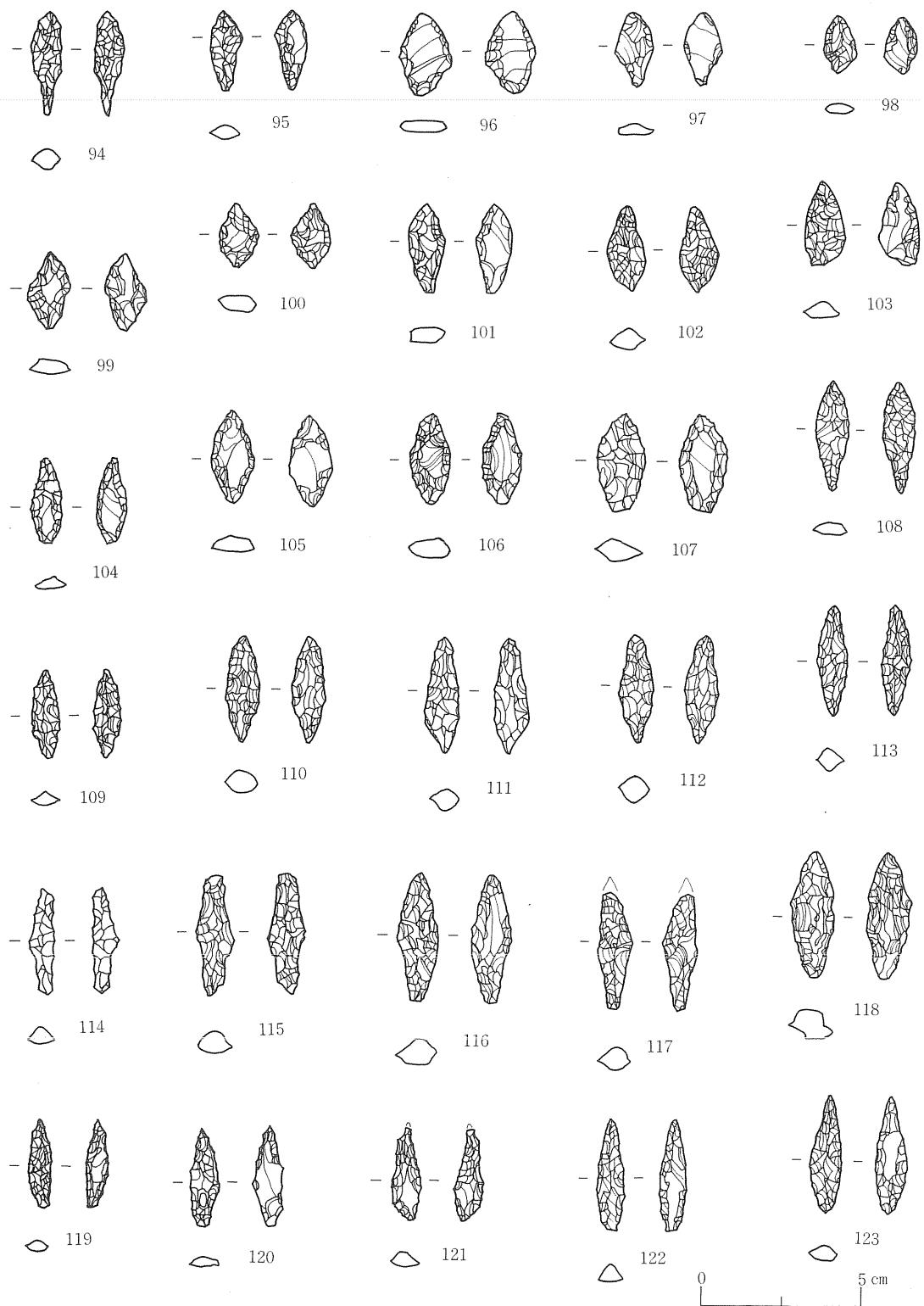
第60図 遺構外出土石器



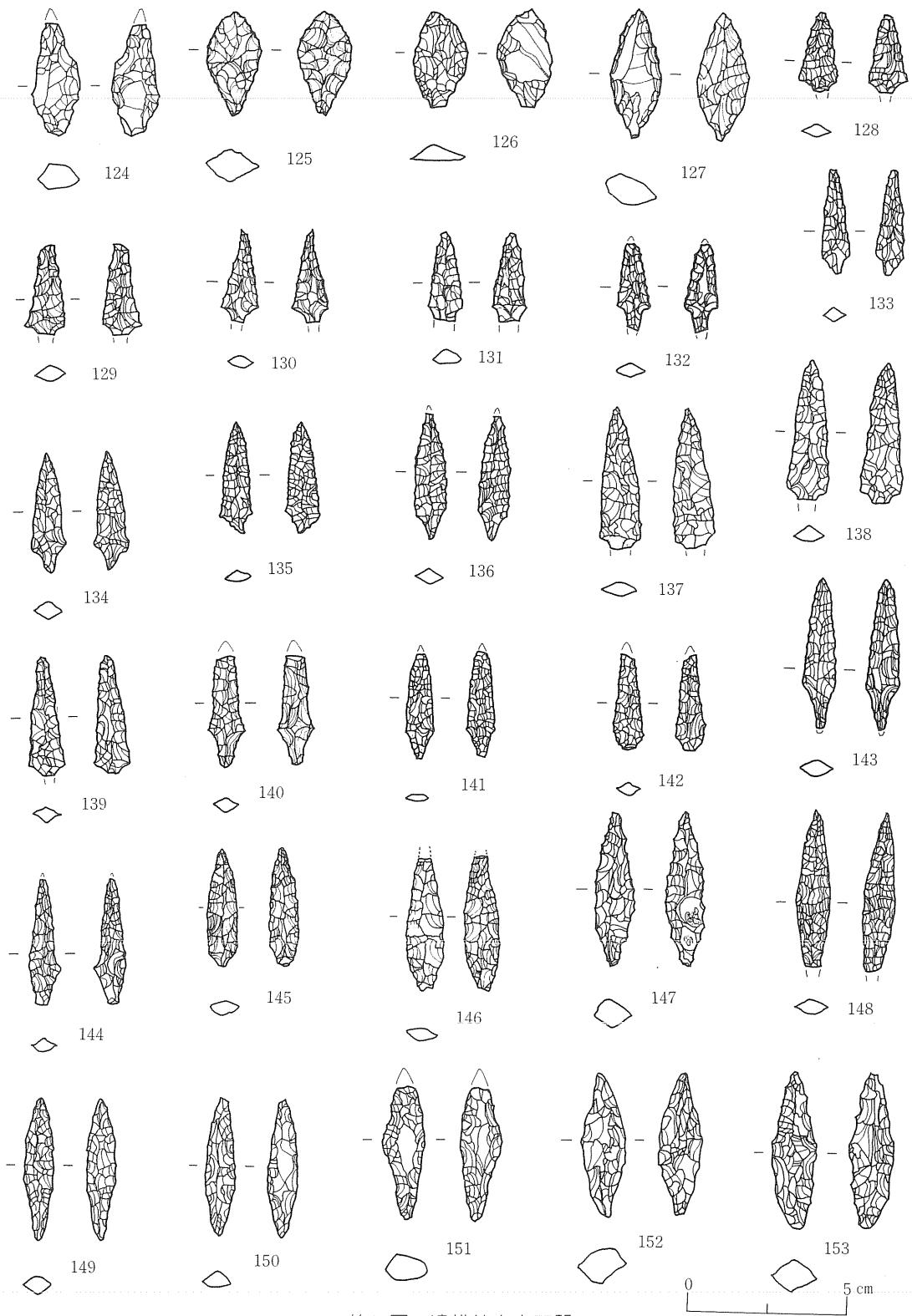
第61図 遺構外出土石器



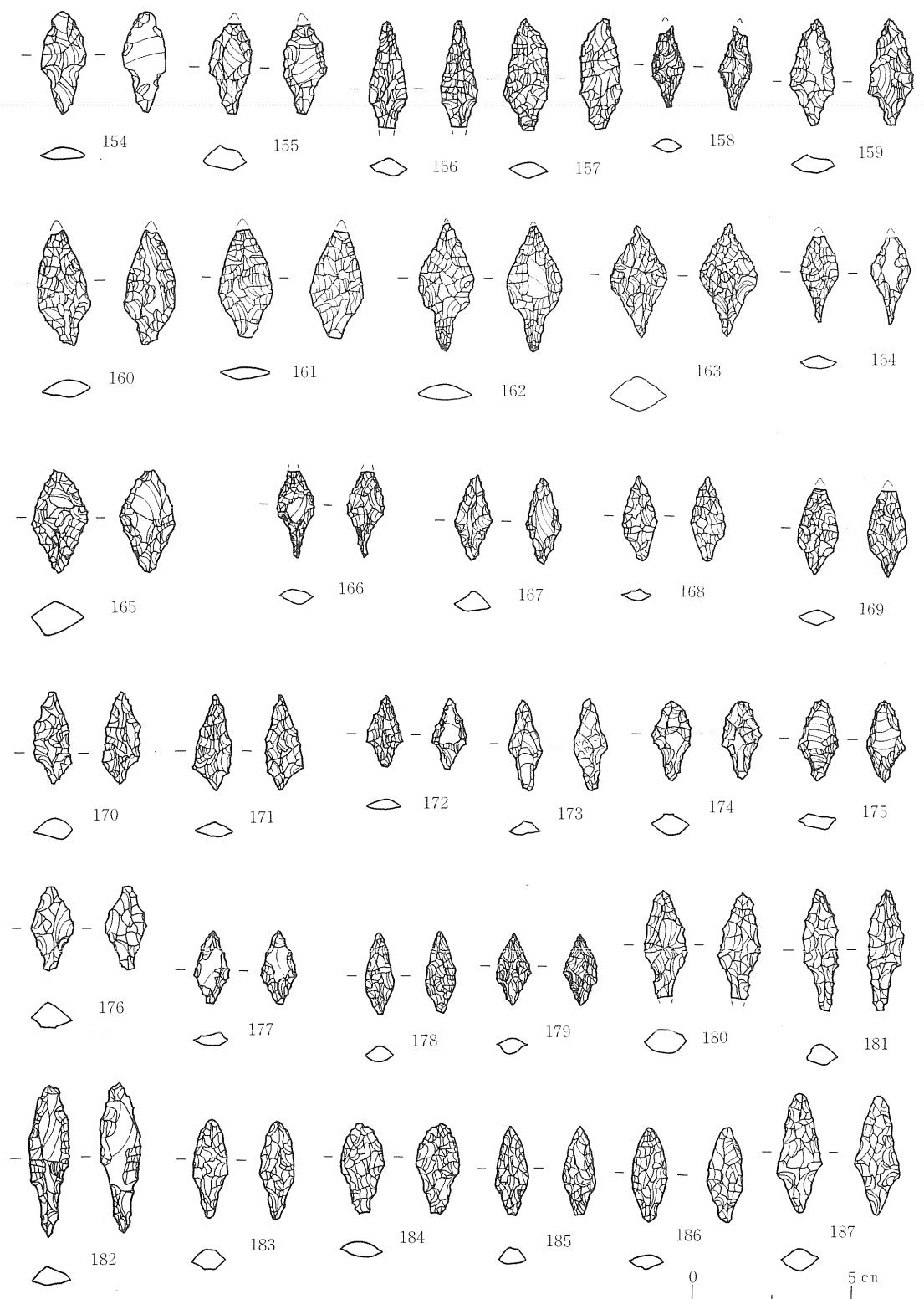
第62図 遺構外出土石器



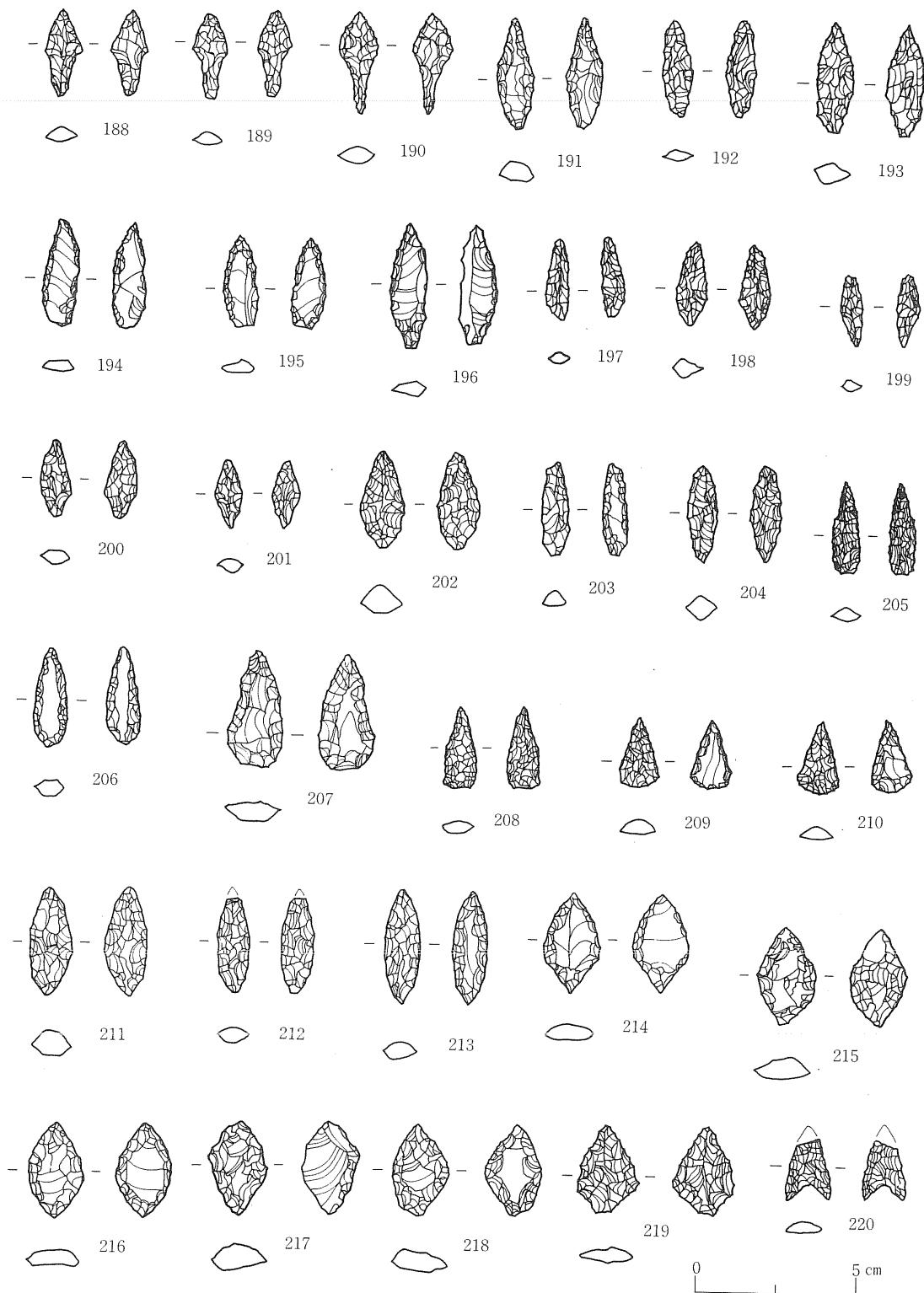
第63図 遺構外出土石器



第64図 遺構外出土石器



第65図 遺構外出土石器

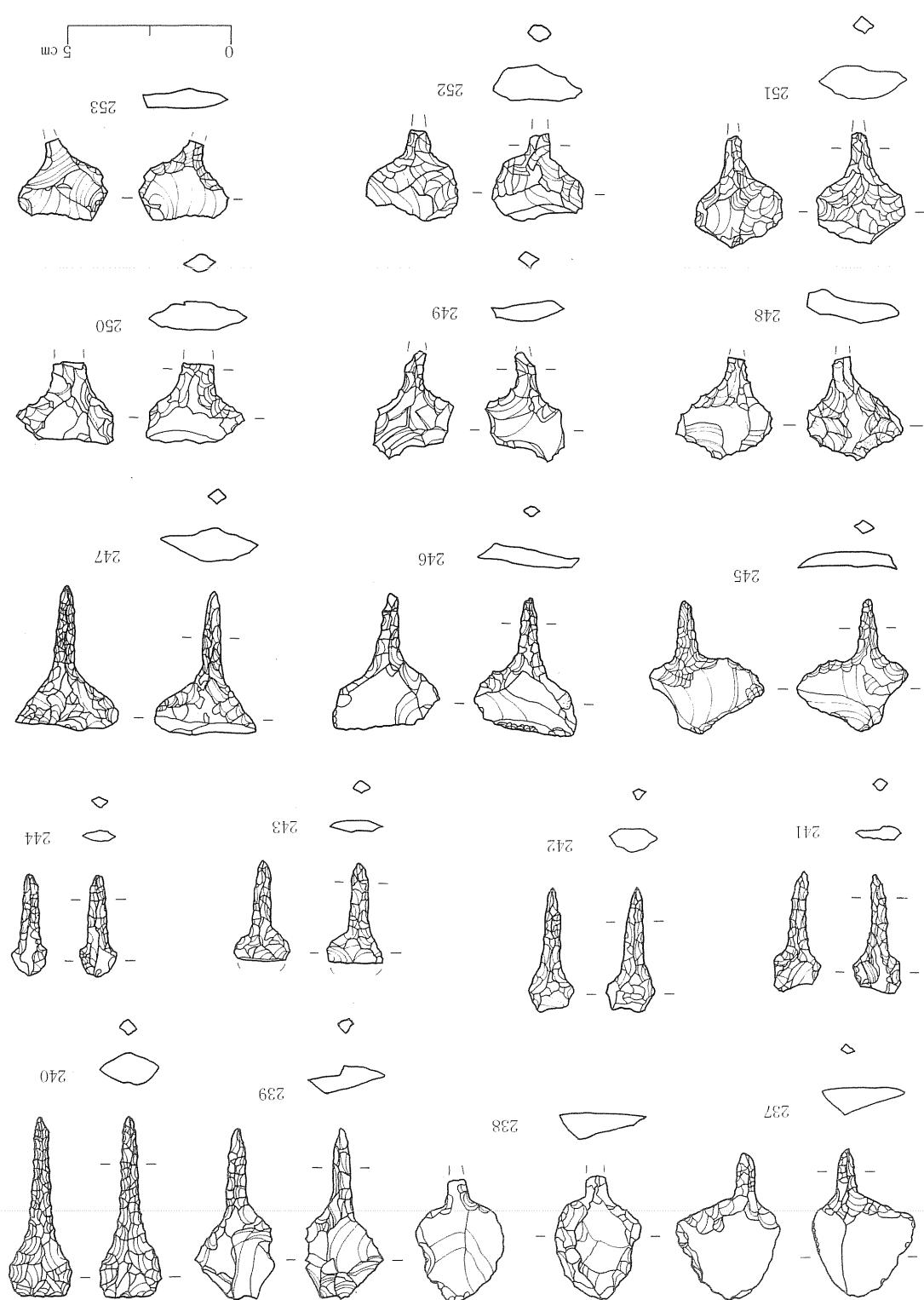


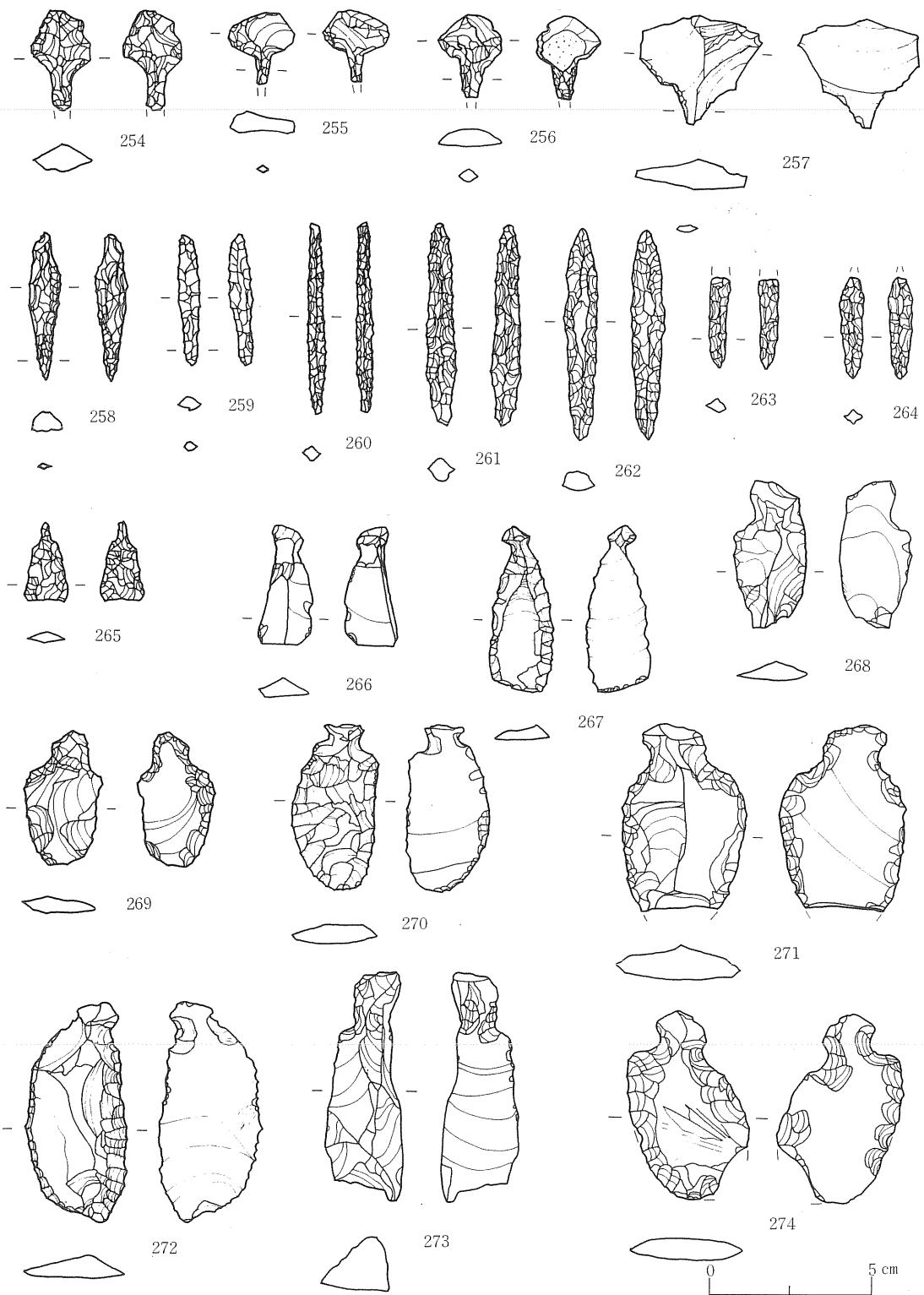
第66図 遺構外出土石器



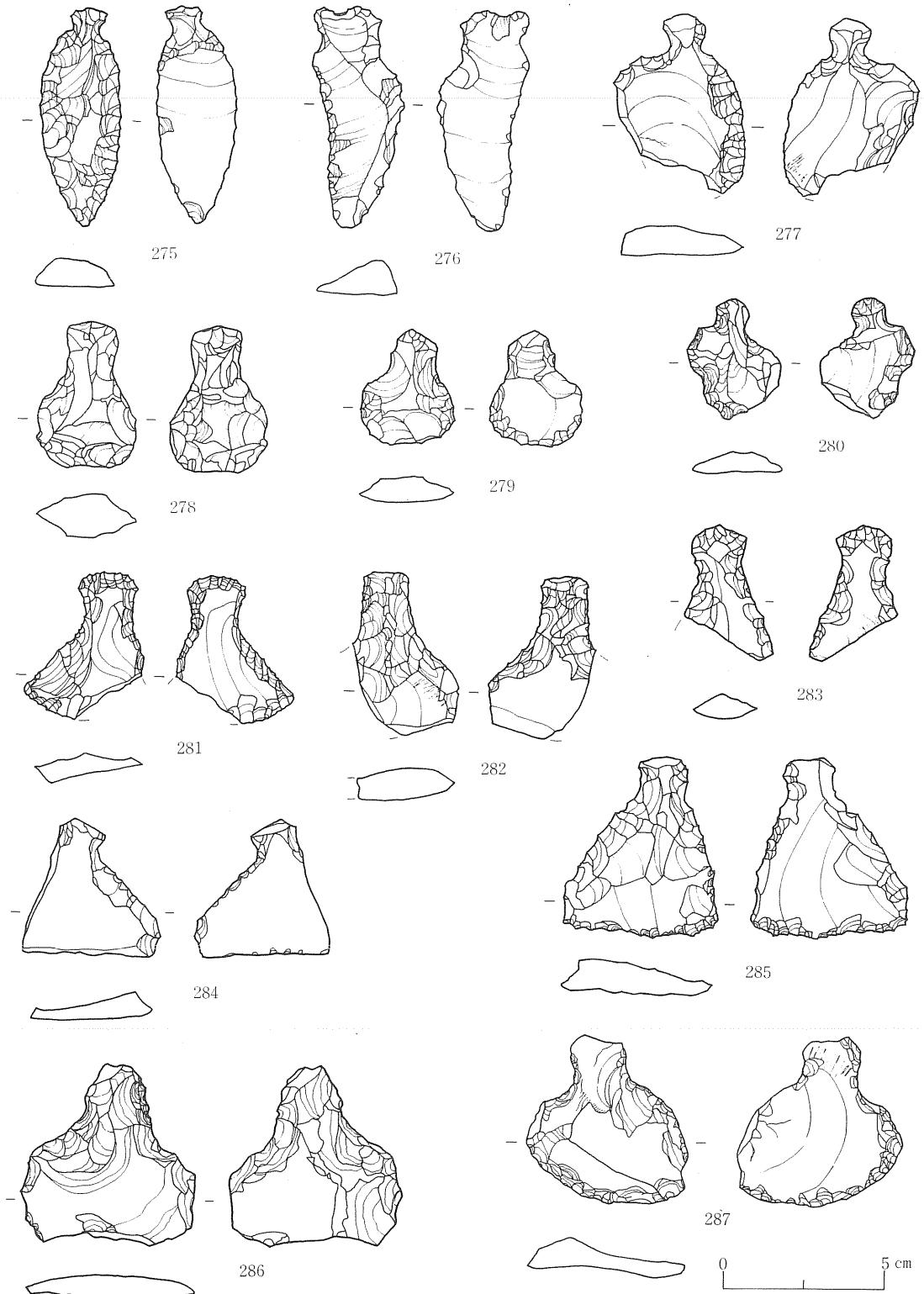
第67図 遺構外出土石器

第68图 遗址出土石器

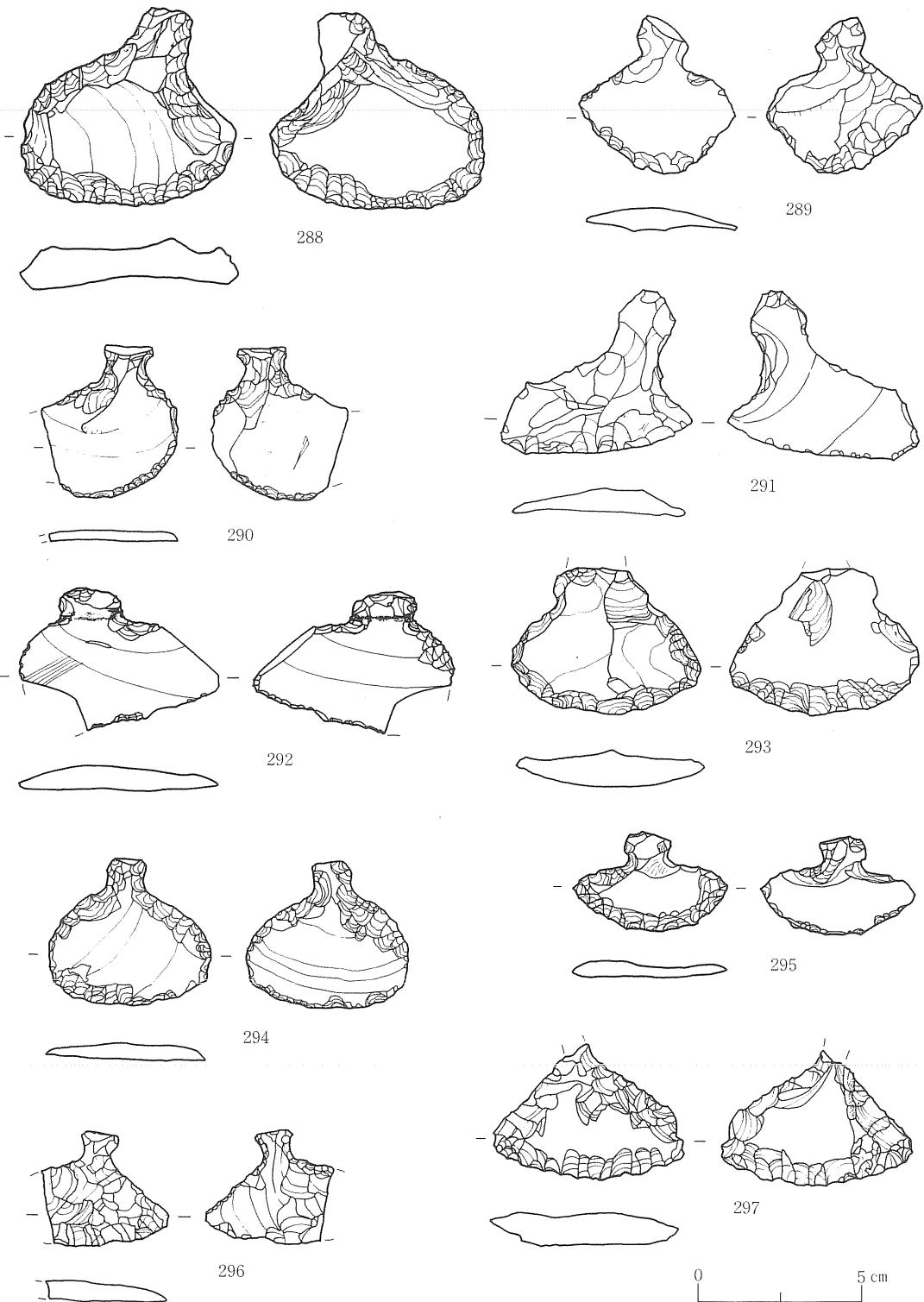




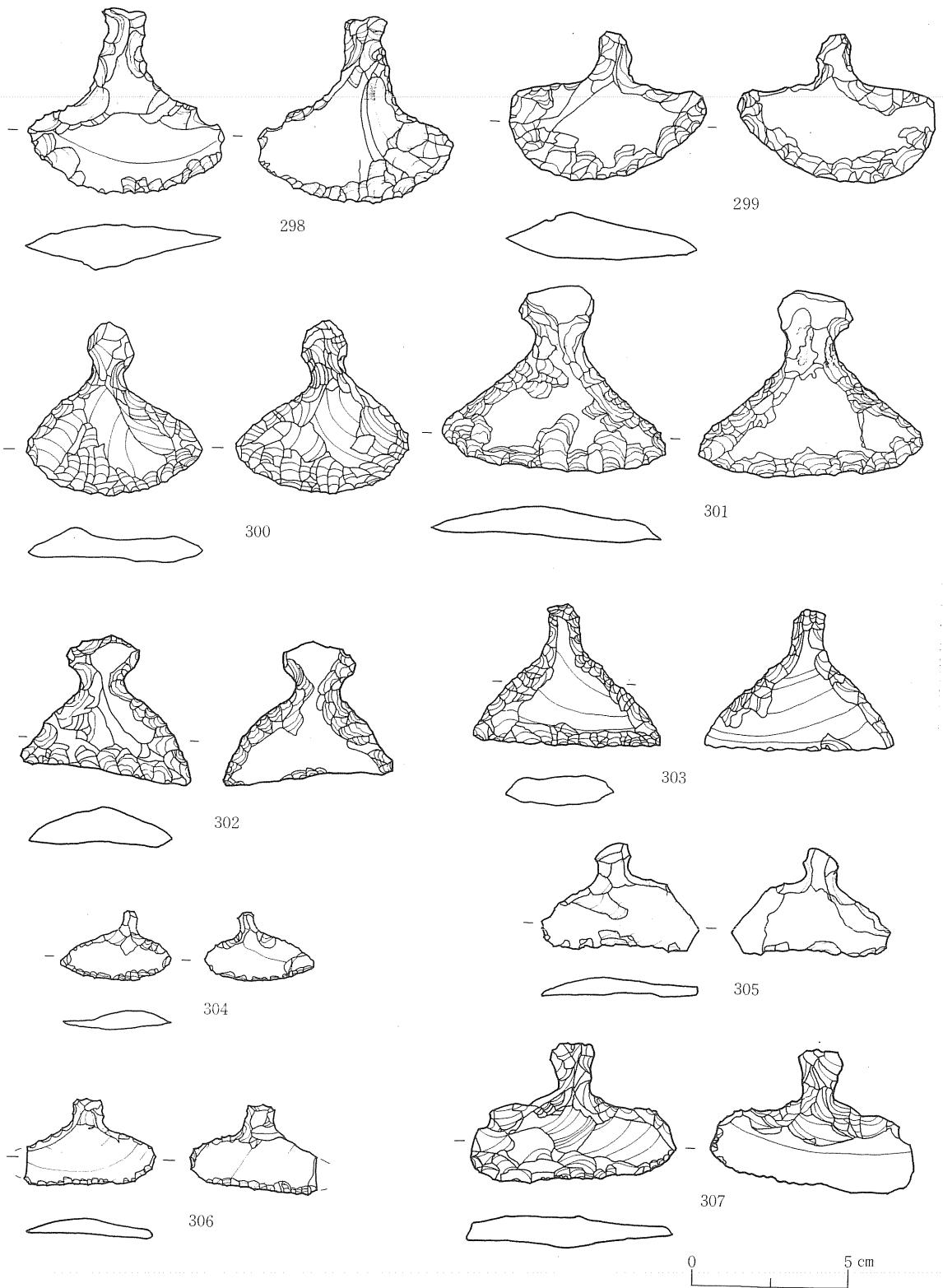
第69図 遺構外出土石器



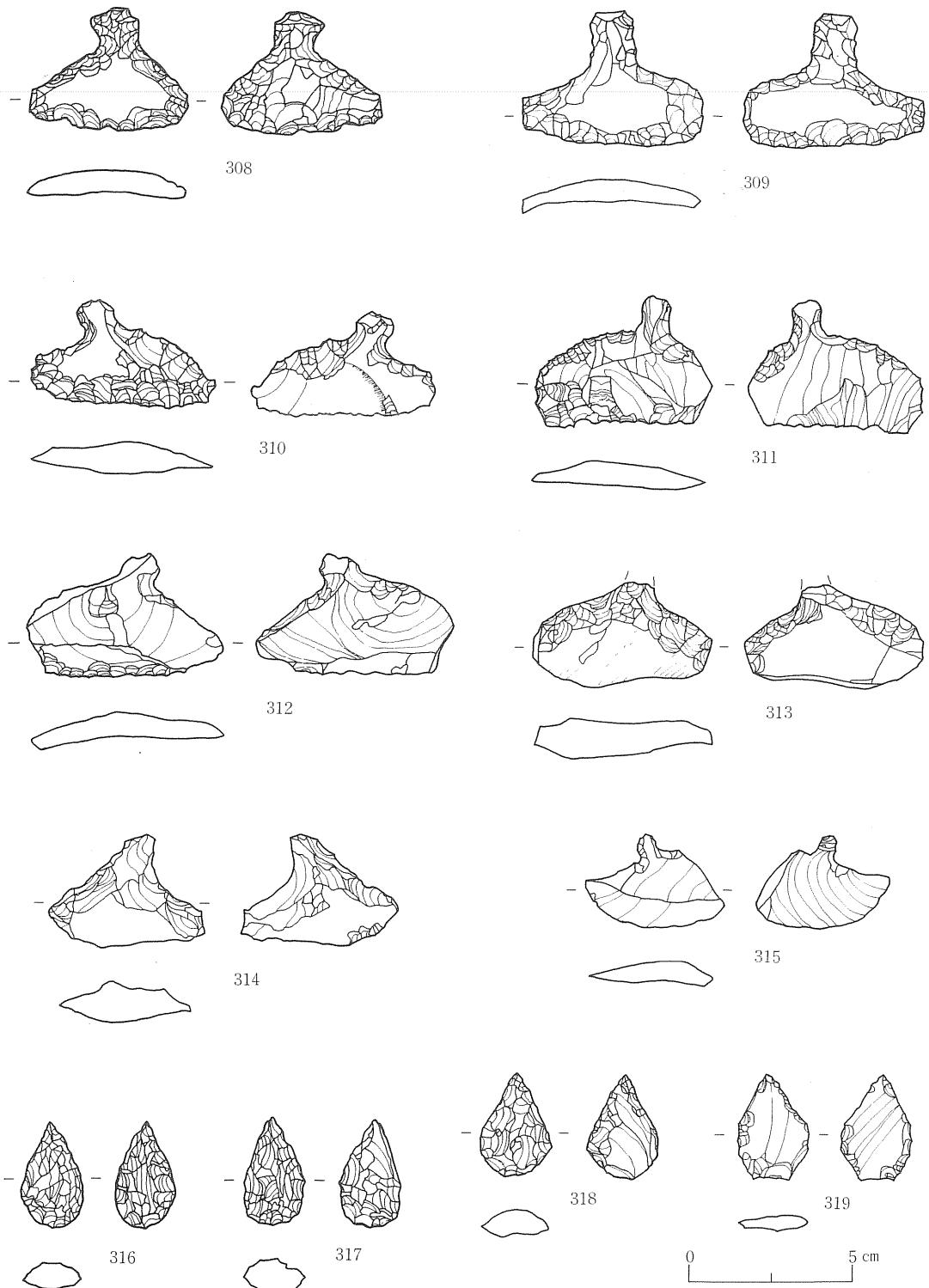
第70図 遺構外出土石器



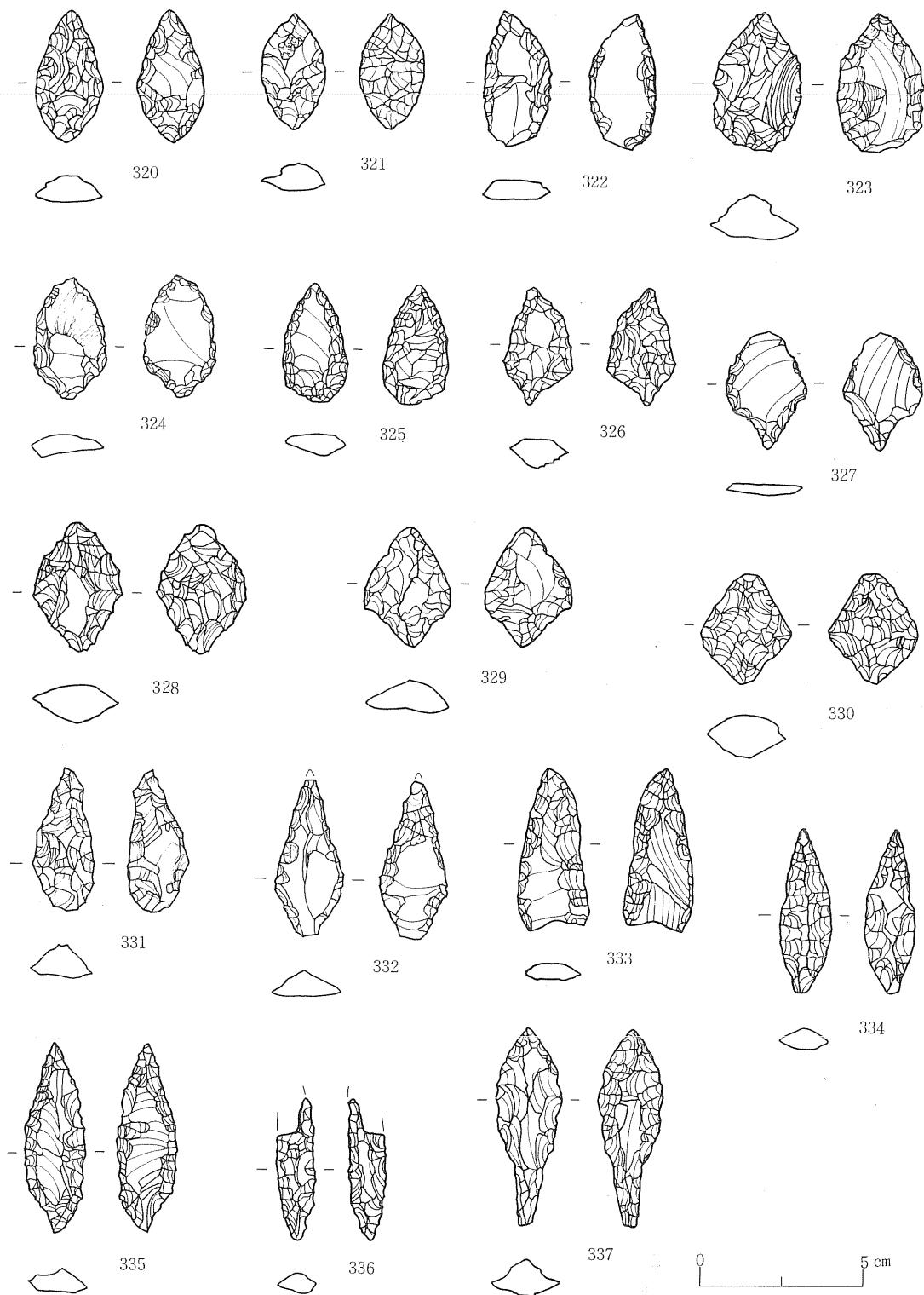
第71図 遺構外出土石器



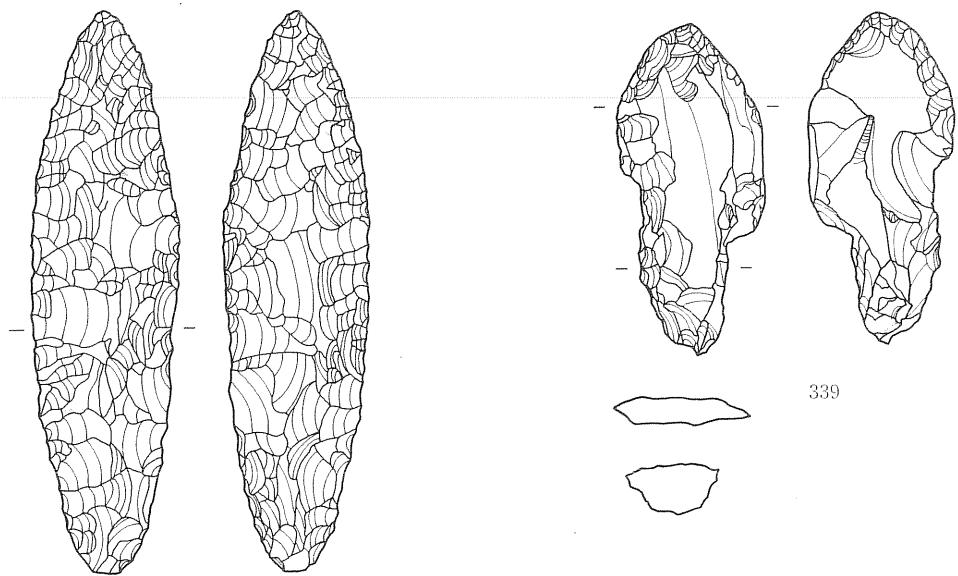
第72図 遺構出土石器



第73図 遺構外出土石器

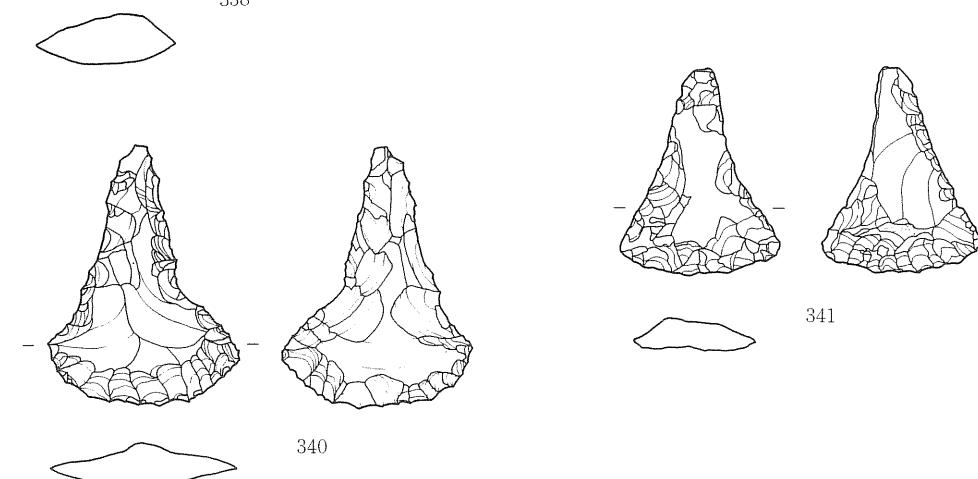


第74図 遺構外出土石器



338

339



340

341

342

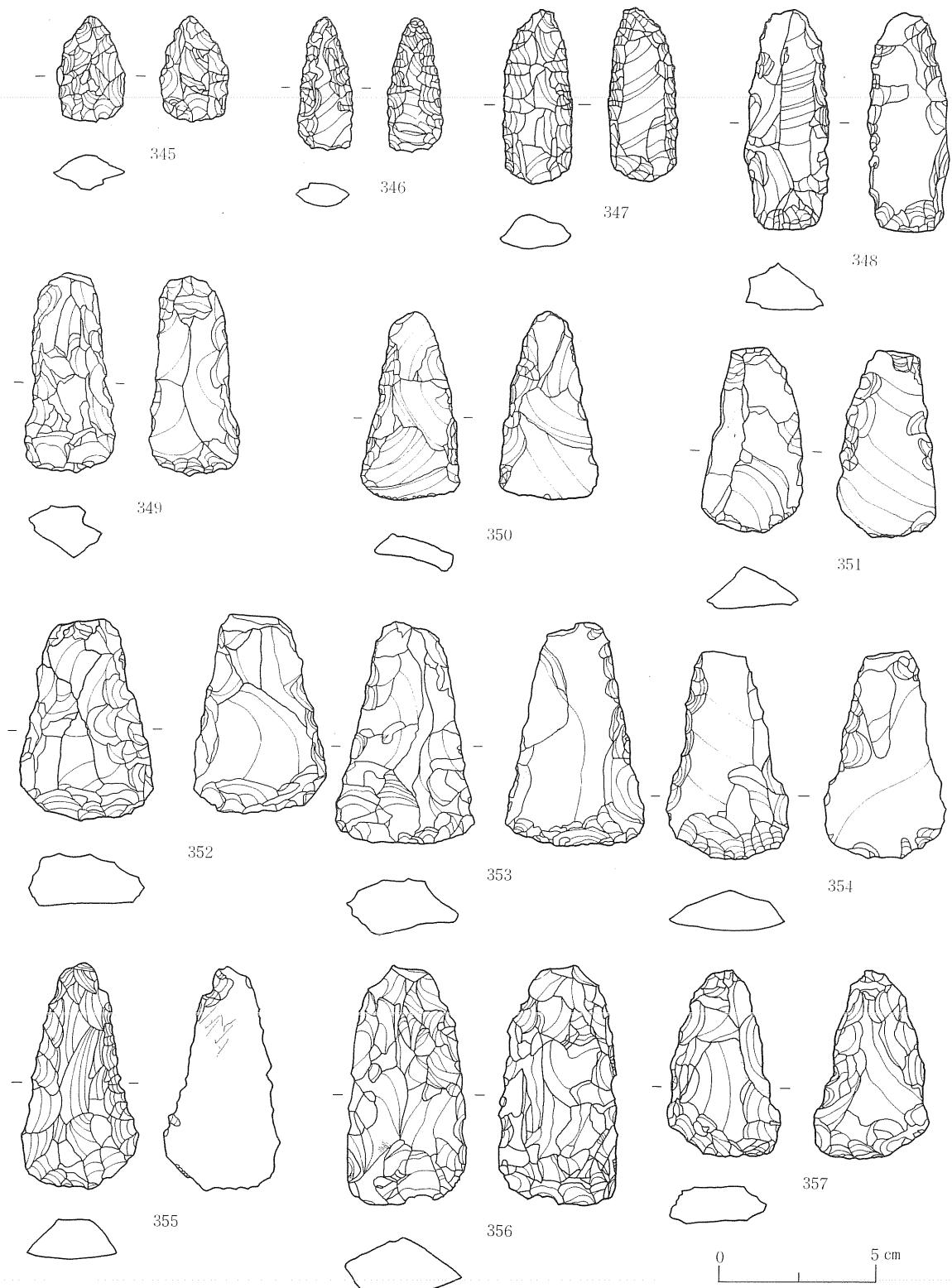


343

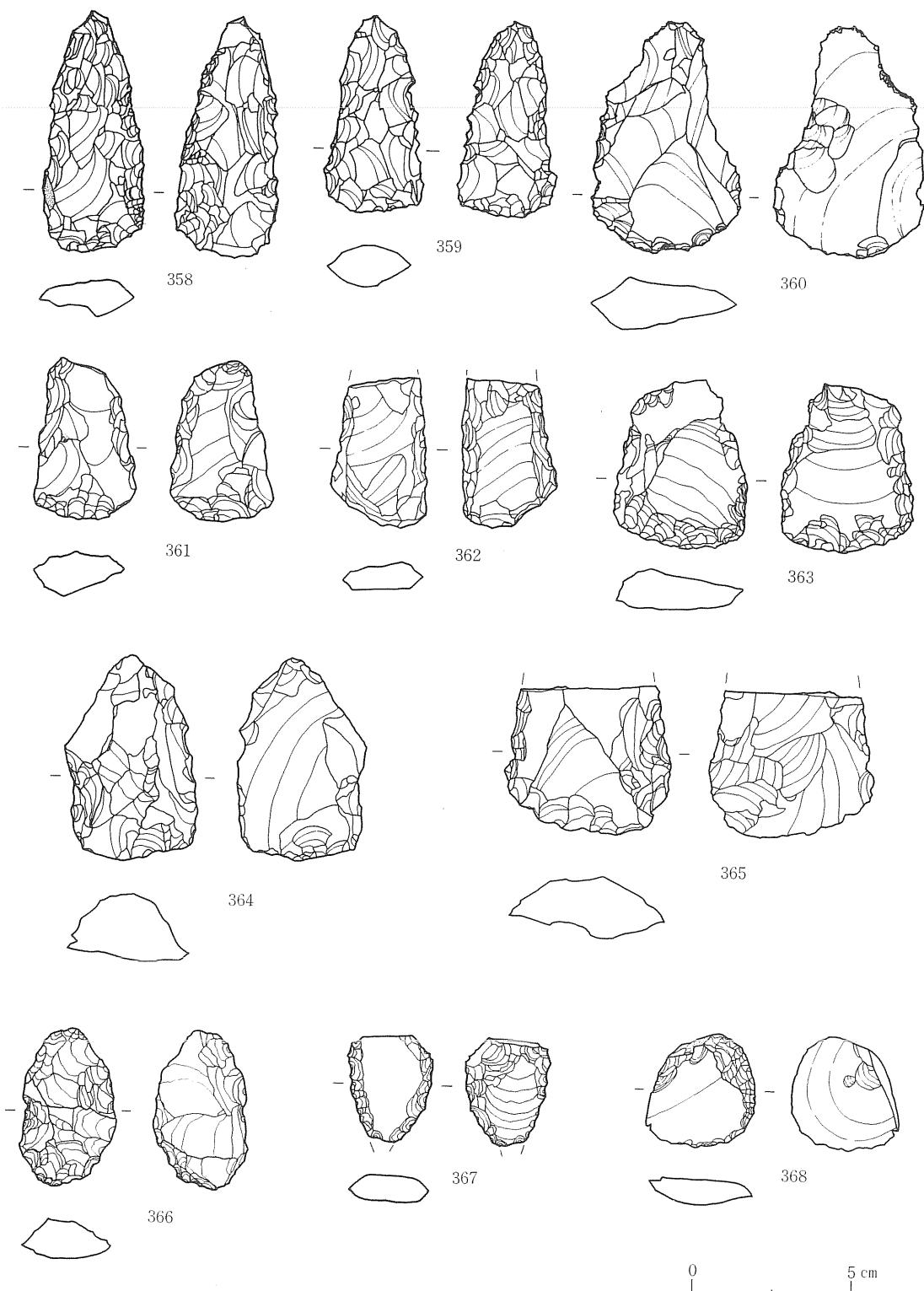
344



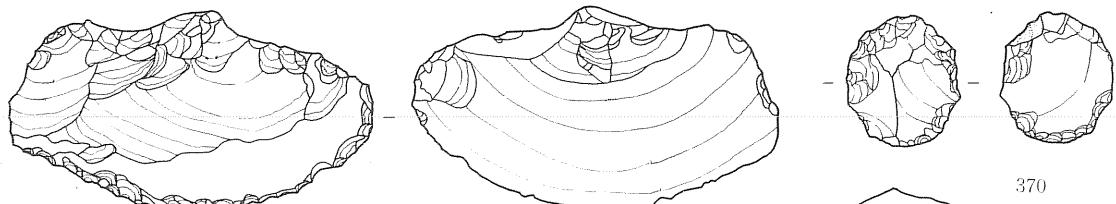
第75図 遺構外出土石器



第76図 遺構外出土石器

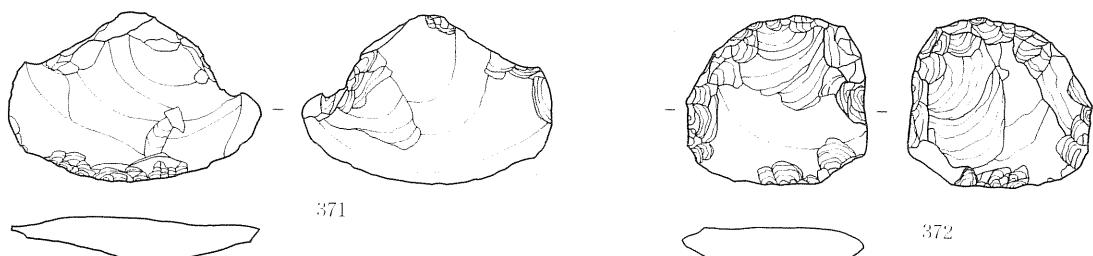


第77図 遺構外出土石器



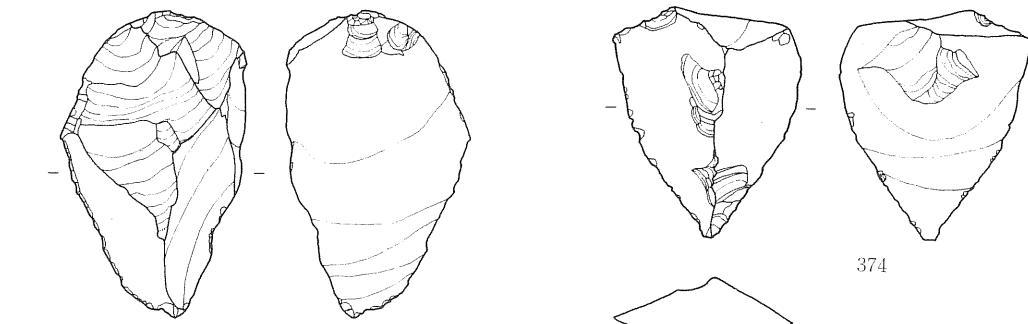
369

370



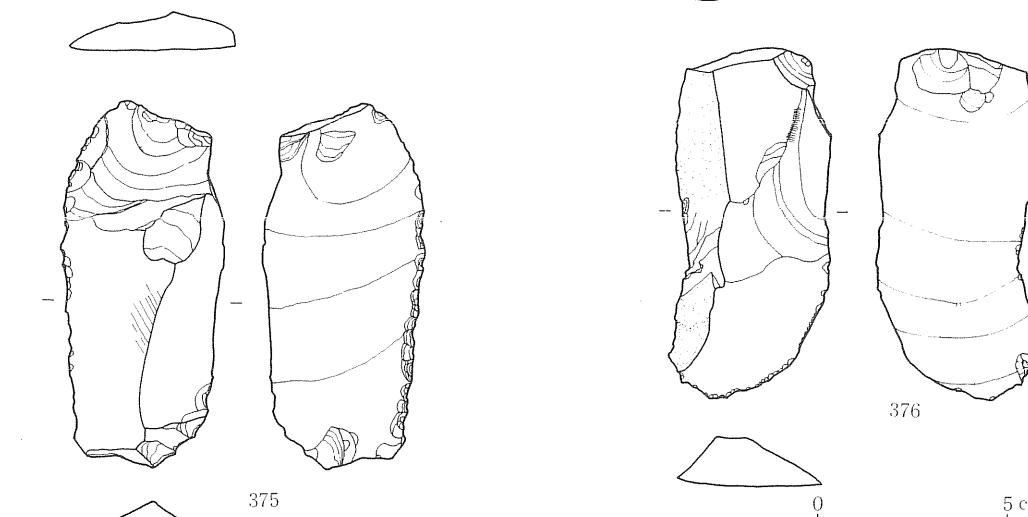
371

372



373

374



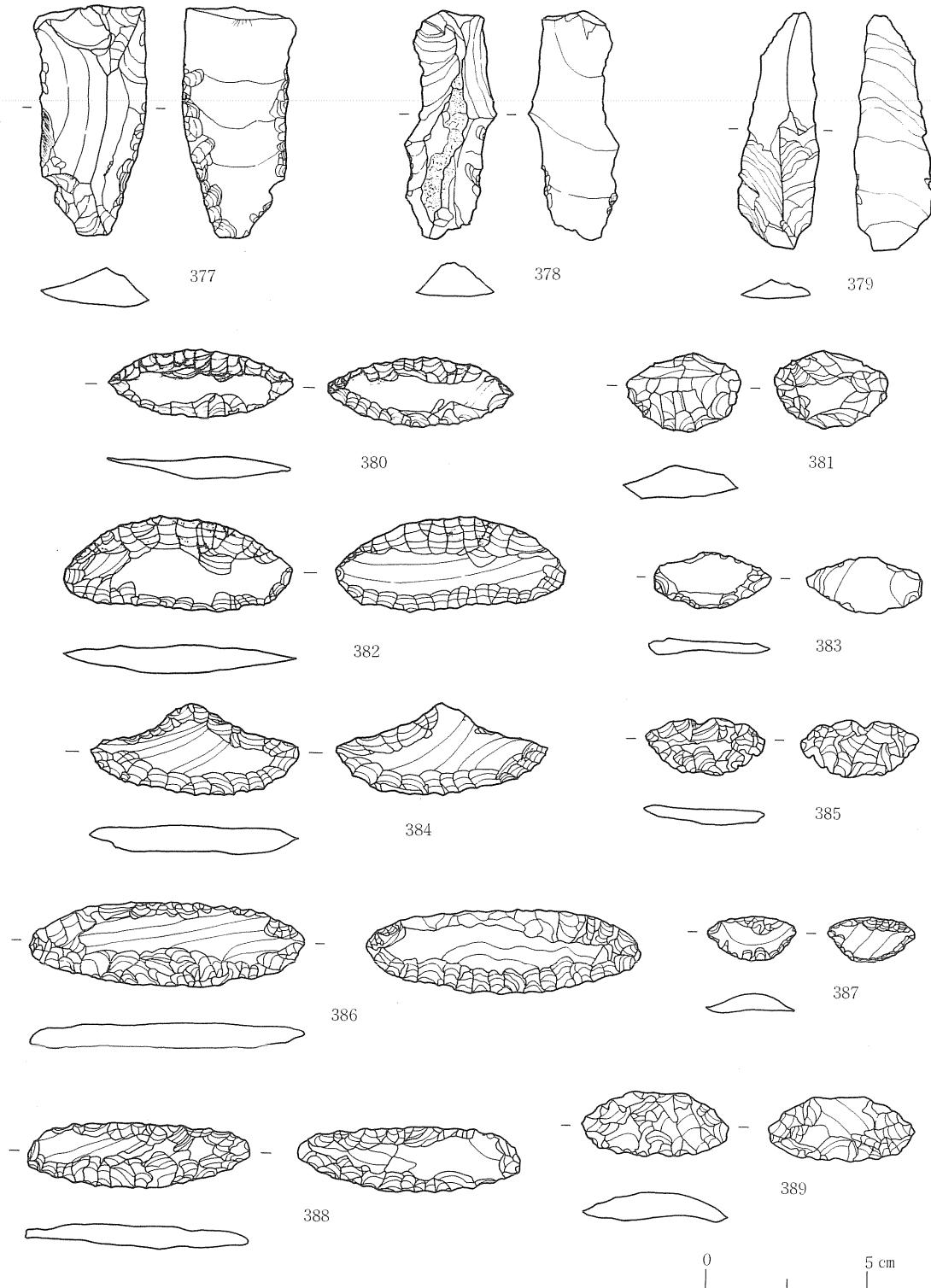
375

376

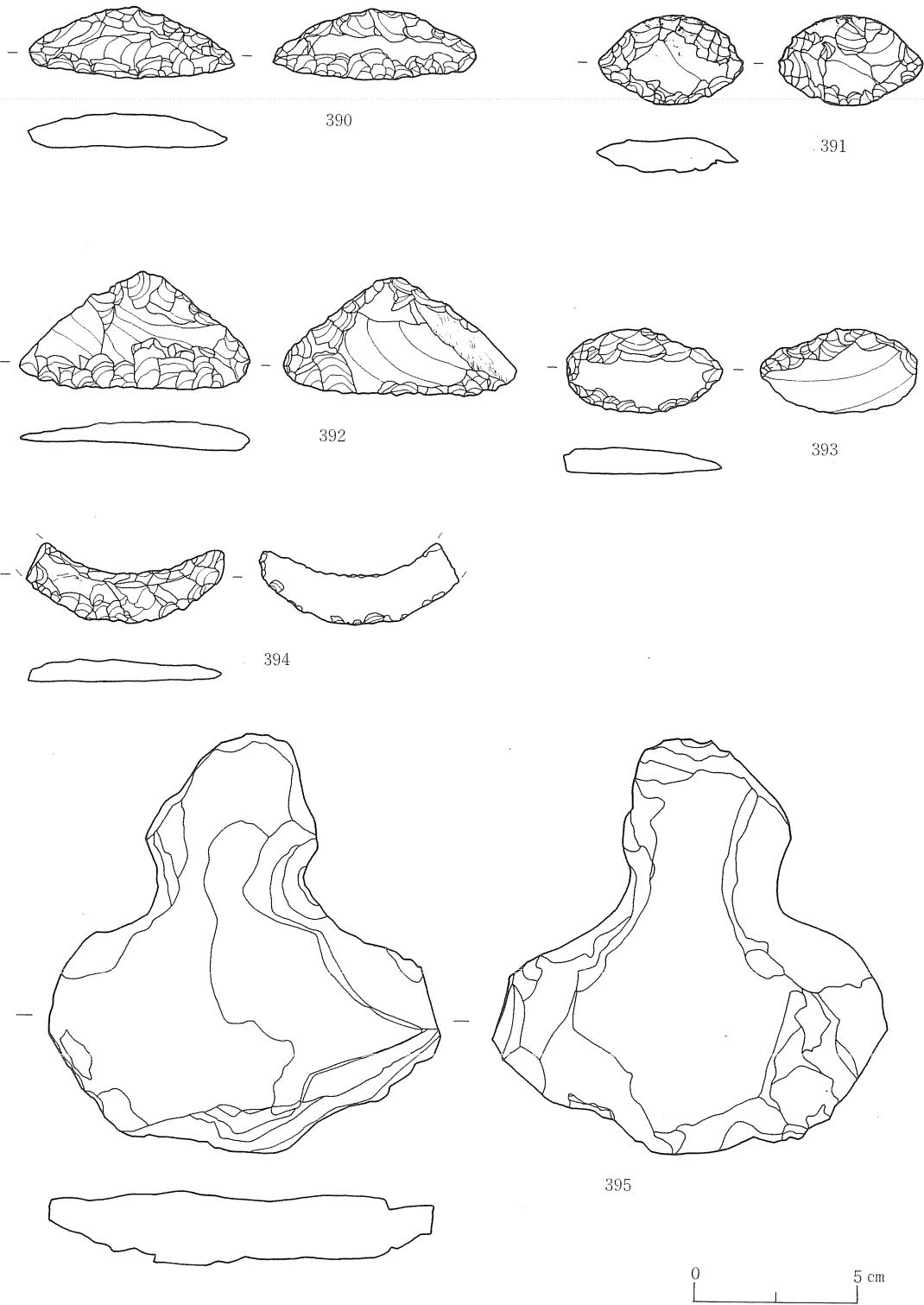
5 cm

0

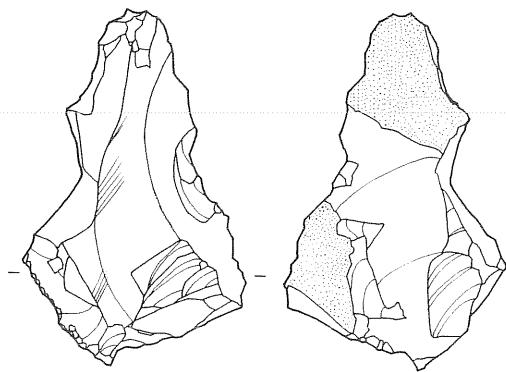
第78図 遺構外出土石器



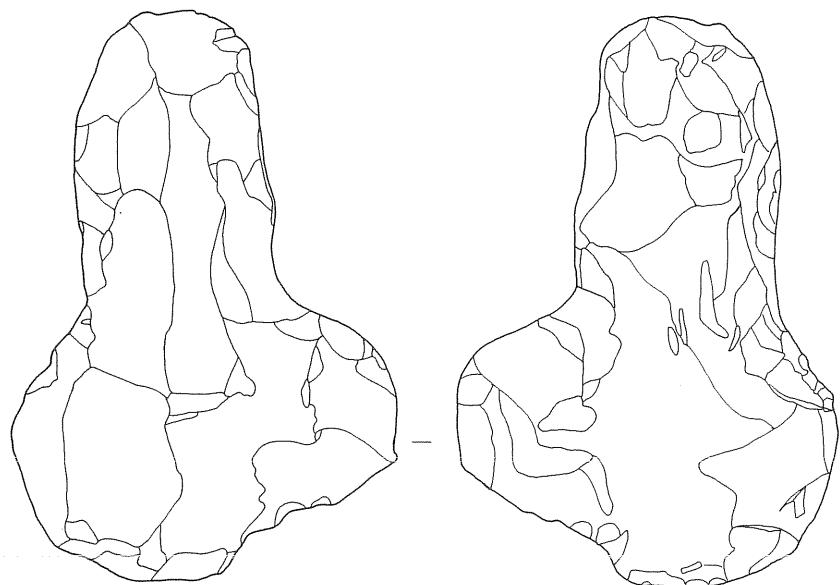
第79図 遺構外出土石器



第80図 遺構外出土石器



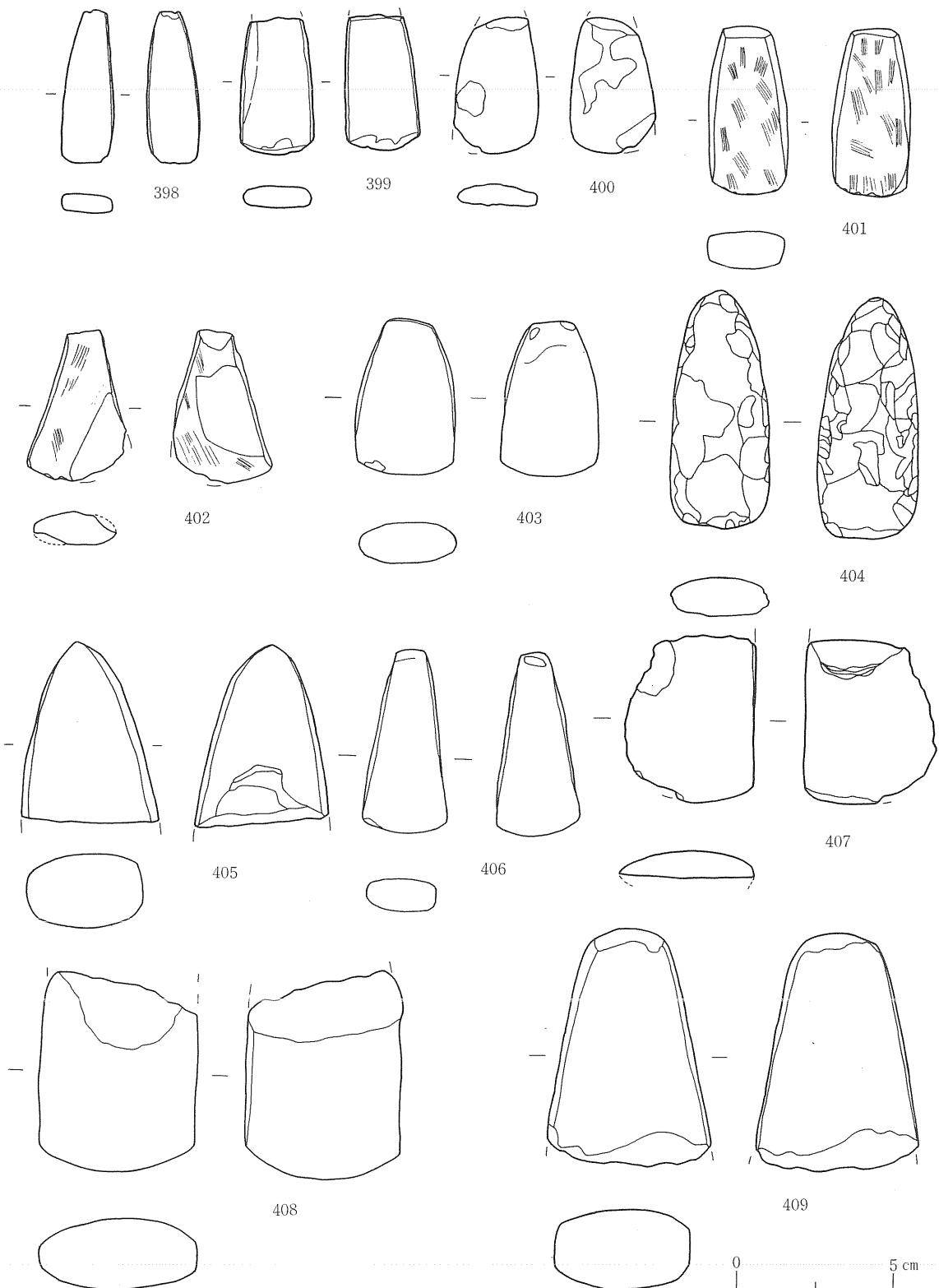
396



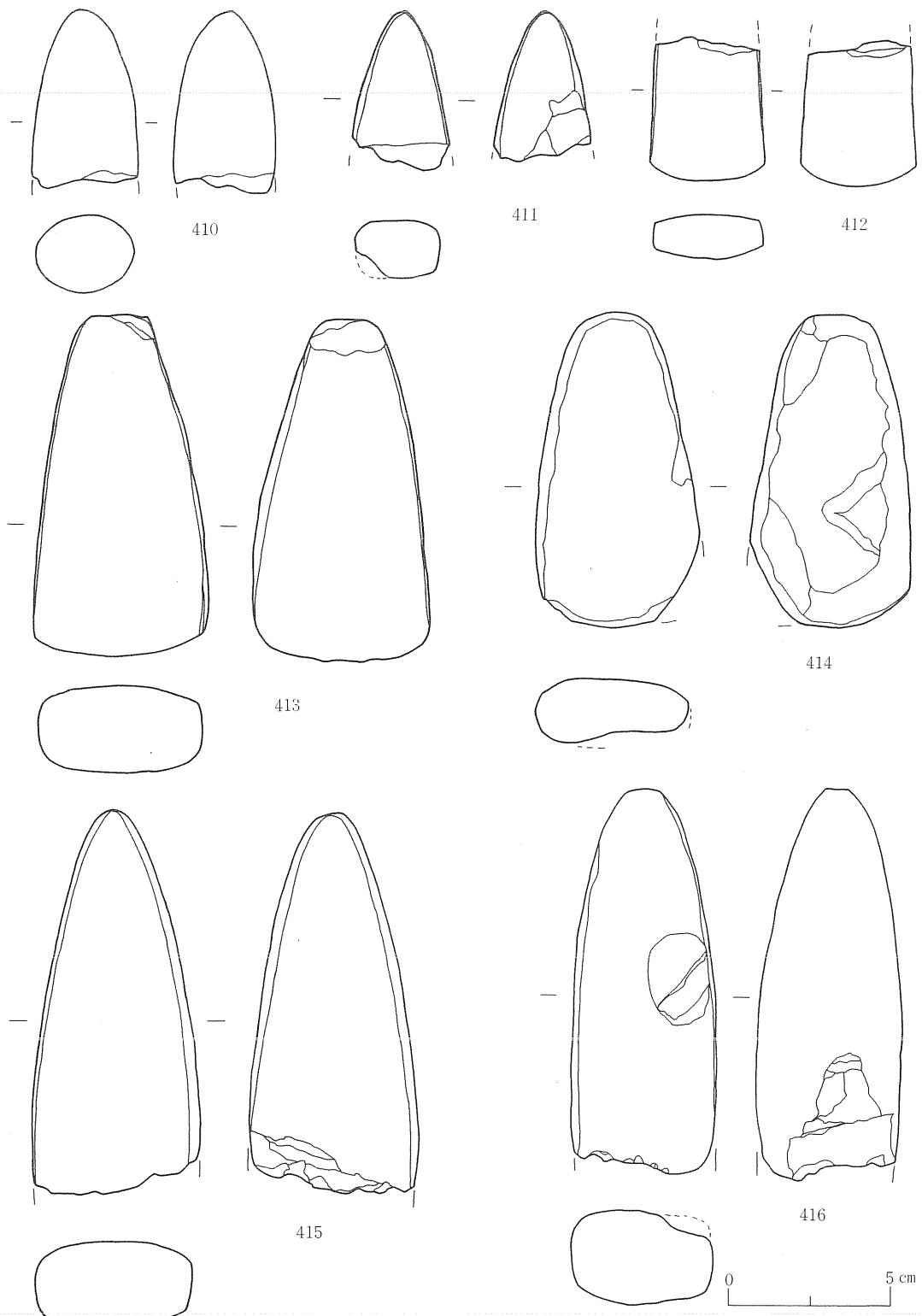
397



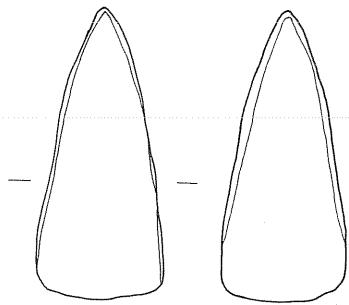
第81図 遺構外出土石器



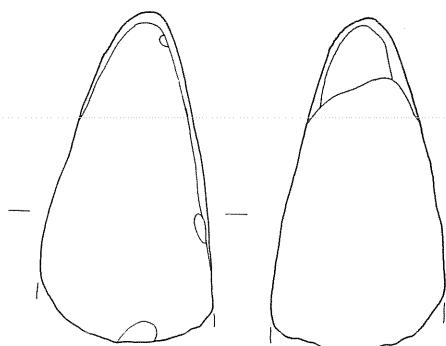
第82図 遺構外出土石器



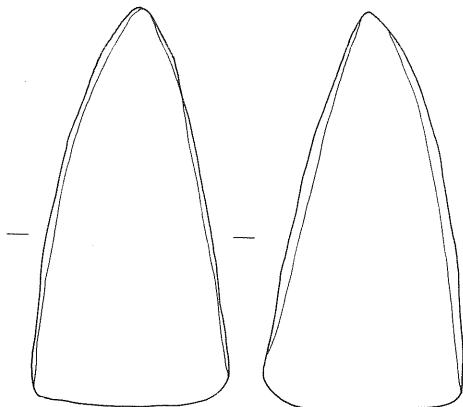
第83図 遺構外出土石器



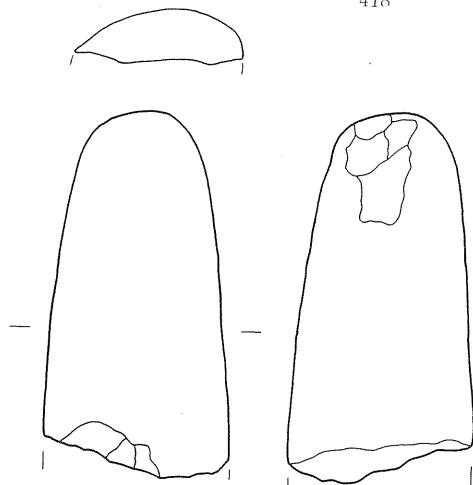
417



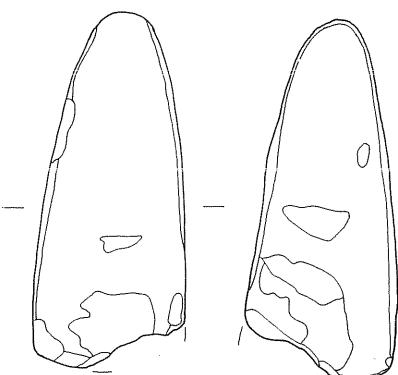
418



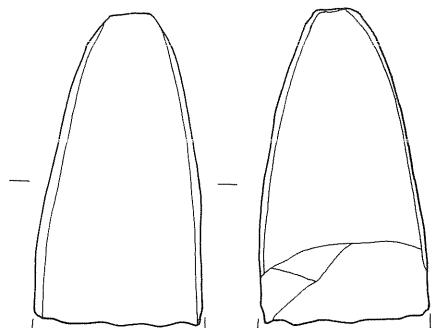
419



420



421



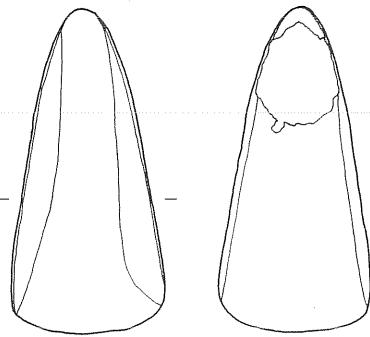
422



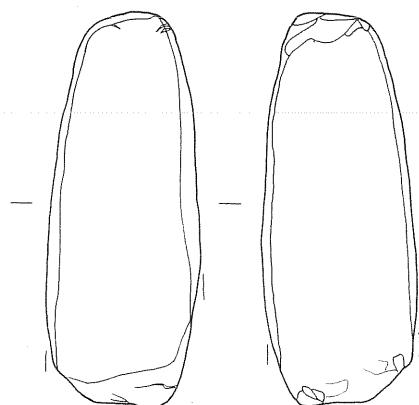
第84図 遺構外出土石器



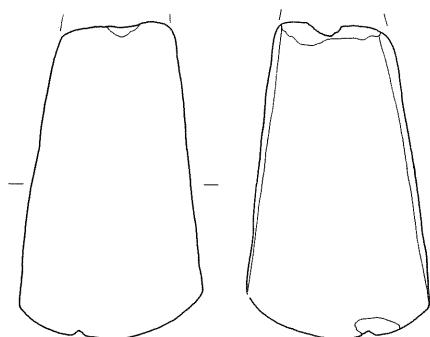
第85図 遺構外出土石器



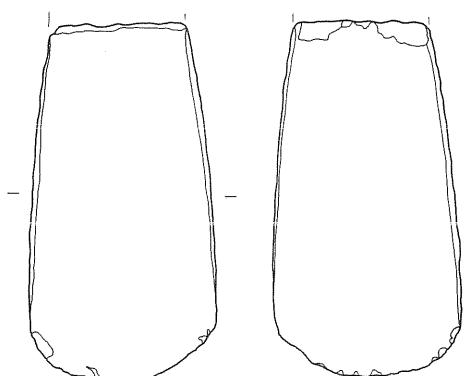
429



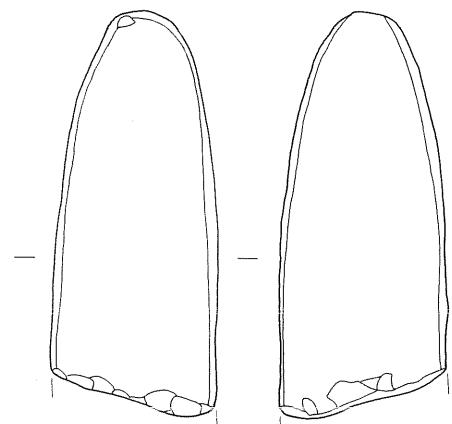
430



431



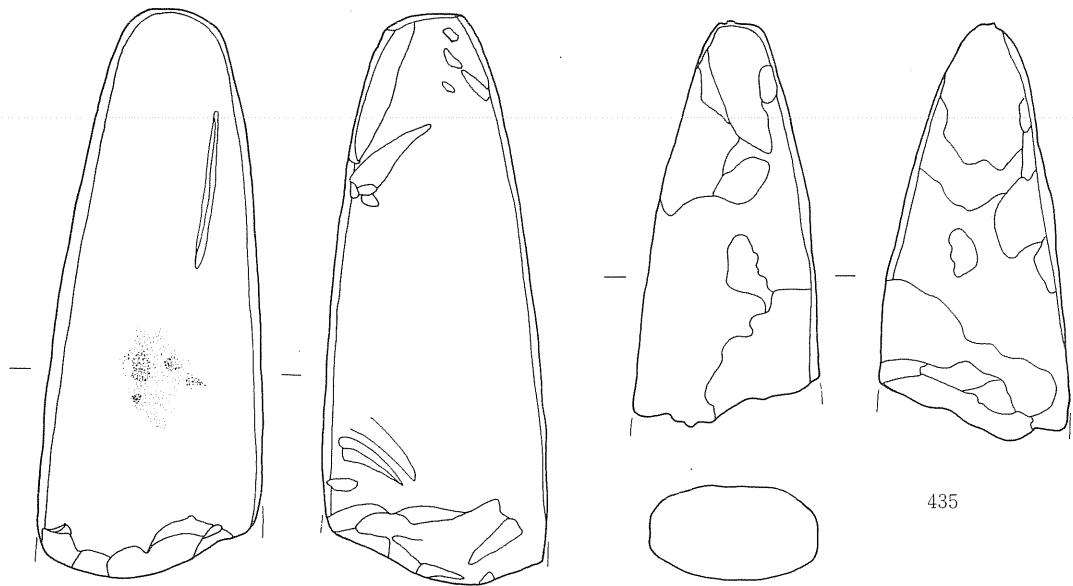
432



433

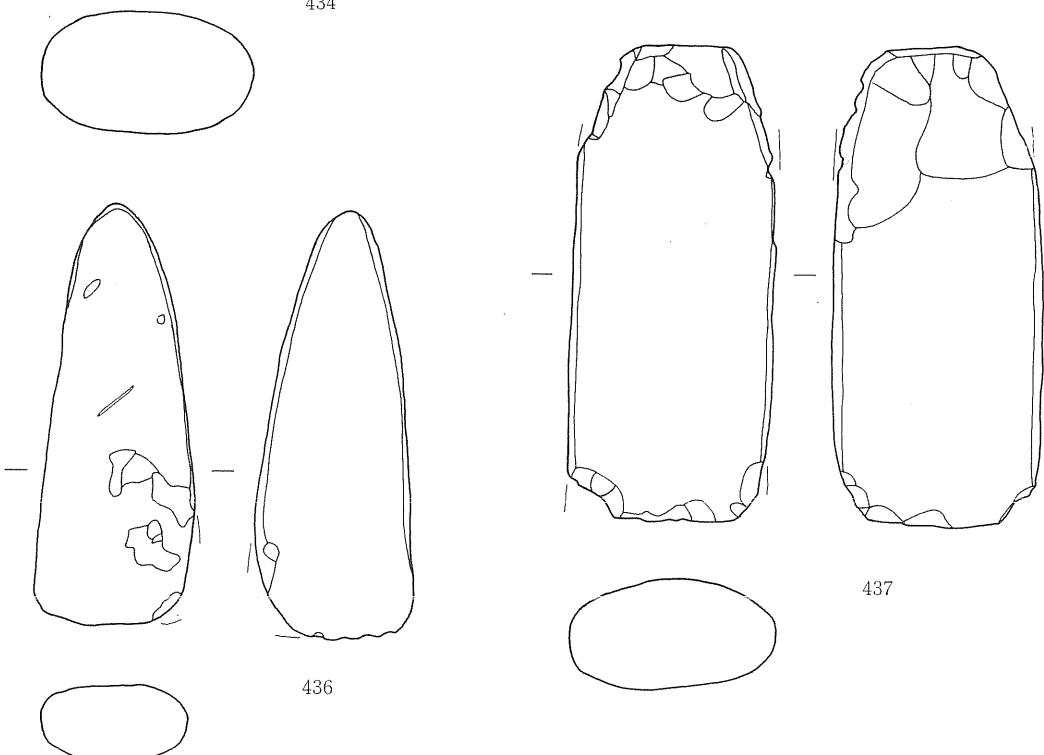


第86図 遺構外出土石器



434

435

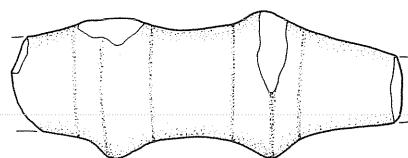


436

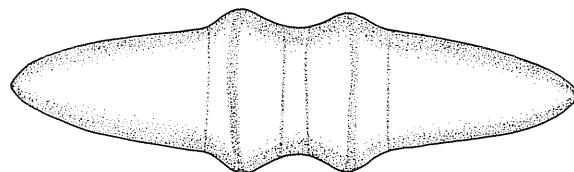
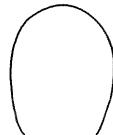
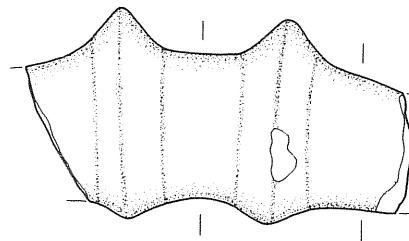
437



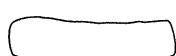
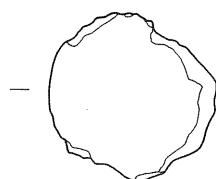
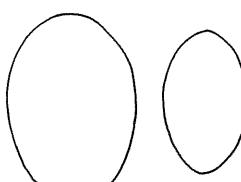
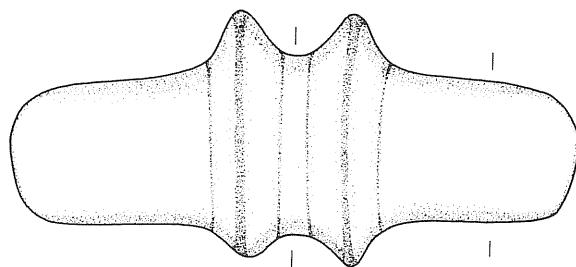
第87図 遺構外出土石器



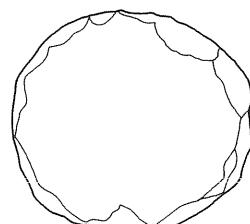
438



439

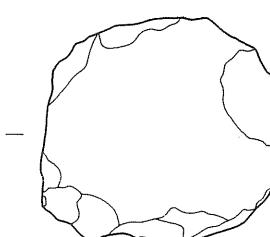


440



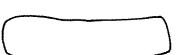
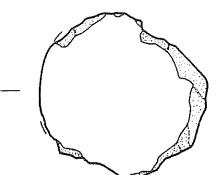
—

—



—

—

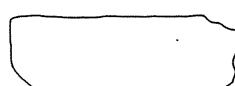


443



444

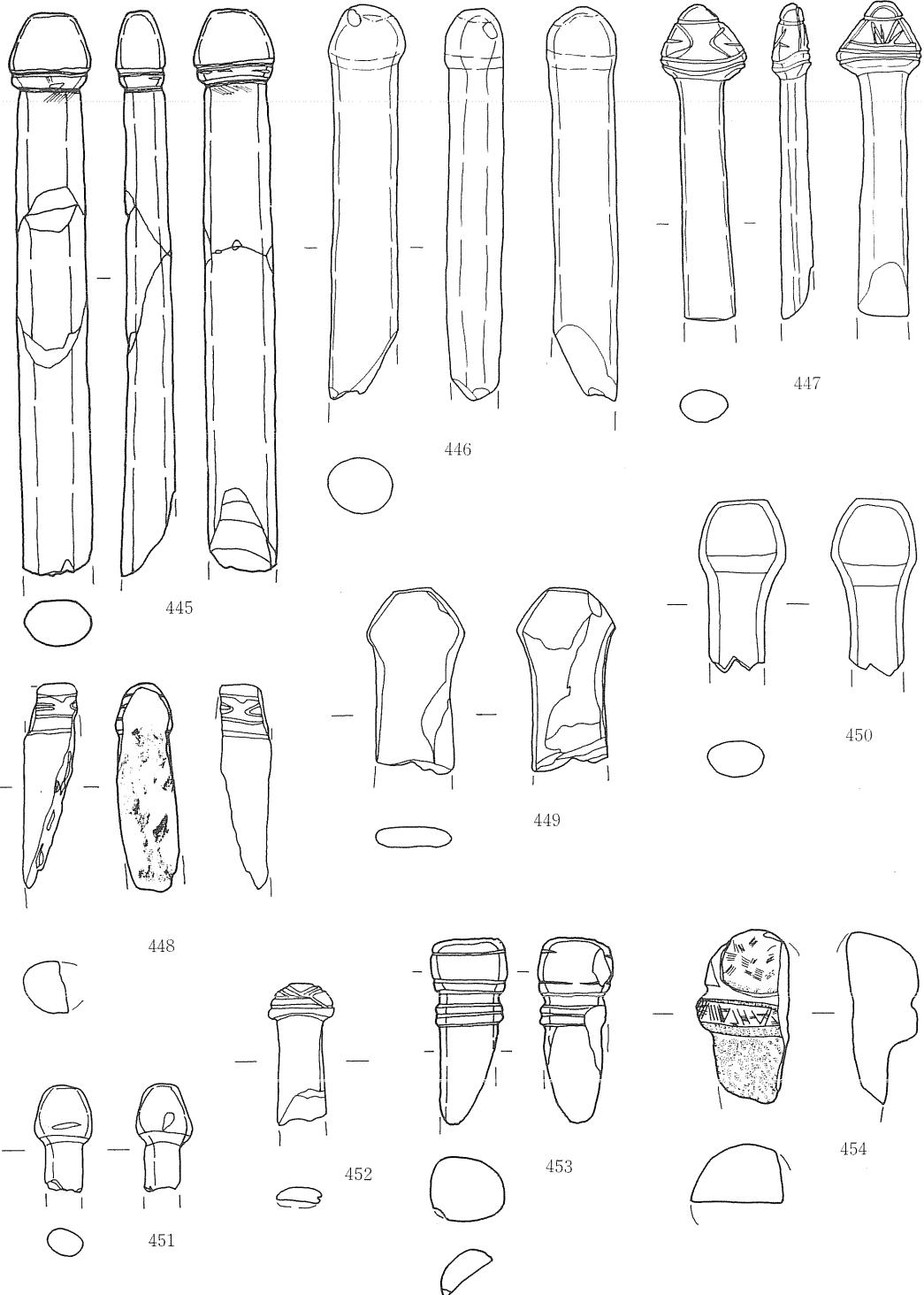
441



442

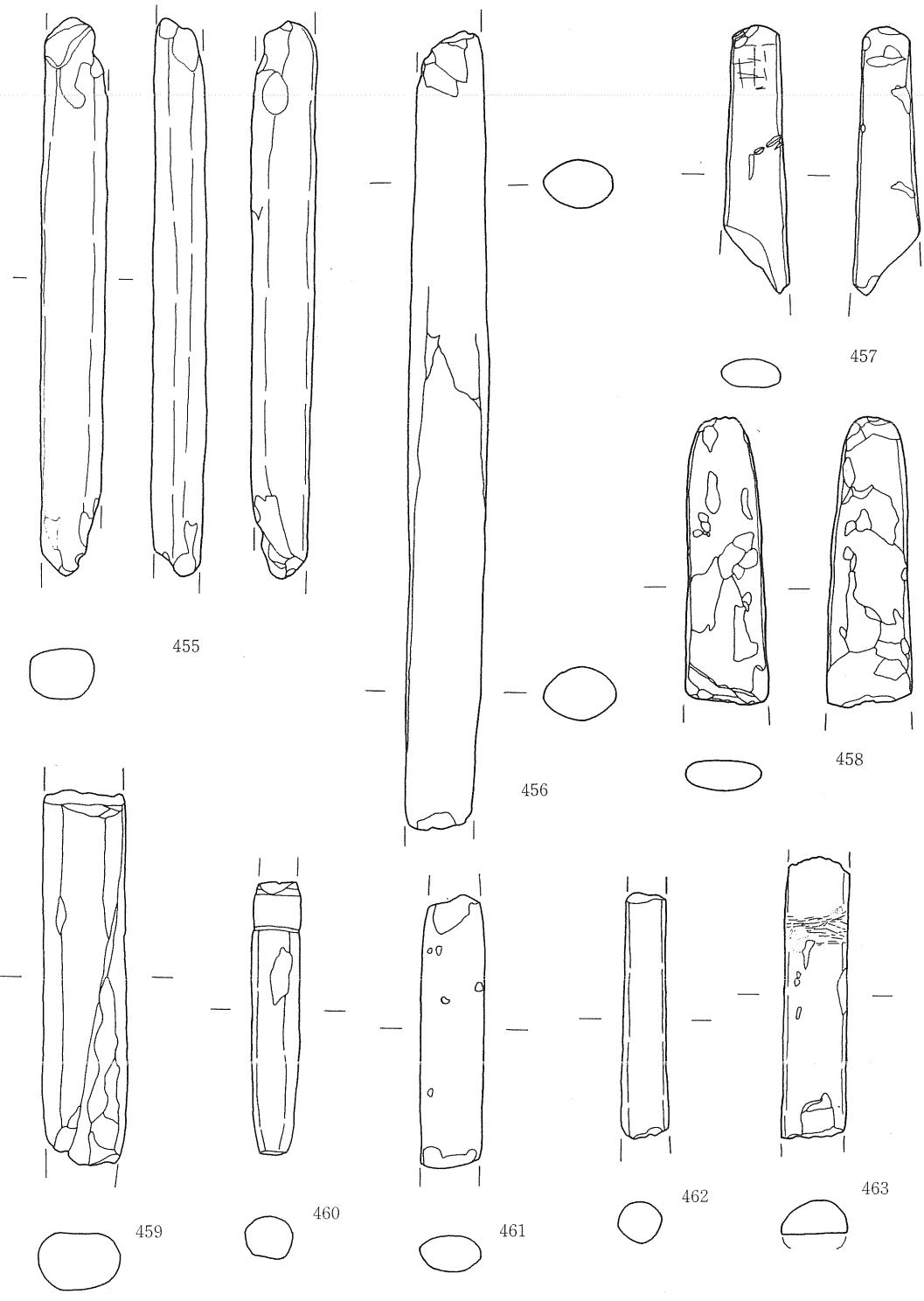


第88図 遺構外出土石器

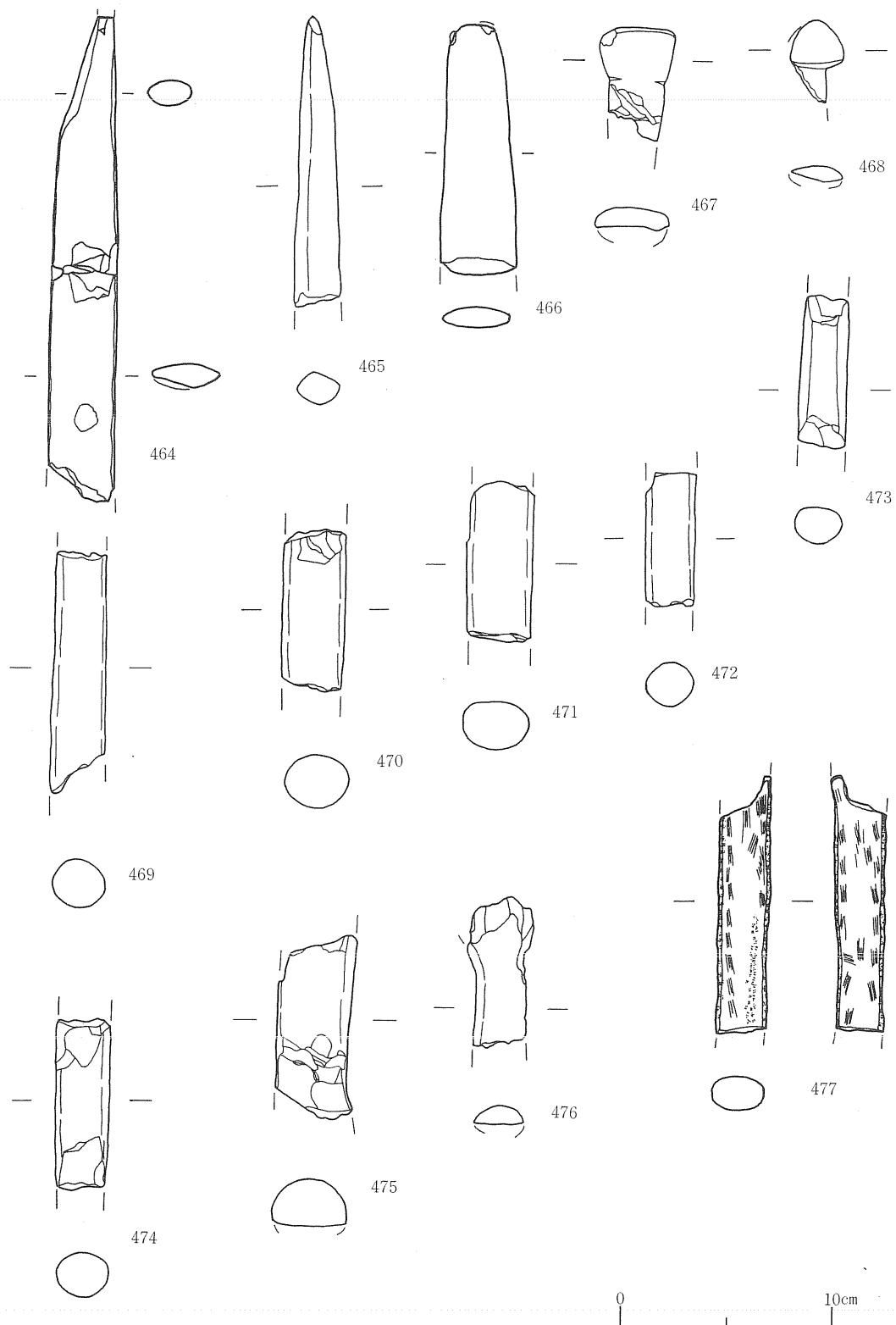


第89図 遺構外出土石器

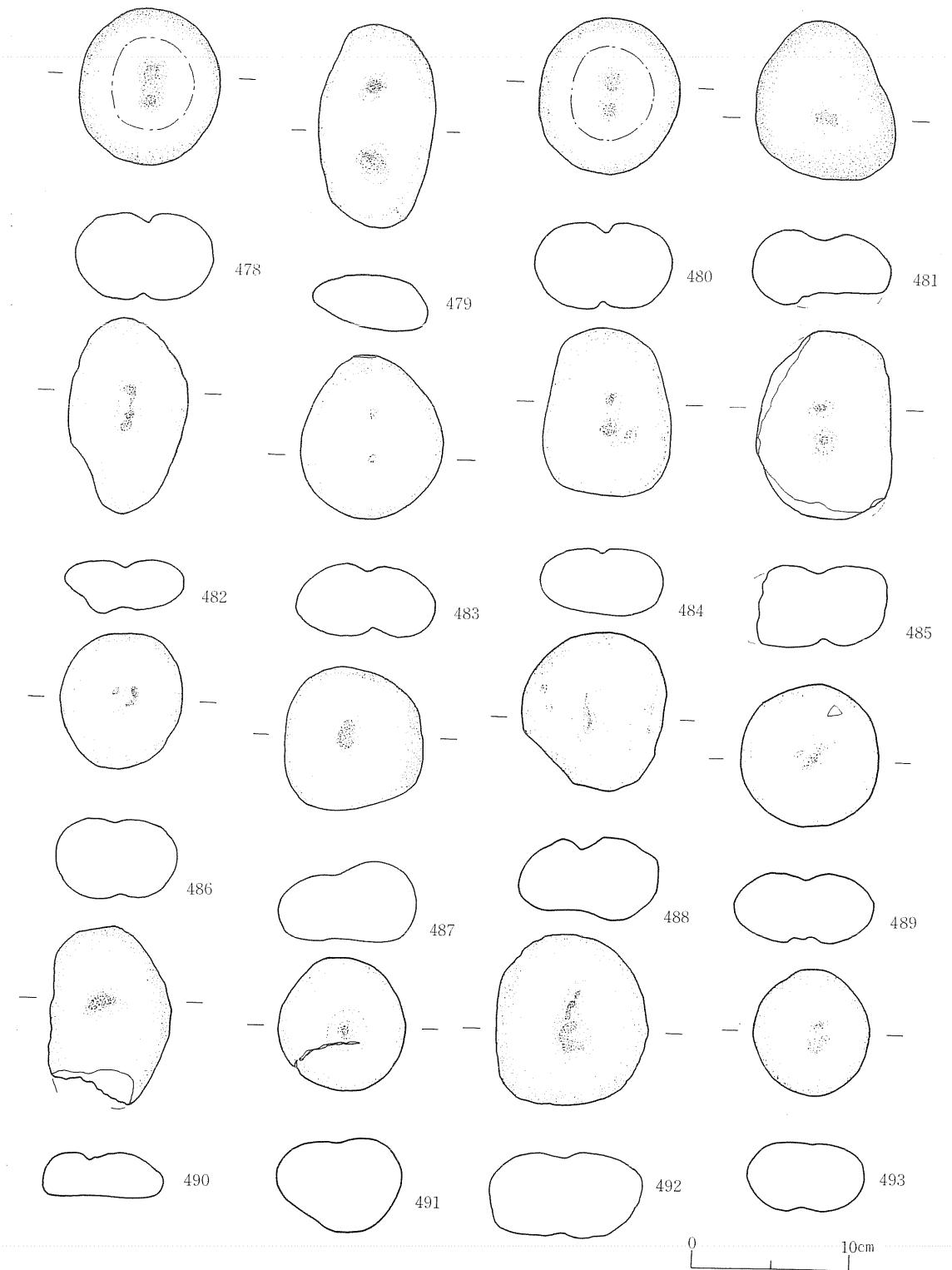
0 10cm



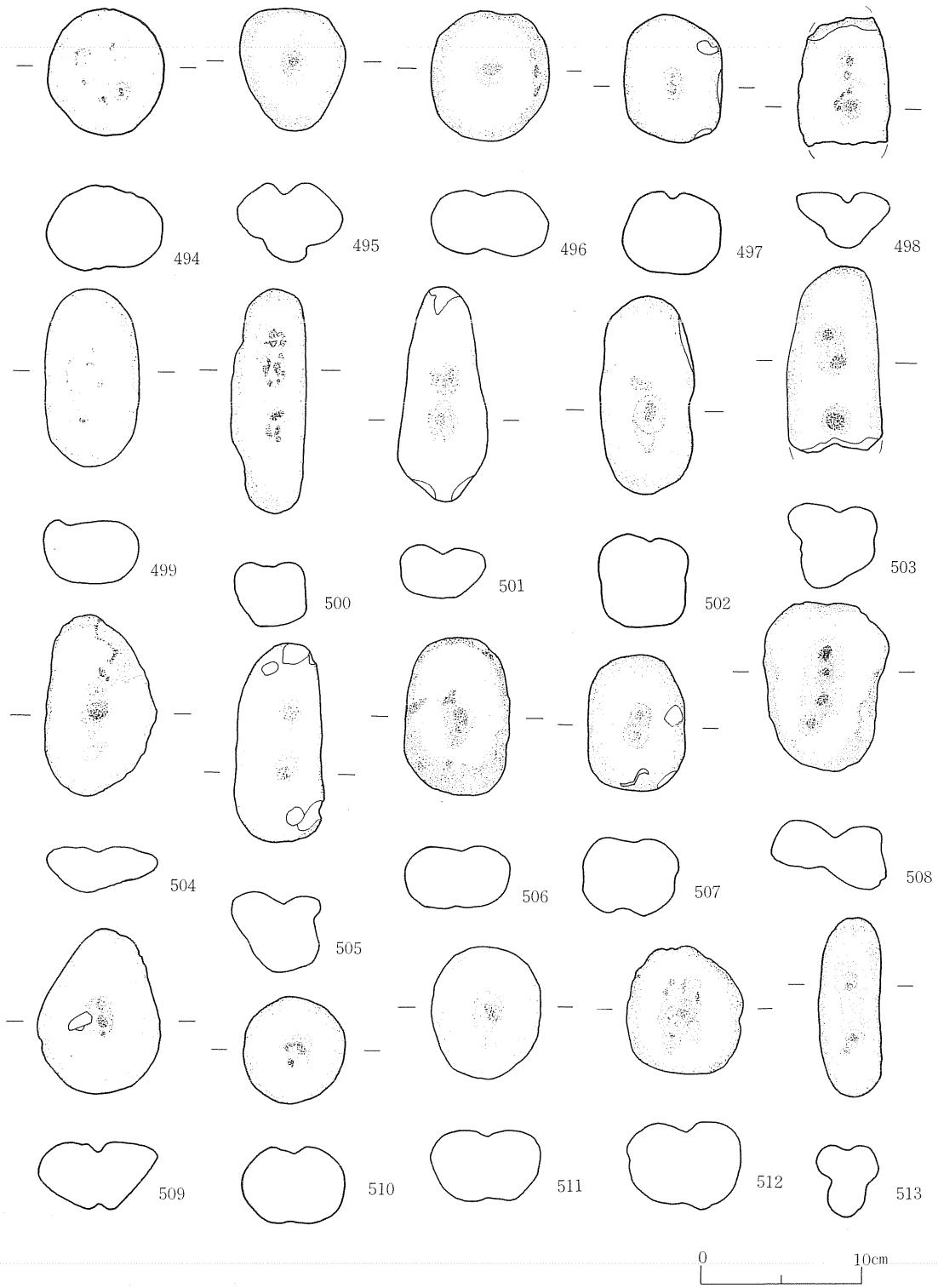
第90図 遺構外出土石器



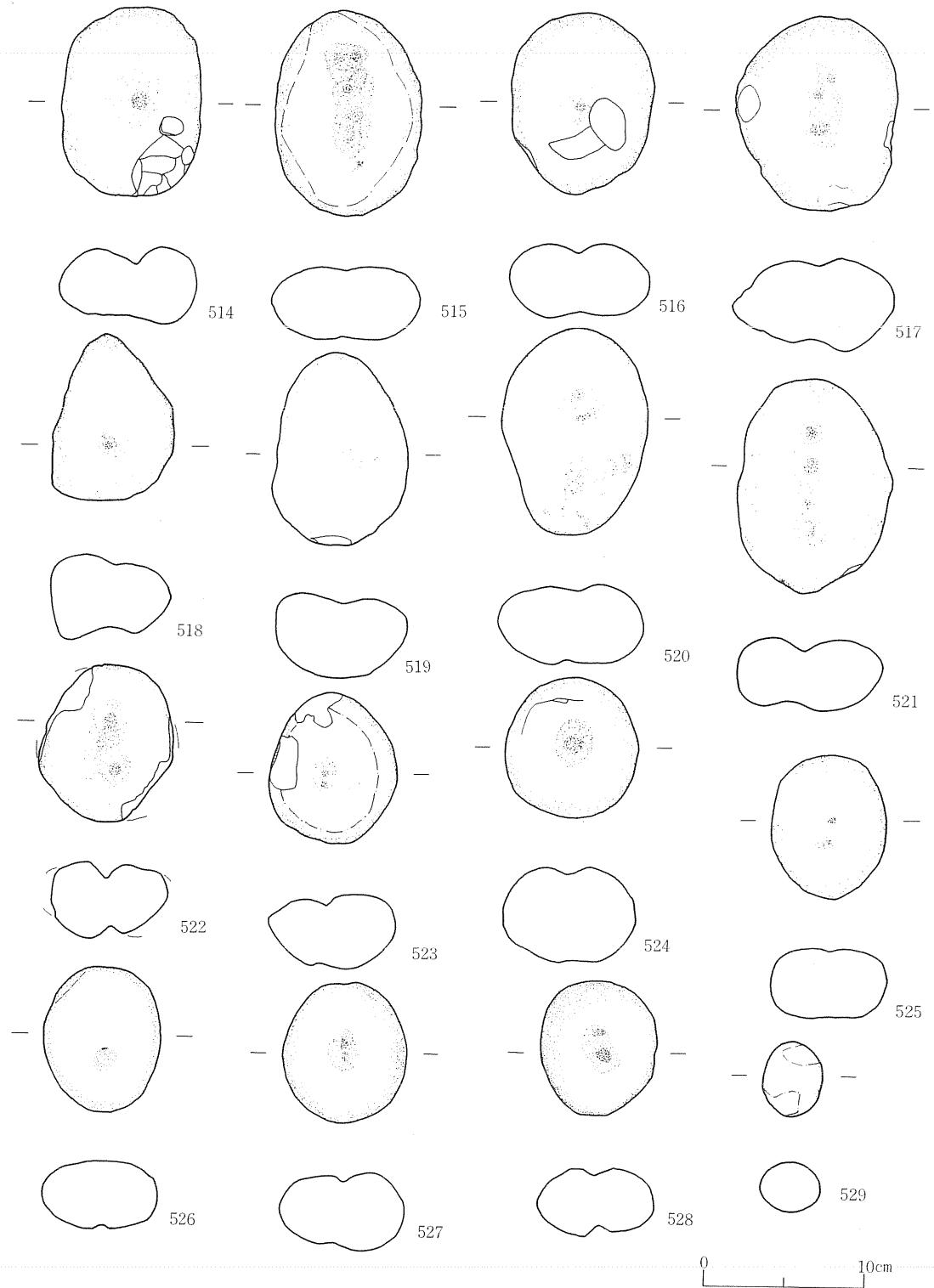
第91図 遺構外出土石器



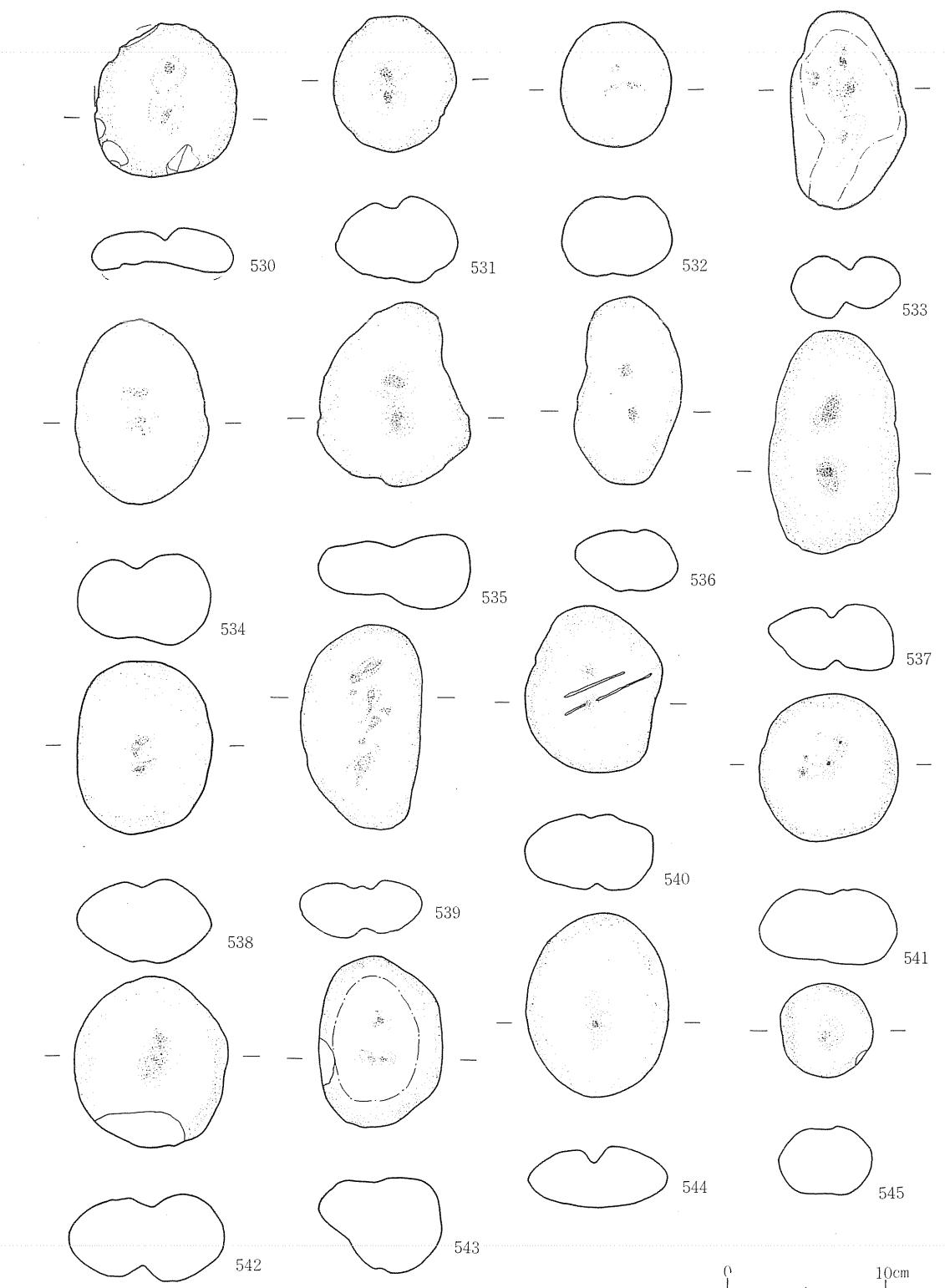
第92図 遺構外出土石器



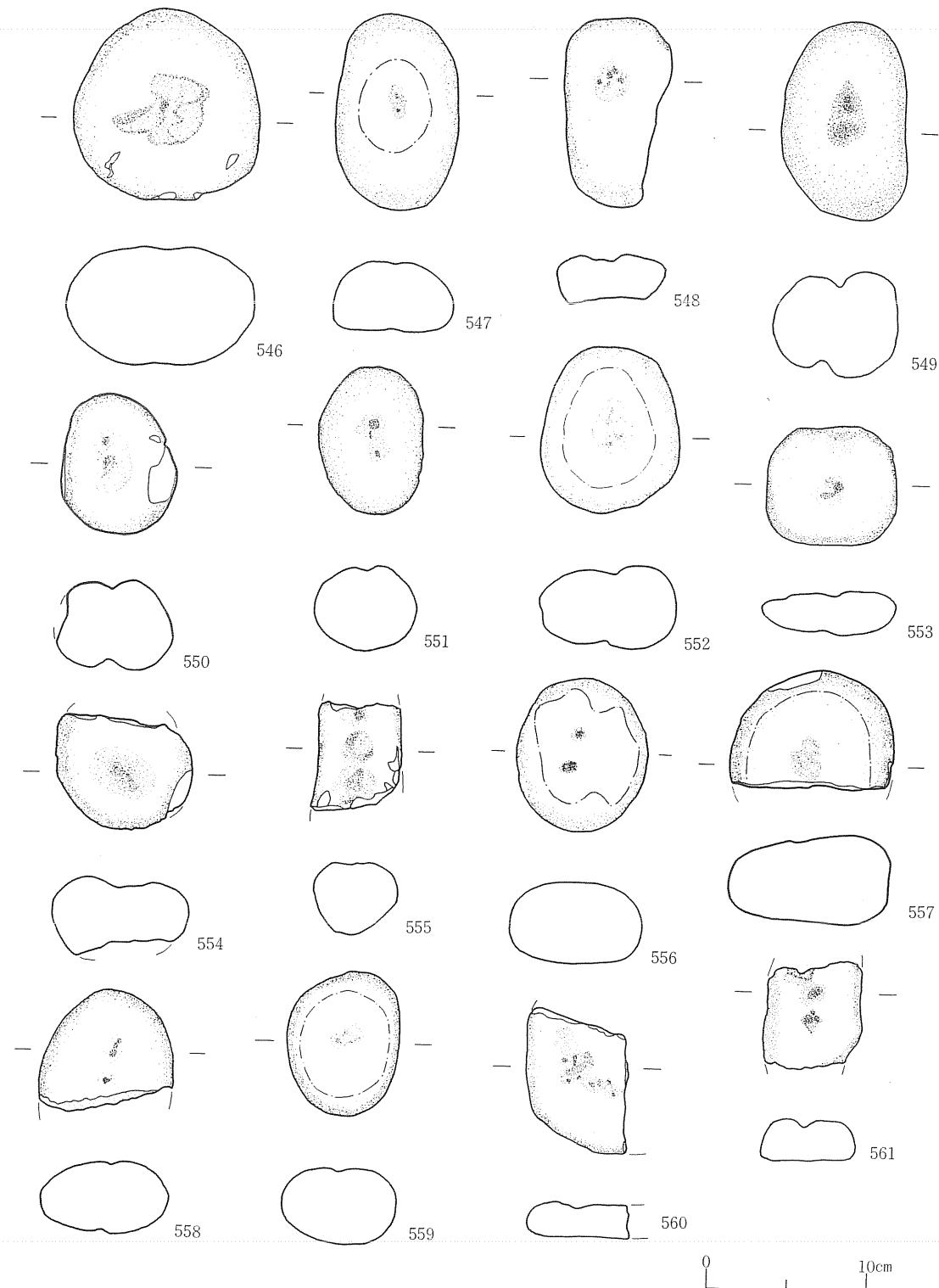
第93図 遺構外出土石器



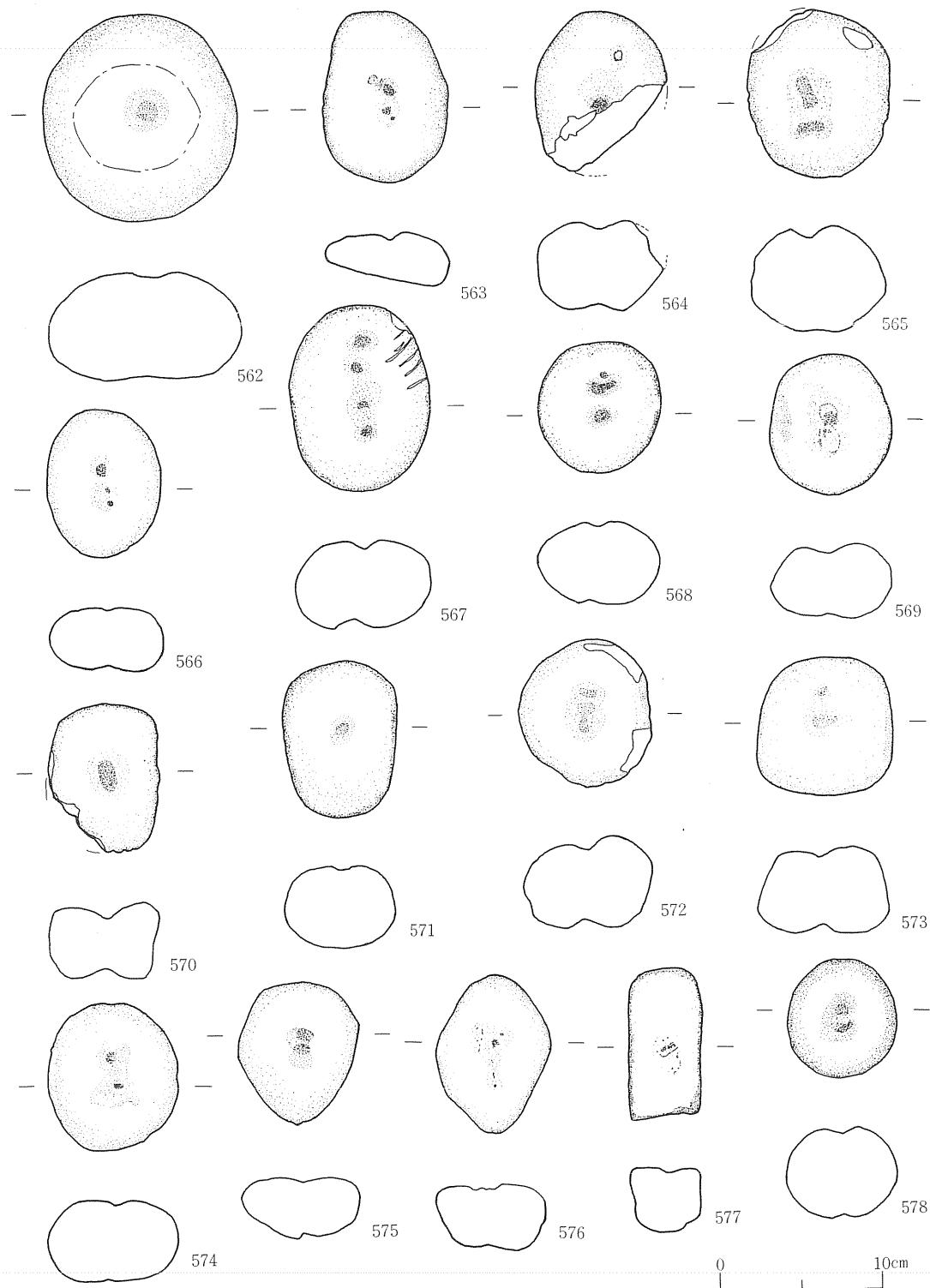
第94図 遺構外出土石器



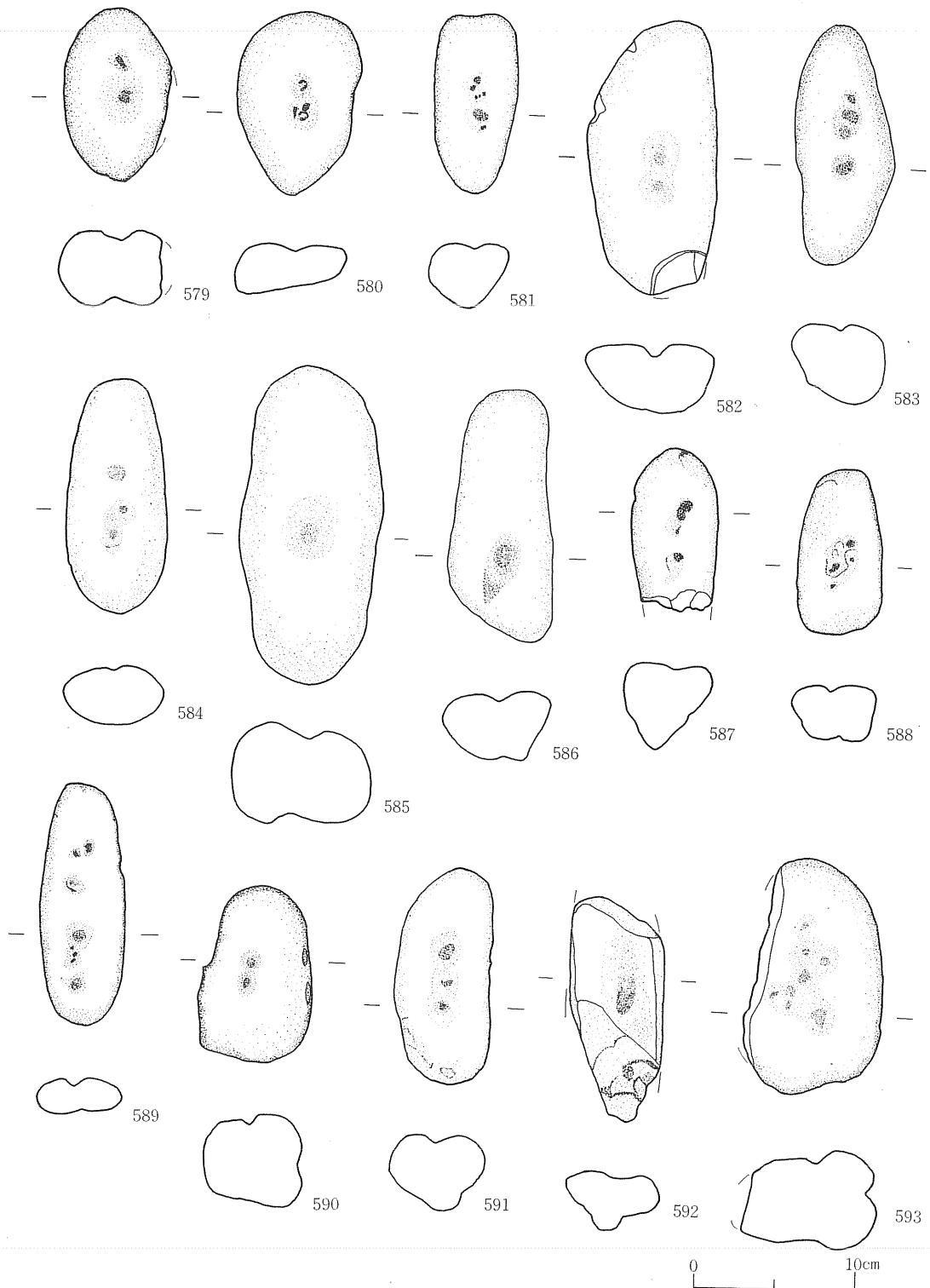
第95図 遺構外出土石器



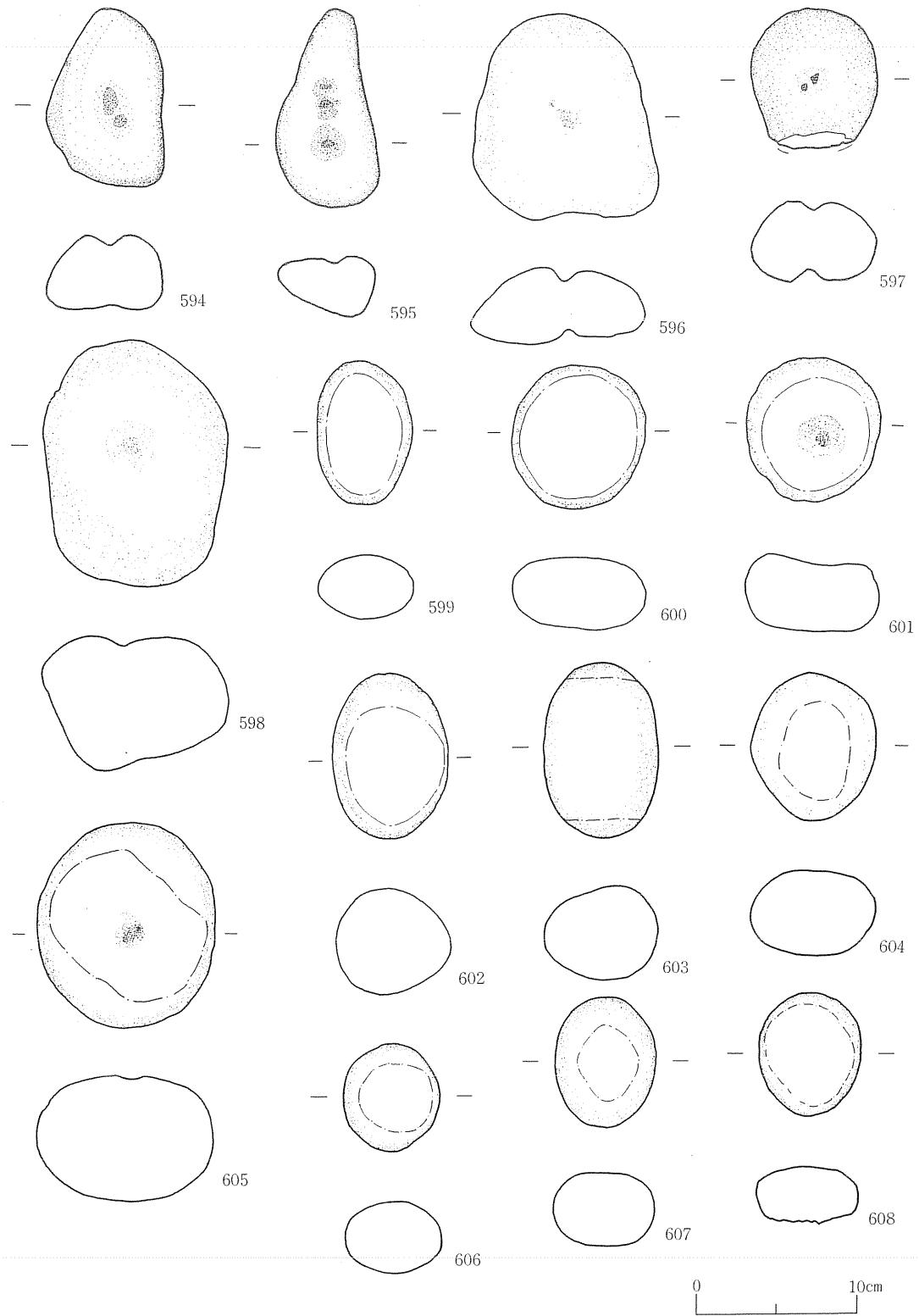
第96図 遺構外出土石器



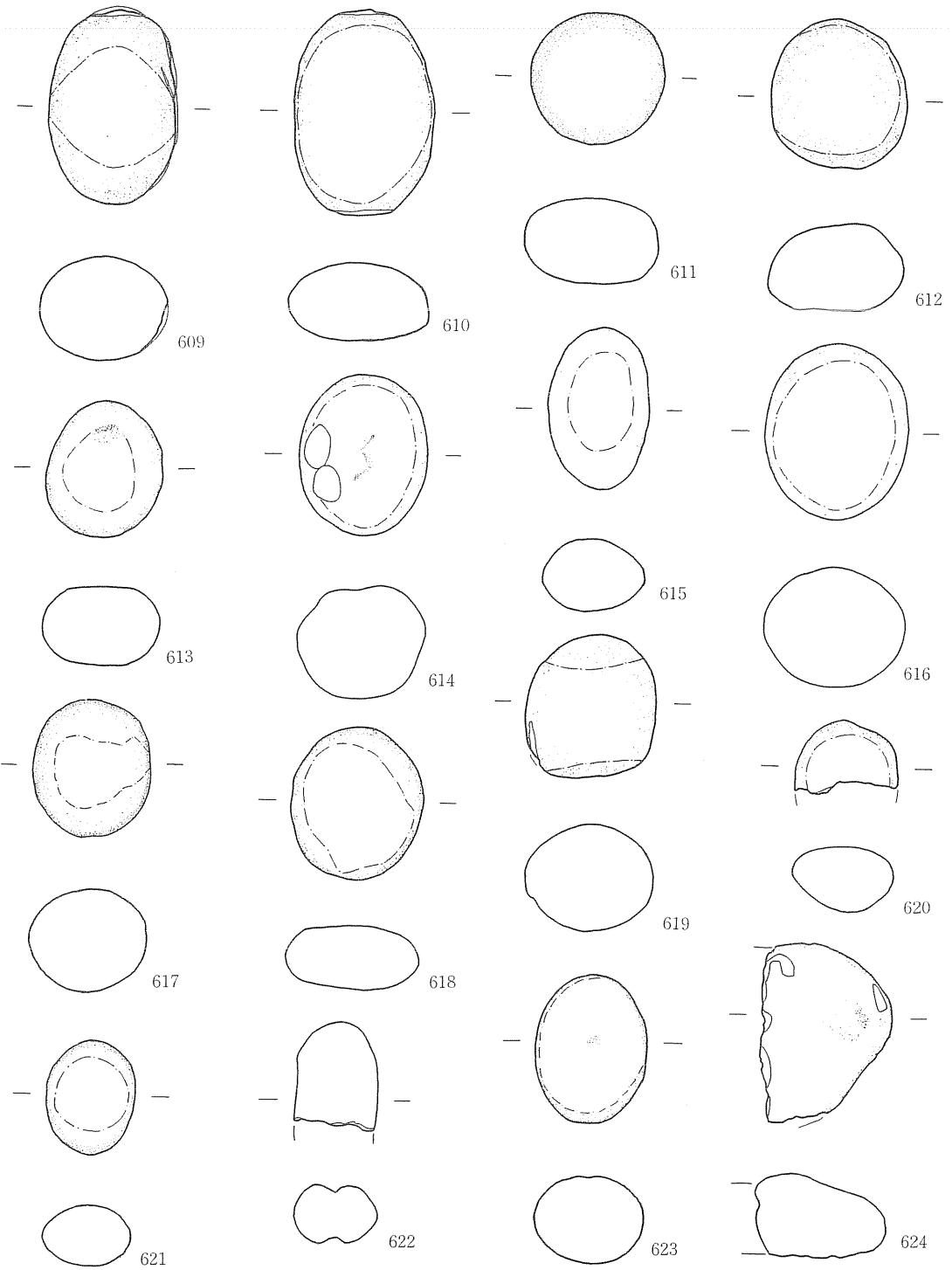
第97図 遺構外出土石器



第98図 遺構外出土石器



第99図 遺構外出土石器



0 10cm

第100図 遺構外出土石器

(316～319・323・325)

II類 木葉形を呈するもの。 (320～322・335・336・338)

III類 基部に茎を作りだしているもの。 (324・326～334・337・339)

撥形状石器 (第75図)

平面形が撥形を呈し、一端に刃部を作り出している石器である。 (340～344)

ヘラ状石器 (第76～77図)

平面形が短冊形を呈し、一端に刃部を作り出している石器である。 (345～365)

搔器・削器 (第77～79図)

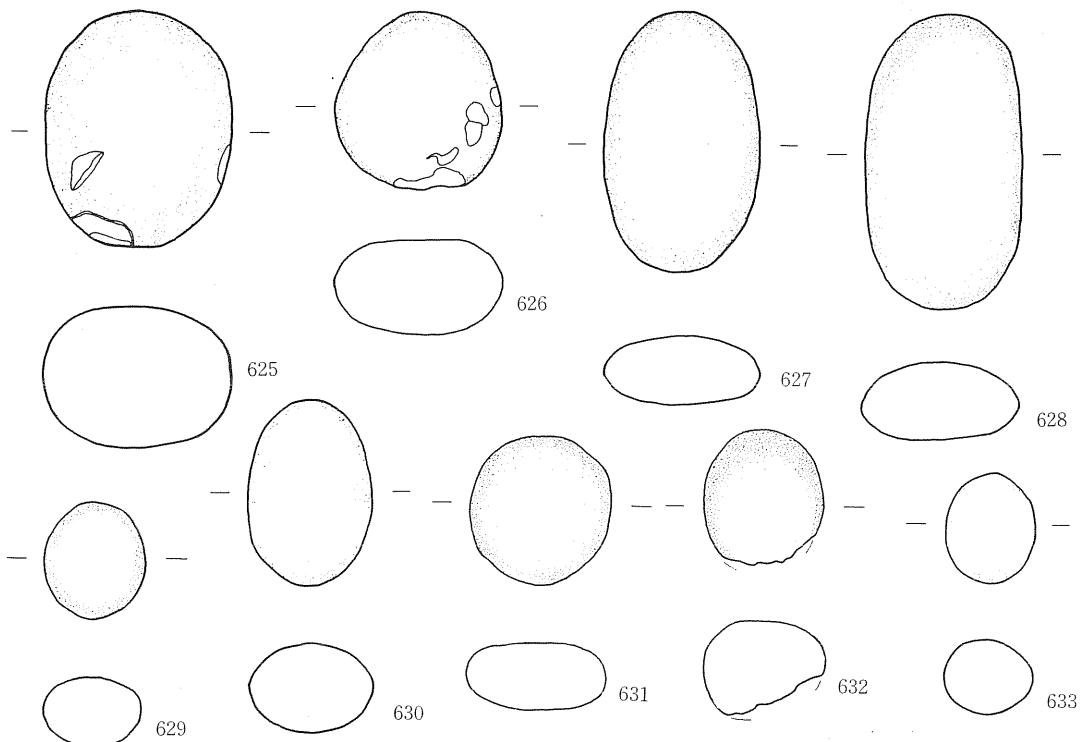
合計14点出土している。 (366～379) フレークの主軸に対する刃部の方向により分類される。

鋸齒縁石器 (第79・80図)

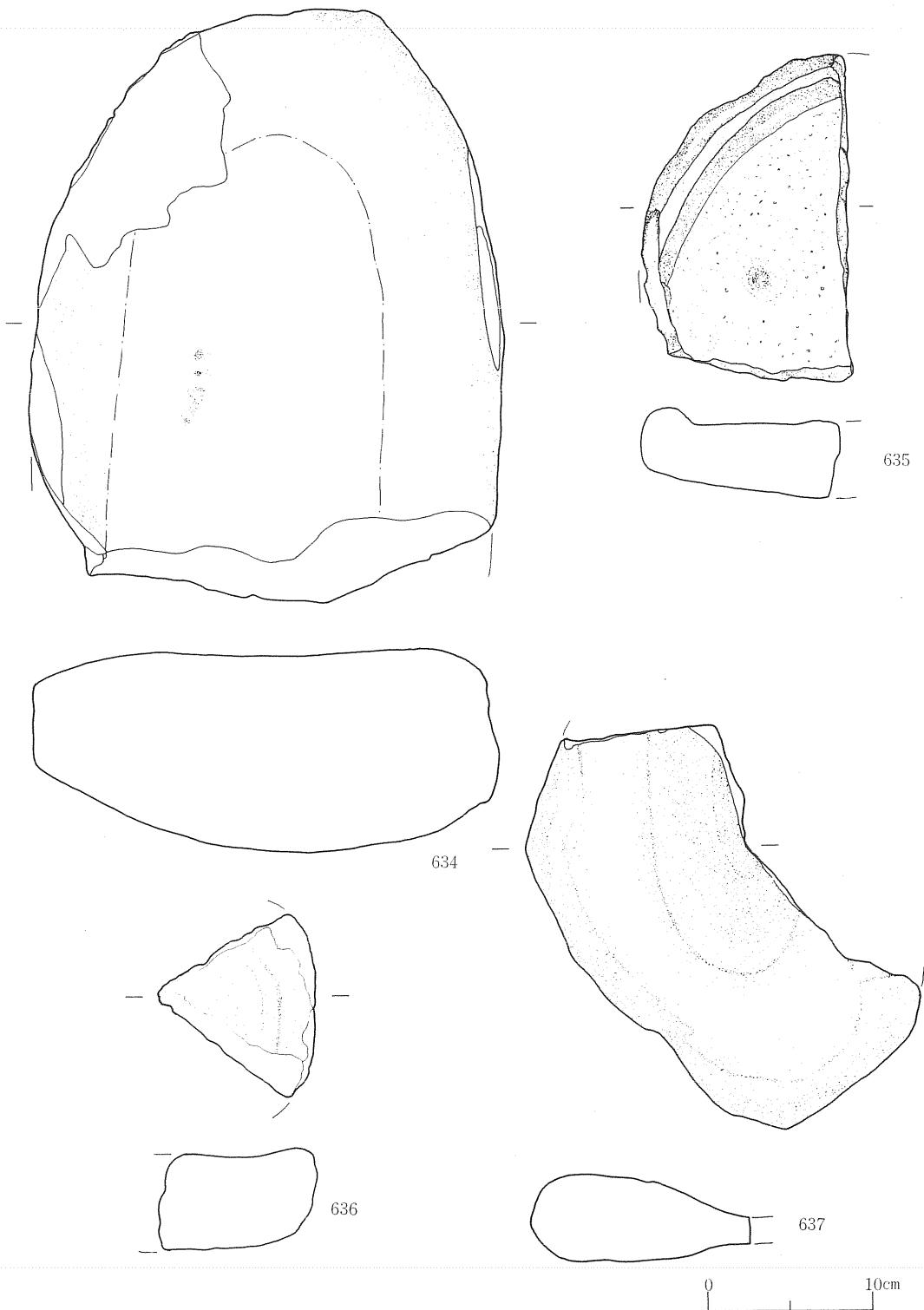
半月状をなすもので、両面加工である。 (380～394) アスファルトが上半部に付着している (380
・382・384・390・391) ものもある。

石鍬状石器 (第80・81図)

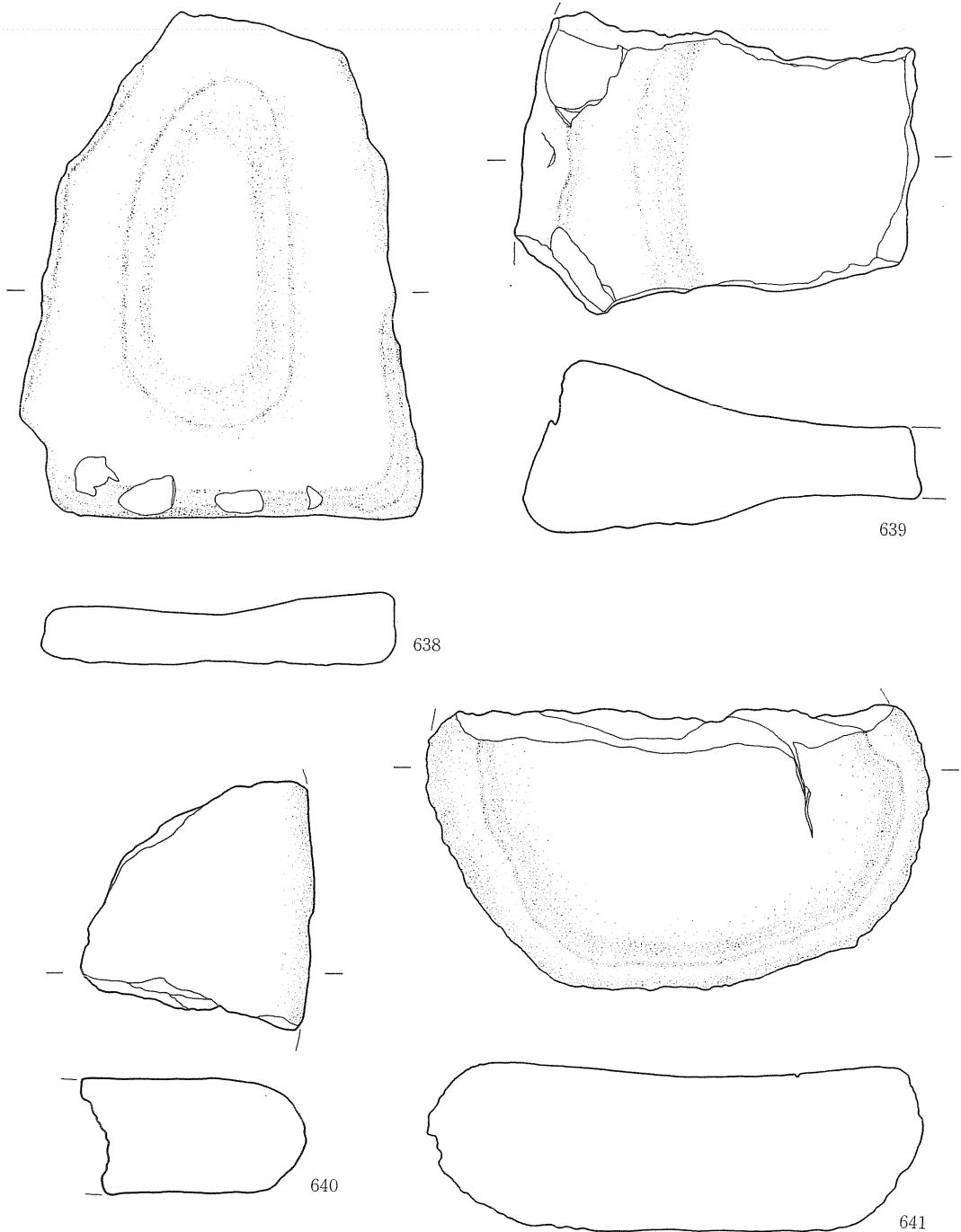
3点出土している。 (395～397)



第101図 遺構外出土石器

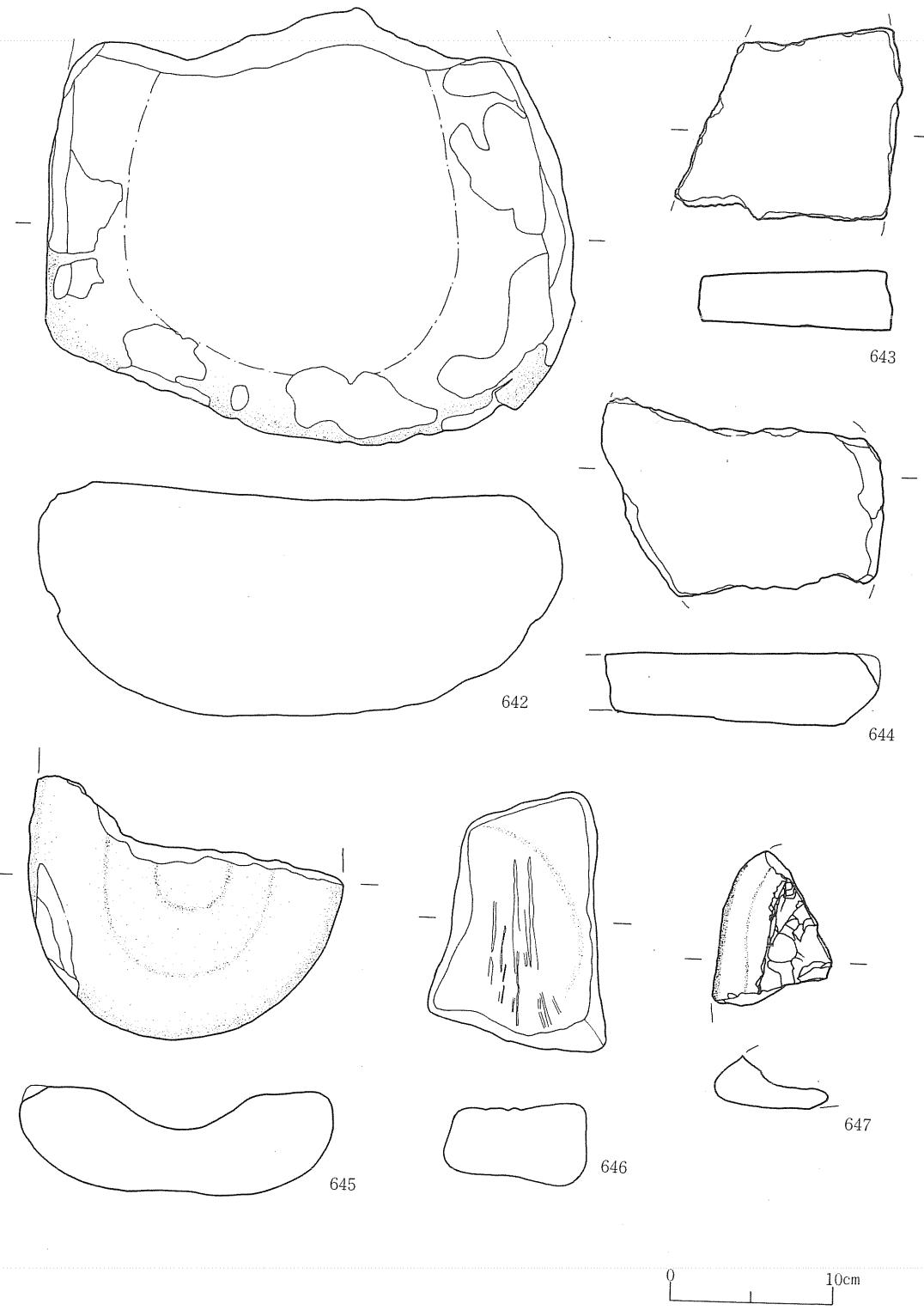


第102図 遺構外出土石器

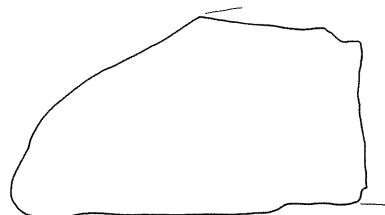
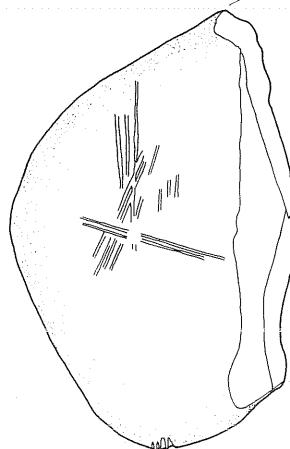
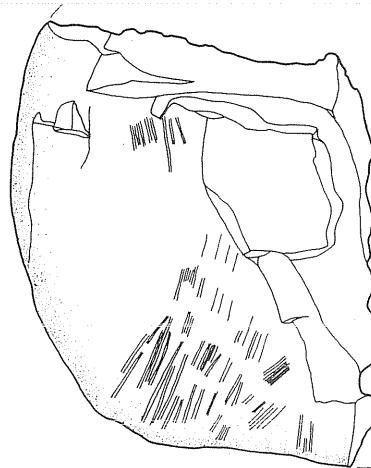


0 10cm

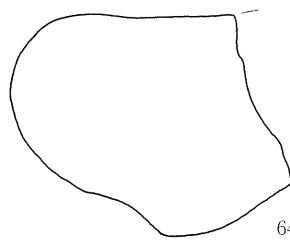
第103図 遺構外出土石器



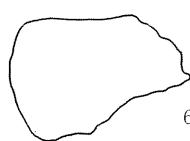
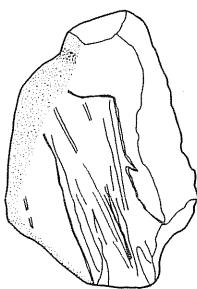
第104図 遺構外出土石器



648



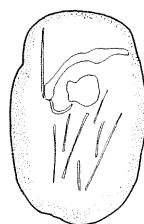
649



650



651



652



第105図 遺構外出土石器

磨製石斧（第82～87図）

合計40点出土している。全長5cm前後の小型磨製石斧（398・402）も出土しているが、全長10cm前後の中型の磨製石斧が主体である。

独鑿石（第88図）

完形品が1点（439）、破損品が1点（438）出土している。

円盤状石製品（第88図）

扁平な石を両面から荒く打ち欠いて円形に加工したもので5点（440～444）出土している。

石棒（第89～91図）

合計20点（445・446・448・450・453～456・459・460・462・463・469・470・471～475・477）

出土している。448は割れ面にびっしりとアスファルトが付着しており、割れ口を接着修理したと考えられる。

石劍（第89～91図）

合計13点（447・449・451・452・457・458・461・464～468・476）出土している。

くぼみ石（第92～99図）

123点（478～598・601・605）出土している。縦長の橢円形でくぼみ部が1列に並ぶタイプや円形で片面もしくは両面にくぼみ部があるタイプが多い。

磨石（第99～101図）

合計33点（599・600・602～604・606～633）出土している。両面、片面が、よく研磨されている。

石皿（第102～105図）

全て破損しており、19点（634～652）出土している。中央部に煤状炭化物が付着している。

まとめ

上新城中学校遺跡は、昭和29年の中学校校舎建設の際多量の遺物が出土し、縄文時代晩期を中心とした遺跡として確認された。それ以降、昭和30年度の発掘調査をはじめ、昭和54年度にも、林道工事及び小グランド造成工事に伴う発掘調査が実施されており、今回（昭和63年度～平成3年度）の中学校新校舎建築に伴い実施された発掘調査により、調査は終了した。ただし、旧中学校校舎建築に伴うと考えられる削平が激しく、遺構の有無を確認できなかった範囲も大きいため、遺跡全体の構造、性格には、不明な部分も多い。以下、これらの状況をふまえて、若干の検討を加えてみたい。

(1) 遺構について

昭和54年度の調査では、今次調査地の北、西側で土壙墓が検出されているが住居跡は確認されておらず、本遺跡の居住地域は、まだ未調査地域であった校舎付近であろうと推定していた。昭和63年度から本年度までは校舎改築に伴いこの地域全体の調査が実施された。

その結果、当初推定していたように住居跡が検出され、それを取り囲むように柵木列跡と考えられる溝が発見された。また、外側には土壙墓、土壙、土器埋設遺構などが検出されている。以下溝跡、住居跡、土壙墓について考えてみたい。

溝跡 1号、2号溝跡が、遺跡の東南側で発見された。一部、調査区外に延びることや、削平により確認できない部分もあるが、円周約185m、長軸約59m、短軸約49mほどの橢円形を呈すると考えられる。溝跡は北西部で二重になり、内側が1号溝跡、外側が2号溝跡である。北東、北西部の二箇所に溝が途切れる部分があり、柱穴がとりついている。溝底部に、ピットが認められたり、壁際に平坦面を持つ石が連続して認められていることから、柵木列のような施設であった可能性が強く、埋土出土遺物から、大洞A式期の遺構であると考えられる。両者の新旧関係は不明であるが、1号、2号溝跡に新旧関係があるとすれば、南西部のように一重になる部分（削平を受けていない部分で、溝跡が確認されなかった）も認められることから、造替えの際に、古い溝を部分的に利用していると思われる。そうすると、再利用部分と考えられる南西部の溝との連結状況から、西側の溝では、1号溝跡が古く、2号溝跡が新しいと考えられる。そして、北東・北西部の柱穴は、それぞれ溝の途切れ部の両端に1対（2本柱）ずつ配置されていることになり、切戸口のような、出入口的な施設であると考えられる。

また、同時に存在していたとすれば溝は最初から部分的に二重であったものと思われる。そして、北東・北西部の柱穴は、溝跡の途切れ部で、それぞれ方形の柱配置となることから、溝跡にとりつく掘立柱建物跡で北東部のものが1間（3.4m）×1間（3.4m）、北西部のものが1間（3.2m）×1間（3.2m）の、構造は異なるが同様に出入口的な性格をもつ施設であると考えられる。

住居跡 溝跡の内側には、住居跡が2軒発見されているが柱穴と炉のみの確認であり、構造的に

は不明な点が多いうえ遺物からの年代が特定できず、溝跡との時間的関係もはっきりしない。しかし溝の内部に確認され、溝との関連が考えられることから同時期と思われる。溝跡内部には削平が激しい部分もあり、この2軒の他にも溝跡内に住居跡が存在していた可能性もある。

土壙墓 今回の調査で49基、昭和54年度のA・B地区調査の際の94基を併せると143基になる。その配置は、溝跡の南・西・北側の地域にまとまって発見されており、全て溝跡の外側に位置している。溝跡との位置関係では、溝跡の西方を囲むような形になり、南・西・北側の3つの大きなまとまりになるようである。

土壙墓の形態は、小判形、楕円形、隅丸長方形が主体をなし、中でも楕円形が圧倒的に多い。ベンガラが確認されたのは、A地区では20基中7基で35%、B地区では74基中18基で24%である。今次調査では49基中ベンガラの確認されたものが4基で8%である。ベンガラ散布の位置から埋葬頭位を推定すると、A地区7基のうち頭位のわかるものが6基あり、北西—南西の西頭位である。B地区では18基のうち頭位の判明したものは17基であり、北西—南西の西頭位が14基、北頭位が2基、南頭位が1基である。今回の調査でベンガラが確認された土壙墓は4基であり、頭位は西頭位が3基、東頭位が1基である。玉類などの副葬品が出土したのが、A地区では20基中2基で10%、B地区では74基中14基で15%、今回の調査では49基中4基で8%である。出土遺物から、少なくとも大洞B C式期から大洞A式期まで、長期間にわたって墓域が形成されたものと考えられる。

(2) 遺物について

上新城中学校遺跡の出土遺物には、土器、石器、土製品、石製品などがある。

遺跡は、中学校建築時に北から南にかけて削平され、また、解体時にも基礎の除去などによって破壊されており、遺物の出土量は少なく土器は特に小破片が多い。出土遺物の大部分は、西から入り込む沢の沢頭にあたる5大グリッドの3～8-E～Jグリッドから出土しており、ここを遺物の捨て場と考えている。遺物の量は整理用コンテナで約100箱であり、そのうち土器は約85箱である。

縄文時代晩期の土器が圧倒的に多く、縄文時代後期、弥生、平安時代のものも微量出土している。

第1群土器は、縄文時代後期の土器である。第43図51は細い沈線と「8」の字状の隆帯で文様が施される土器で十腰内I式土器である。52～59は、入組帶状文が施され、区画内に連続刻目文を充填している。これらの土器は、後期最終末の新地4式土器に比定できるものである。

第2群土器から第7群土器までは縄文時代晩期の土器で、本遺跡では、大洞B・B C・C₁・C₂・A・A'式の各型式が、それぞれ出土している。個々の土器については遺構外出土土器の項で述べているので省略し、実測、拓本図として取り上げた時期の明確なもの262点について各型式別の出土割合をみてみたい。そうすると大洞B式が19点-7.1%、B C式が、16点-6.1%、C₁式が33点-12.6%、C₂式が18点-6.9%、A式が166点-63.4%、A'式が10点-3.8%となる。大洞A式土器が63.4%と圧倒的に多く、次に多い大洞C₁式土器12.6%との差は非常に大きい。

器形についてみると、深鉢、鉢、台付浅鉢、浅鉢、壺、注口土器などがある。各時期をとおして

鉢形土器が最も多く出土しているが、大洞C₁式土器では浅鉢形土器、大洞A式土器では壺形土器の割合が多くなる。

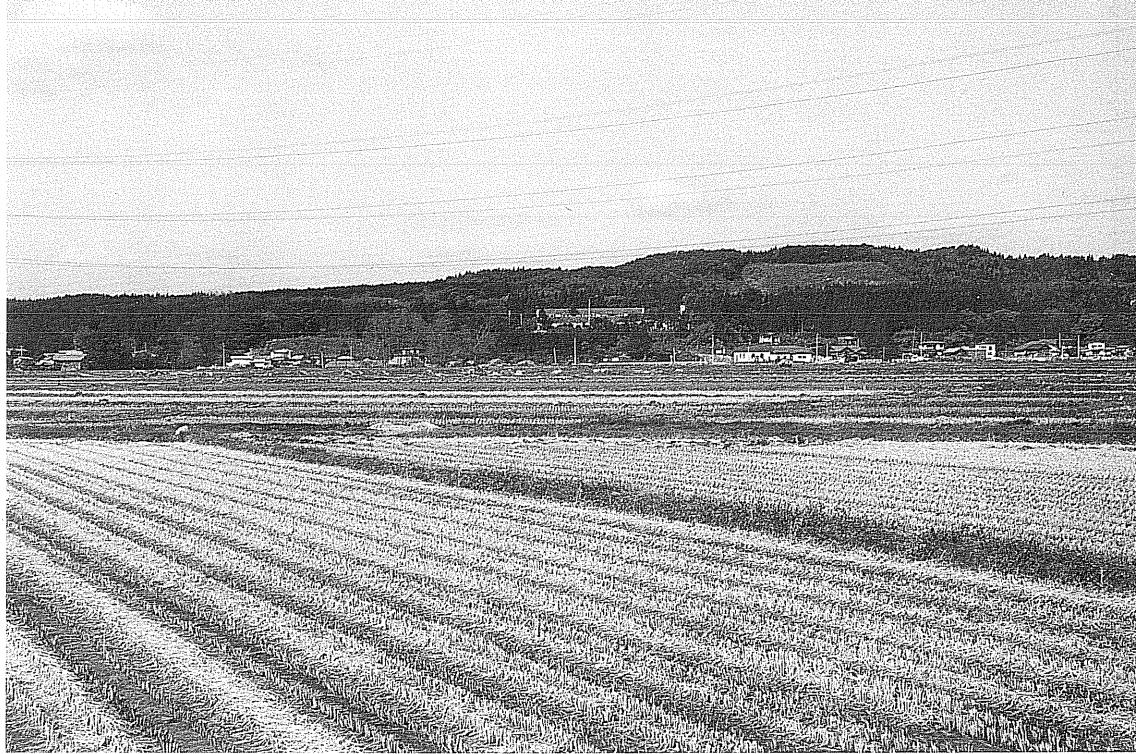
このように上新城中学校遺跡は、溝（柵木列跡）が周る集落とその外側に土壙墓、土壙が存在する遺跡であることが判明した。土壙墓の時期は大洞B C式期から大洞A式期にまで及び、溝跡の時期（大洞A式期）と一致しないものも多数あることから、それぞれの時期に伴う集落の存在が周辺地域に予想される。ただ、溝（柵木列跡）が周る内部には土壙墓が全く検出されておらず意識して集落と墓域を区別していたものと考えられる。溝（柵木列跡）は、規模、形態、時期は異なるが秋田市四ツ小屋の地蔵田B遺跡と類似する点もあり、他の資料の増加を待たなければならないが、縄文時代晩期終末の集落の在り方を示唆する遺跡の一つと考えられる。

参考文献（年度順）

- 1968 岩木山刊行会 「岩木山」—岩木山麓古代遺跡—
- 1975 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第31集「泉山遺跡発掘調査報告書」一般県道櫛引上名久井三戸線道路改良工事
- 1976 青森県教育委員会 「水木沢遺跡」発掘調査報告書 一般国道279号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 1980 秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡」—林道工事・小グランド造成に伴う緊急発掘調査報告書秋田市産業部
- 1948 青森県立郷土館 青森県立郷土館 考古第一第6集 亀ヶ岡石器時代遺跡
- 1986 北上市教育委員会 九年橋遺跡第9次調査報告書
- 1986 秋田市教育委員会 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」地蔵田B遺跡 台A遺跡 湯ノ沢I遺跡 湯ノ沢F遺跡
- 1987 秋田市教育委員会 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」地方遺跡台B遺跡
- 1989 秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡」—学校改築に伴う緊急発掘調査概要
- 1991 秋田市教育委員会 「上新城中学校遺跡」—学校改築に伴う緊急発掘調査概報



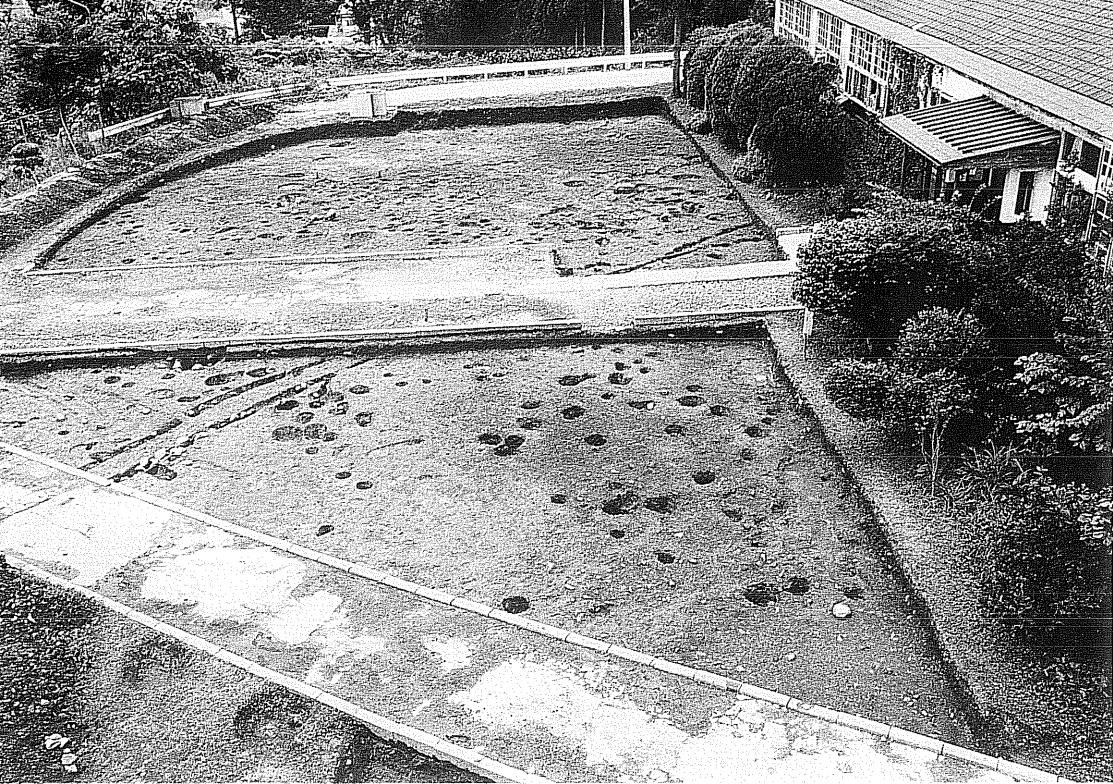
第106図 遺構配置図



遺跡遠景（南東→）



昭和63年度調査区近景（西→）



昭和63年度、調査区近景（東→）



昭和63年度、調査区、集石状況（東→）



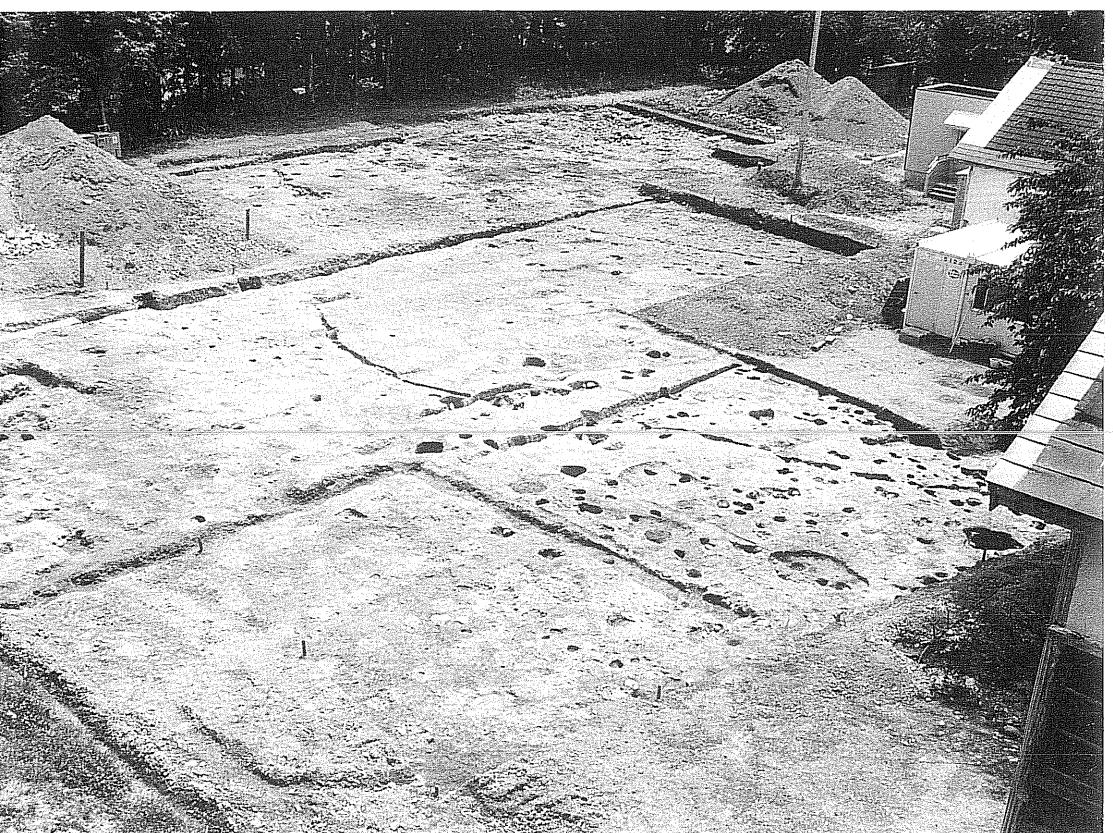
平成元年度、南側調査区全景（西→）



平成元年度、北側調査区全景（西→）



平成 2 年度、調査区全景（北→）



平成 2 年度、調査区全景（北西→）



平成 2 年度、北東部調査区全景、土壌墓検出状況（北西→）



平成 3 年度、調査区全景（東→）

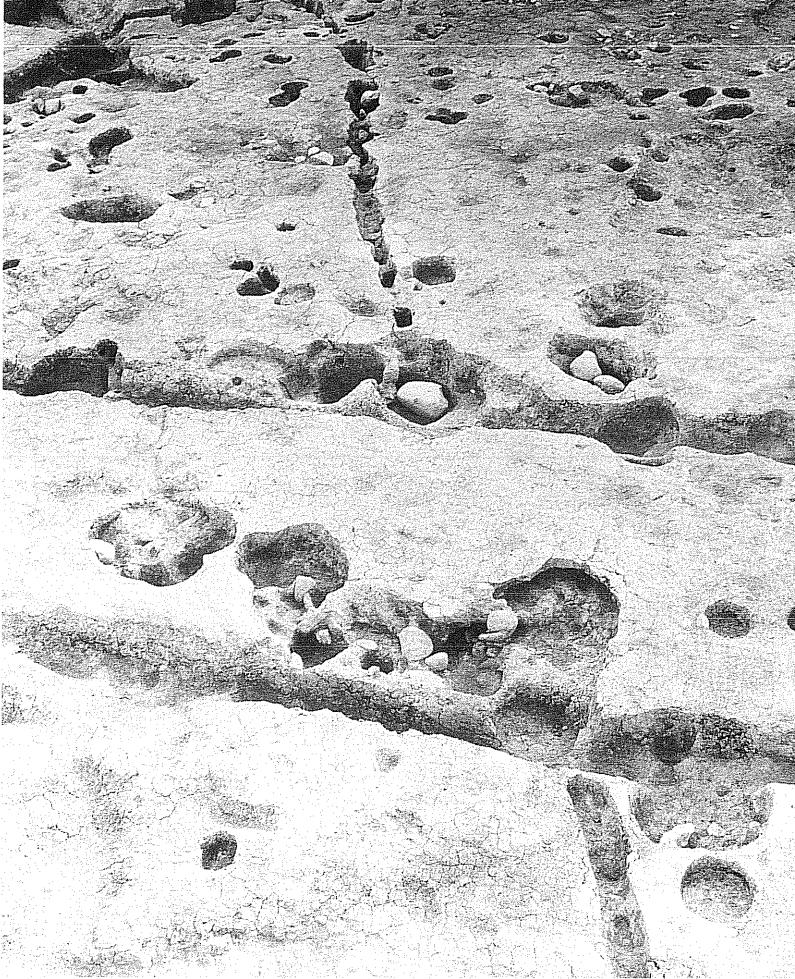


1 · 2号溝跡検出状況 昭和63年度（西→）



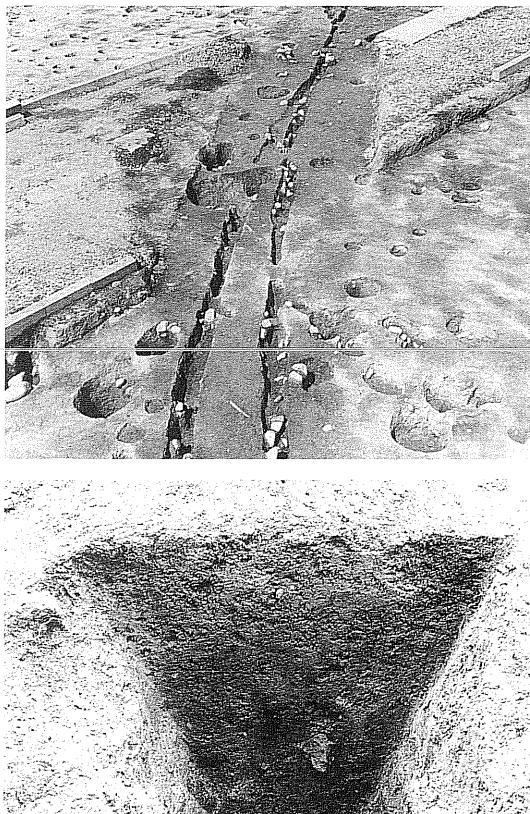
1 · 2号溝跡検出状況 平成3年度（東→）

右. 1号溝跡検出状況近景
平成2年度(東→)



中右. 1・2号溝跡近景(北東→)
左. 昭和63年度

下. 1号溝跡断面(南→)





2号住居跡（南西→）



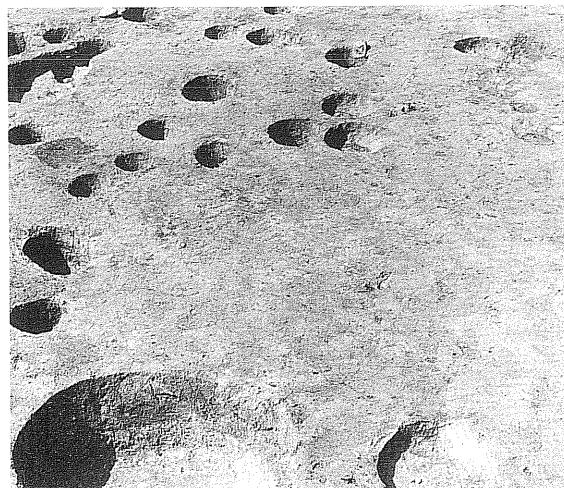
1号柱穴跡（北→）



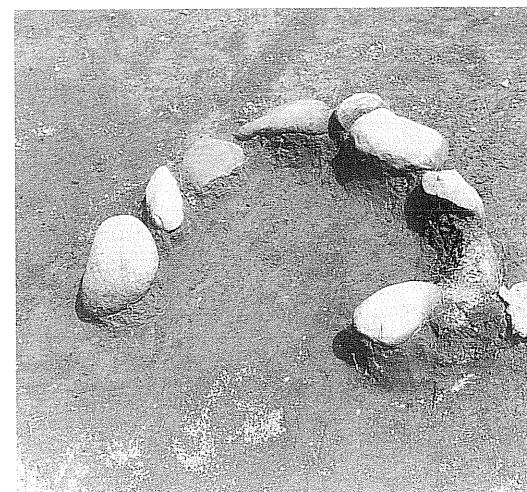
2号柱穴跡遠景（北東→）



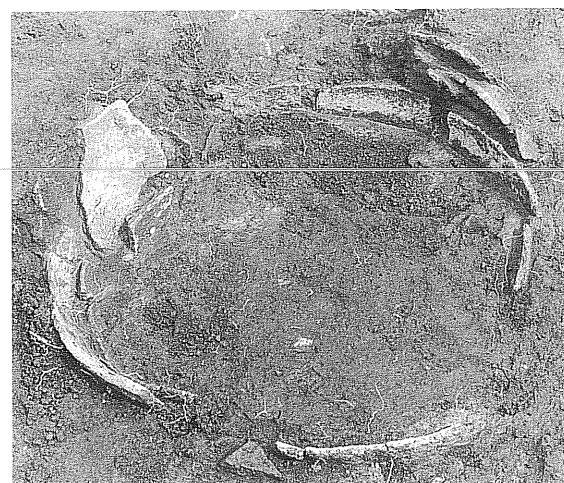
2号柱穴跡近景（北東→）



1号住居跡（南→）



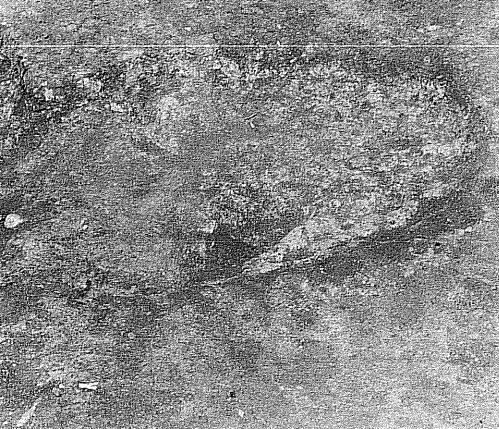
石窯



土器埋設遺構



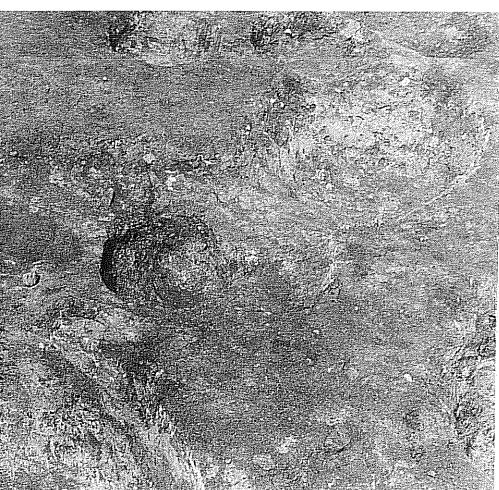
土器埋設遺構断面



1号土壙墓（南西→）



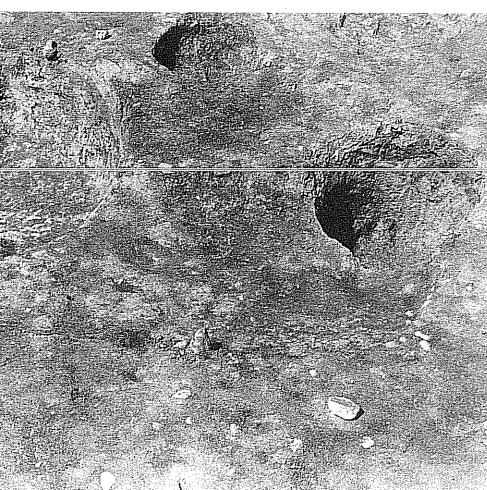
2号土壙墓（西→）



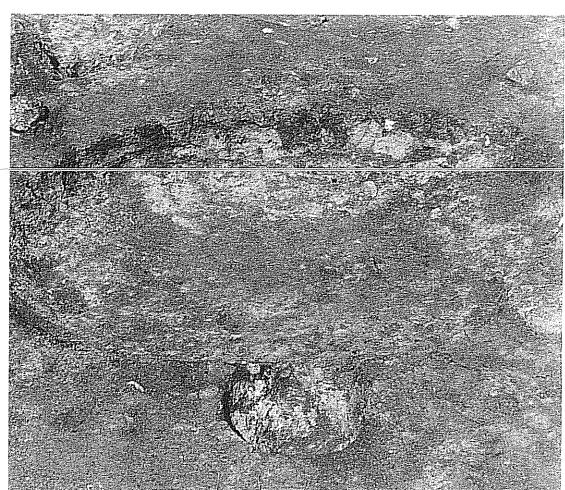
3号土壙墓（南西→）



4号土壙墓（南西→）



5号土壙墓（南→）



6号土壙墓（南西→）



7号土壙墓（西→）



8号土壙墓（南西→）



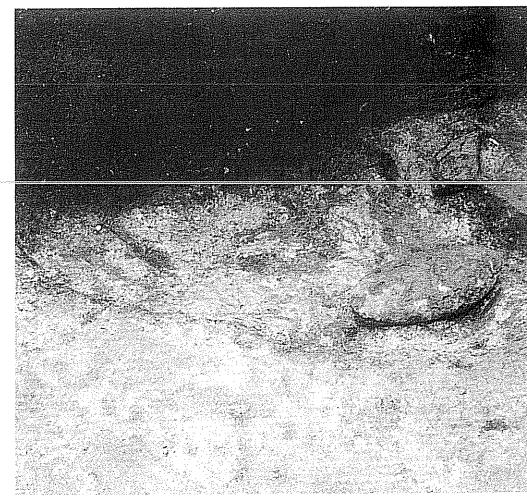
9号土壙墓（南→）



10号土壙墓（西→）



11号土壙墓（南→）



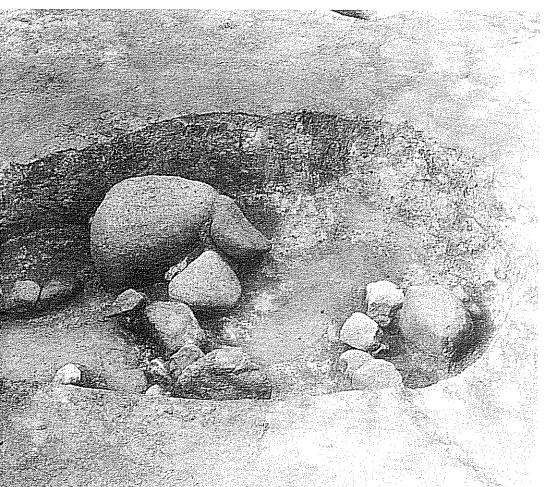
12号土壙墓（北東→）



13号土壙墓（西→）



13・14号土壙墓（南西→）



14号土壙墓、礫検出状況（南→）



14号土壙墓（南→）



15号土壙墓（東→）



16号土壙墓（東→）